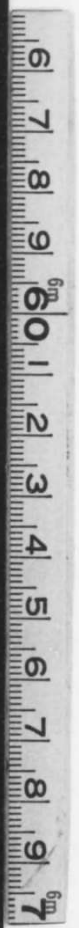


續國譯漢文大成

文學部 七十一

309
65

映
天



始



續國譯漢文大成

文學部第七十一冊(第十八帙の三)

王右丞集の二

吉田待郎氏

紅指本



王右丞集卷六

古詩二十六首

夷門歌

七國雄雌猶未分，
攻城殺將何紛紛。
秦兵益圍邯鄲急，
魏王不救平原君。
公子爲嬴停驪馬，
執轡逾恭意逾下。
亥爲屠肆鼓刀人，
嬴乃夷門抱關者。

夷門的歌

七國雄雌猶未だ分たず、
城を攻め將を殺して何ぞ紛紛たる、
秦兵は益す邯鄲を圍むこと急なり、
魏王は救はず平原君を、
公子嬴が爲めに驪馬を停む、
轡を執りて逾よ恭しく意逾よ下る、
亥は屠肆刀を鼓するの人たり、
嬴は乃ち夷門關を抱くもの者、

【注解】

七國、戰國の時、秦、楚、燕、齊、韓、趙、魏、是の七國は並んで強國なるを以て、亦七雄と稱す、邯鄲、城は靜なり、唯は敗なり、秦の東方側の秦晉に、十二國、未有二國、一とあり、屠肆、屠殺場を曰ふ、抱關、持守勿失曰抱とありて、關門を嚴守して、人の出入を監視するなり、慷慨、憤慨と同じ、國事の爲に激昂する義、意氣は猶ほ氣概と言ふがことし、

古詩 夷門歌

非但慷慨獻奇謀

但慷慨奇謀を獻するのみにあらず、

意氣兼將身命酬

意氣兼ねて身命を將て酬ゆ、

向風刎頸送公子

風に向ひ頸を刎ねて公子を送る、

七十老翁何所求

七十の老翁何の求むる所ぞ、

【題義】夷門の歌は夷門の監者侯嬴が事を詠ふが主なれば、是の題を設けしなり、

【大意】此の時を解する、毎句に就いて言ふときは反つて意を害する處あり、全首を通じて辨すべし、史記に、秦は趙の邯鄲を攻むること急、魏の公子無忌が姊は趙の恵文王の弟、平原君が夫人たり、數ば魏王及び公子に書を送り救を請ふ、魏王は將軍晉鄙をして之を救はしむ、秦王、使をして告げしめて曰く、必ず兵を移して先づ魏を撃たん、魏恐れて晉鄙が軍を止む、無忌、秦の軍に赴かんとし、夷門を過ぎ、侯嬴を見る、爲に計る、晉鄙が兵符、魏王の臥内に在り、無忌曾て如姬が爲に父の讎を報ゆるあり、如姬に請うて鄙が符を竊み、鄙が軍を奪はん、鄙若し聽かずんば、力士朱亥をして鄙を撃殺せしめん、無忌、其の計を用ひ、卒に趙を救うて秦軍を退却せしむ、侯嬴は魏の大梁夷門の監者なり、無忌、初め甚だ之を敬禮す、一日置酒して大に賓客を會す、公子無忌、車騎を從へ、左を慮しうして自ら侯生を迎ふ、侯生直ちに上載す、公子轡を執りて逾よ恭しうす、侯生公子に謂ふ、臣が

客に朱亥なる者あり、市屠の中に在り、願はくは車騎を枉げて之に過ぎ、公子、車を引きて市に入る、侯生下りて亥を見る、故らに立つこと久しうして與に語る、微しく公子の顔色愈よ和するを察し、亥を謝し家に至る、侯生を引きて上座に坐せしめ、遍く賓客に贊す、故に侯生朱亥、感激して公子の爲めに趙を救ひ秦を卻くるの功を成す、侯生先づ無忌に謂つて曰く、臣宜しく従行すべきも老いて能はず、請ふ公子が行いて晉鄙の軍に至るの目を數へて、北向して自刎し以て公子を送らん、朱亥も亦曰く、臣は乃ち市井に刀を鼓するの屠者、公子親しく數ば之を存す、今公子急あり、乃ち臣、命を致すの秋なり、遂に公子と俱に征く、

【餘論】此の篇、三換韻して成る、右丞の詩として、各選本之を取らざるは無し、明の顧可久曰く、何所求の三字、感激の意を含蓄す、太史公が本傳宛轉千餘言にして、此の敘事數語、極めて簡要明盡す、又公子無忌が客を重んじ、亥嬴が俠に在ることを嘉すること言外に溢る、結尤も斬絶、力量あり妙甚と、清の趙殿成曰く、夷門抱關、屠肆鼓刀、二豪を點化するの語、對仗天成、已に墨妙を徵す、末句復段灼が鄂艾を理する語を借用して、尤も筆精を見る、事を使うて此に至る、未だ後人の步驟を許さず、清の黃香石は『唐賢三昧集』に於て評して曰く、七古の句法、大約三平を以て正調と爲す、平韻到底の者、尤も宜しく多く此の調を用ふべし、句乃ち平弱ならず、今謂ふ、三平とは何紛紛、平原君を指す、偶ま此の詩に於て然るも、七古悉く此の如くならざるものあり、黃評は猶ほ研究の餘

新秦郡松樹歌

新秦郡松樹の歌

青青山上松、

青青たり山上の松、

數里不見今夏逢、

數里見え今夏に逢ふ、

不見君心相憶、

君を見ざれば心相憶ふ、

此心向君君應識、

此の心君に向ふ君應に識るべし、

爲君顔色高且閒、

君が爲めに顔色高うして且閒なり、

亭亭迴出浮雲間、

亭亭迴に出づ浮雲の間、

【題義】

新秦郡に生ずる所の松樹を題歌するなり、新秦郡は關内道の麟州に在り、開元十二年、勝州の連谷銀城を折ちて之を置く、十四年廢し、天寶元年復置く、

【大意】

數里に涉りて山上の松は青青と連なる、而かも數里の間は見ずして今夏に逢ふ、君を見ざる時は心に於て相憶ふ、此の君を憶ふの心は君も應に識るべきなり、君が爲めに我が顔色は且高く且

閒なり、亭亭として迴かに浮雲の間に出づるを覺ゆ、

【餘論】

此の篇、當面は松を詠じて、裏面は自己を寫し出すもの、顧可久曰く、短短寫、亦自婉曲清古、

青雀歌

青雀の歌

青雀翅羽短、

青雀翅羽短く、

未能遠食玉山禾、

未だ遠く玉山の禾を食ふこと能はず、

猶勝黃雀爭上下、

猶勝れり黃雀の争うて上下し、

唧唧空倉復若何、

空倉に唧唧として復若何、

山禾、嵯の鮑照の時に、誠不及青鳥、遠食玉山禾とあり、黃雀、春鳥なり、空倉、北周庾開府の時に、饑饉空倉雀、寒雀類蜂蟻とあり、

【大意】

青雀翅羽短し、短きが故に雄飛して遠く玉山の禾を食ふ能はず、其の食ふ能はざるは如何にも無力の如く見ゆれども、之を黃雀の争うて上下し、空倉を繞りて唧唧と噪ぐものに比すれば、遙かに之を勝れりと謂ふべし、

【注解】青雀、「爾雅」に桑扈屬とあり、郭璞曰く、俗之を青雀と謂ふ、鶯曲り肉を食ふ、好んで脂膏を食むとあり、「洞冥記」に、王夫人武帝を誅す、青雀、朝城門に羣飛するより、乃ち改めて青雀門と爲す、玉

【餘論】青雀を以て自況し、黃雀を以て他を況するもの如し、感ずる所ありての詩、徒作にあらざるを知る、本集に盧象と王縉と崔興宗と裴迪と四家の和詩を載す、盧詩、嘒嘒たり青雀見、飛來飛去天池に仰ぐ、逍遙飲啄涯分に安んず、何ぞ扶搖九萬を假ることを爲ん、王詩、林間の青雀兒、來往翻翻一枝を繞る、言ふこと莫かれ環を衝んで報ずることを解せずと、但問ふ君恩今若爲、崔詩、青唇青林を繞る、翻翻たる陋體一微禽、長く藩籬の下に在る應からず、他日雲を凌ぐ誰か心を見ん、裴詩、動息自ら性に適ふ、曾て妄りに燕雀と羣せず、幸に忝うす鶯鷺早く相識るを、何れの時か提攜して青雲を致さん、

隴頭吟

隴頭の吟

長城少年游俠客、
夜上戍樓看太白、
隴頭明月迴臨關、
隴上行人夜吹笛、
關西老将不勝愁、

長城の少年游俠の客、
夜戍樓に上りて太白を見る、
隴頭の明月迴かに關に臨む、
隴上の行人夜笛を吹く、
關西の老将愁に勝へず、

【注解】長城、『史記蒙恬傳』に、秦已并天下、乃使蒙恬將三十萬衆、築長城とあり、游俠客、漢の班固が『西都賦』に、毒曲豪舉、游俠之雄とあり、戍樓、唐開府の時に、成德使張儉、山都落鎮固とあり、火の見樓を謂ふ、太白、明星なり、管

駐馬聽之雙淚流、
身經大小百餘戰、
麾下偏裨萬戶侯、
蘇武纔爲典屬國、
節旄落盡海西頭、

馬を駐め之を聽きて雙淚流る、
身は經たり大小百餘戰、
麾下の偏裨萬戶侯、
蘇武纔かに典屬國たり、
節旄落ち盡くす海西の頭、

書』に、太白過邊、以て兵の高増進遊擊を候ふ、伏を見て兵を用ふ、昔衆の吉とあり、隴頭、『漢書』文帝曰、惜乎李廣が『後漢書』に、關西出將、關東出和とあり、大小戰、宣宏が『後漢紀』に、漢祖與項羽戰、大

小百餘とあり、麾下、即ち部下なり、『史記』に、灌夫歸入吳軍、至吳將麾下、一處謂大將之旗、偏裨、一方の大將を謂ふ、『漢書』に、大將軍出、必有偏裨、所以攝成武、參計策とあり、今日の參謀官の意味もあり、萬戶侯、百萬石の大名なり、『漢書』文帝曰、惜乎李廣不逢時、令當高祖世、萬戶侯豈足道哉とあり、蘇武、『漢書昭帝紀』に、移中監蘇武使匈奴、留單于庭、十九歲乃還、李使全節、以武爲典屬國、賜錢百萬とあり、節旄落盡、『漢書昭帝紀』に、武既至海上、虜食不至、捕野鼠、去草食、而食之、杖、漢節、牧羊、臥起操持、節旄盡落とあり、

【題義】隴頭吟、隴頭水、古代樂府の題目なり、隴は甘肅の地に屬して、索莫極まりなし、梁の戴嵩の詩に、昔聽隴頭吟、平居已流涕、征人行役の苦を想ひ、此の頭目に憑つて以て其の可憐の狀を言ふなり、

【大意】長城の下に遊ぶ少年は元來俠氣あるものなり、一夜戍樓に上りて以て太白星を見る、此の時に當り、隴山に登るの明月は光廻かに隴關に臨む、隴上を行くの人は誰なるを知らず、暗に笛

を吹く、笛聲を聴く所の老將軍は怒に勝へず、馬を駐めて悲壯の音を聴いて雙淚を流す、我が身は將軍として大小百餘戰を経て來る、而して我が麾下たりし偏裨は皆萬戶侯に封せらるるの光榮を得たり、我が身は古の蘇武の如く蠻地に於て十九年も漢節を持して變せず、而も官は纔かに典屬國に過ぎず、漢の節旄は落ち盡くして、身は猶海西の頭に在り、

【餘論】此の篇二韻を以て成る、題目已に悲壯、詩悲壯ならざるを得ず、陳後主、梁元帝、北周の徐陵、劉孝威、下りて唐の諸名人、此の題詠詩少なからず、名篇も亦多し、而して多くは五言、七言にして、此の如く悲壯なるもの世多く有らず、顧可久曰く、句法頓挫流麗、竝三使二事、一隱一顯、是變幻作法、悲壯雄渾、劉須溪曰く、次第轉摺、悵惘何限、又非長篇所及、『河嶽英靈集』、『唐賢三昧集』皆之を收む、當然と謂ふ可し、

老將行

少年十五二十時

少年十五二十の時、

步行奪取胡馬騎

步行胡馬を奪取して騎る、

射殺陰山白額虎

射殺す陰山白額の虎、

老將行

【注解】白額虎、『晉書周處傳』に、周處、父母に關つて曰く、今、時和し歳豐かなり、何を呑んで樂しますや、父老嘆じて曰く、三青未だ餘

肯數鄴下黃鬚兒

肯て數へんや鄴下の黃鬚兒、

一身轉戰三千里

一身轉戰す三千里、

一劍曾當百萬師

一劍曾て當る百萬の師、

漢兵奮迅如霹靂

漢兵奮迅して霹靂の如く、

虜騎崩騰畏蒺藜

虜騎崩騰蒺藜を畏る、

衛青不敗由天幸

衛青敗れざるは天幸に由る、

李廣無功緣數奇

李廣功無きは數奇に緣る、

自從棄置便衰朽

棄置衰朽に便してより、

世事蹉跎成白首

世事蹉跎として白首と成る、

昔時飛箭無全目

昔時飛箭全目無く、

今日垂楊生左肘

今日垂楊左肘に生ず、

路傍時賣故侯瓜

路傍時に賣る故侯の瓜、

門前學種先生柳

門前種うることを學ぶ先生の柳、

かず、何の樂か之れ有らん、處曰く何の謂ぞや、曰く南山の白額猛獸一害なり、處乃ち山に入りて之を射殺すとあり、鄴下、鄴縣下なり、今河南の臨漳縣の墟なり、黃鬚兒、『世說注』に魏時を引きて曰く、任城の威王、性剛勇にして黃鬚、北して代郡を討つ、國麾下百餘人と、虜を突いて走る、太祖聞きて曰く我が黃鬚兒用ふべしと、轉戰、相繼逐して戰闘するなり、『後漢書』に、陰、越敵阻、轉戰千里とあり、霹靂は電雷の響なり、蒺藜、和語の「ハメシ」、海濱の沙地に生ずる蔓草、三角又は四角のトゲあり、人を刺す、兵家倣を以て此の實の形を製り、以て敵路に布く、今日の鐵條網と同じきものなり、天幸、『漢書』に霍去病は大將軍に從つて懸鞬尉と爲る、兵を引率して深

茫茫古木連窮巷、
寥落寒山對虛牖。
誓令疏勒出飛泉、
不似潁川空使酒。
賀蘭山下陣如雲、
節使三河募年少。
詔書五道出將軍、
試拂鐵衣如雪色。
聊持寶劍動星文、
願得燕弓射天將。
恥令越甲鳴吾君、
莫嫌舊日雲中守。

茫茫たる古木窮巷に連り、
寥落たる寒山虚牖に對す、
誓つて疏勒をして飛泉を出さしむ、
似ず潁川空しく酒を使ふに、
賀蘭山下陣雲の如く、
節使三河年少を募る、
詔書五道將軍に出づ、
試みに鐵衣を拂へば雪色の如く、
聊か寶劍を持して星文を動かす、
願はくは燕弓の天將を射るを得ん、
恥らしくは越甲をして吾が君に鳴らしむ、
嫌ふこと莫かれ舊日雲中の守るを、

入するも、天中ありて、未だ嘗て固
絶せずと、猶昔は右丞が誤用したる
なり、驚奇、入聲音韻と去聲音韻との
區別あり、余が先師は入聲韻にて「サ
クキ」と讀むべし、スウキ」と讀むべ
からずと、然るに今之を考ふ、「漢書
如淳注」に數爲「句叙所」歟、所謂シ
バシバ句叙に敗らるる意味に解すれ
ば、必ず昔朝ならざるを得ず、今の
句は李唐が命數の不偶なるを言ふに
あれば、去聲韻にて「スウキ」が正
しからんと思はる、趙殿成の疏數の
數にあらすと斷するは當れり、奇は
韻の對にて彼と此と相合はざるを謂
ふ、「史記」に李廣大將軍に從つて句
叙を擊つ、諸將有功、李廣無功とあ
り、蓋監、官を罷められ、閉居する、
隨院、失聲なり、無全目、曠の能願
の時に、驚懼無全目と、李唐が注

猶堪一戰立功勳

猶一戰功勳を立つるに堪へたり、

を生かさんか、之を殺さんか、賀曰、其の左目を射ん、羿、弓を引きて之を射る、限りて右目に中たる、羿、首を抑へて愧ぢ、終身
忘れずと、左射、三登揚技射に已に辨ず、故後瓜、史記、那平は放箭の東使侯、棄破れて布衣と爲り、貧にして瓜を長安城裏に種ふ、
瓜美し、故に世俗之を東使瓜と謂ふ、先生物、晉の陶潛明、宅畔に五柳樹を植ゑて以て自ら五柳先生と稱す、疏勒、後漢書に耿
恭、疏勒城旁に澗水の固むべきあるを以て、乃ち兵を引きて之に據る、匈奴來り、恭を城下に攻め、澗水を擁絶す、恭、城中に於て
井を穿つ十五丈、水を得ず、吏士渴乏す、馬糞汁を啗して之を飲む、恭仰ぎ歎じて曰く、聞く昔武師將軍佩刀を抜きて山を刺し、飛
泉湧出す、今、僕德神明、豈窮りあらんや、乃ち衣服を盡へ、井に向つて再拜し、吏士が爲めに嚙る、有頃にして水泉奔出す、衆皆萬
歲を稱ふ、乃ち吏士をして水を揚げ以て灌に示さしむ、灌不意に出づ、以て神明と爲し、遂に引き去る、潁川、「史記」に、灌夫、人
と爲り剛直にして、酒を使ふ、家、數千萬を累ね、食客日に數十百人、陂池田園、宗族賓客、權利を爲め、潁川に横なり、師古曰く、
使酒因酒而使氣也、賀蘭山、甘肅寧夏縣城の西に在り、土人、阿拉魯山と名く、舊說に山に樹木あり、青白、駝馬の如し、北人
駝を呼んで賀蘭と曰ふ、故に名く、又乞伏山と名く、羽檄、「漢書高帝紀」に、吾以羽檄徵天下兵、未有至者、檄は木簡を以て書
を爲る、長さ尺二寸、其の急事あるときは、鳥の羽を以て之に挿み、遠疾を示すなり、「魏武奏事」に、羽檄交馳、軍書狎至とあり、
節使、「通典」に、朔方有寇戎之地、則加以旌節、節之節度使とあり、劉孝成の詩に、邊城多警急、節使臨郊衛とあり、三河、河
南と河東と河内、之を三河と謂ふ、五道、漢書傅介子傳に、漢大發十五萬騎、五將軍分道出とあり、星文、「吳越春秋」に、子晉
乃解百金之劍、以與漁者、曰、此吾前君之劍、中有七星、價值百金、北斗七星を納むなり、燕弓、顧可久曰く、燕弓合作「天弓、天將合
作「燕符」と、趙殿成曰く、燕弓不可改、天將作「大將」爲是と、「列子」に燕角之氣とあり、「左思魏都賦」に、燕弧發、東而委勁と、
李周翰の注に燕弧角弓とあり、余、今、趙殿成の説を可とす、越甲、「說文」に、越甲、齊に至る、齊門子狀、之に死せんと謂ふ、齊王曰
く、彼師の靡未だ聞えず、矢石未だ交へず、長兵未だ接せず、子何ぞ替めて死するを之れ爲んや、齊門子狀對へて曰く、昔は王固に

田して左殿鳴る、車右之に死せんと請ふ、王曰く、子何爲れぞ死する、車右曰く其の吾が君に鳴るが爲めなり、王曰く左殿鳴るは工師の罪なり、子何事か之れ有らん、車右曰く、臣工師の樂を見ずして、其の吾君に鳴るを見るなり、遂に刎頸して死す、之あるを知るや、齊王曰く之れ有り、雍門子秋曰く今越甲至る、其の吾君に鳴るは、豈左殿の下ならんや、車右以て左殿に死すべくして、臣獨り以て越甲に死すべからざるか、遂に刎頸して死す、此の日、越甲甲を引きて退く七十里、齊王、國に還り、雍門子秋を葬むるに上卿の禮を以てす、雲中守、「漢書馬唐傳」に、上既に廉頗と李牧の人と爲り良きを聞きて説び、越甲を指つて曰く、吾國り廉頗李牧を將と爲すを得ば、豈匈奴を憂へんや、唐曰く陛下廉頗李牧ありと雖も、用ふるに能はざるなり、上曰く公何を以て吾國收を用ふること能はずと言ふや、唐曰く臣竊かに聞く、魏尙、雲中守と爲つて、軍市の租盡く以て士卒に給し、私美の錢を出し、五日に一たび牛を殺して、以て賓客、軍吏、舍人を饗す、是を以て匈奴遠く避け、雲中の塞に及ばず、虜嘗て一たび入る、尙、車騎を率めて之を解ち、殺す所甚だ衆し、夫れ士卒は盡く家人の子、田中より起りて從軍す、安んぞ尺籍符位を知らん、終日力戰し、斬首捕虜す、功を上るに、幕府、一言も相應せずんば、文吏法を以て之を罰す、其の賞行はず、吏法を奉すること必ず用ふ、愚以爲へらく、陛下、法大だ明らか、賞太だ輕く、罰太だ重し、且つ雲中守尙、功を上るに、首虜、六級を造ふに坐し、陛下、之を東に下し、其の爵を削り、之を罰作す、是に由りて之を言へば、陛下、李牧を得ると雖も用ふる能はざるなり、文帝悦び、是の日馮唐をして節を持し、魏尙を赦さしめ、復以て雲中守と爲す、

【題義】 老將の氣概を傲し、動もすれば數奇なる將軍あるを悲しむなり、

【大意】 老將が初めて從軍して十五二十の時代、我は歩卒彼は騎卒と出會して、彼の馬を奪取して反つて我は其の敵馬に騎りて闘ふ、然るのみならず、山中の猛獸を射殺して、今日まで有數の豪傑として崇拜せし、魏の黃鬚兒なぞを下視したり、而して一身三千里の間を東西に轉戦し、一劍を以て百

萬の師に當るの勇を振へり、漢兵が戰鬪に奮迅すること霹靂の如きの概あり、是が爲の虜騎は辟易して軍容崩騰て我が鐵條網に挂るを畏る、我の外の大將の敗れざりしは抑も天幸に由るなり、我は古の李廣の如く至誠國の爲め闘へども功の無きは畢竟數奇の運命なるのみ、而かも遂に豫備に編入せられ、氣の張ること無ければ、衰朽に赴く便のみ、世事總て蹉跎として唯白首と成る、昔年を回顧すれば、一箭に鳥の兩目を射るの伎ありしも、今日は垂楊が左肘に生ずるの憐む可き状態なり、路傍に瓜を賣りし人も前半生は諸侯なり、門前に柳を種うる先生も嘗ては印綬を帯びし人なり、住處は何ぞ、堂堂たる軍營と反對に、茫茫たる古木が貧窮陋巷に連なり、寥落たる寒山は我が陋舍の虛牖に對するのみ、而かも老いたりとも雖も、我が氣概は古の耿恭の如く疏勒城に於て飛泉を出せしと異ならず、又灌夫が天下の豪傑を集めて酒を使ひしと同じからず、聞く所に據れば、只今賀蘭山下には漢兵と胡兵と對陣して雲の如しと、羽檄が東西に馳すること日々なりと、乃ち節度使は河南河東河内の中に於て年少を募集す、詔書は天朝より出でて五道より征伐の將軍を出すも、我も試みに甲冑を拂うて雪色の如くなるを見、又寶劍を拂拭して見れば星文の動くを覺ゆ、願はくは燕弓を持つて大將を射殺さん、我は虜兵が吾が君を驚かすを取づるなり、舊日の雲中守は一旦罷められたれど、再起して國家の用を爲せり、國家が之を起用すとなれば、我は一戰して以て功勳を立つることを期す、

【餘論】 此の篇、四支の韻十句、去聲二十五有の韻十句、平聲十二文の韻十句、三度換韻して成る、

時の兵亂に遭ひ、老將に託して自身の懷抱を吐き出すもの、筆力奮舉、一絲も紊れず、多く對句を用ひ、而かも尙是古體、右丞は陶淵明の閒澹幽遠の致を取ると共に、庾開府の清新雄健なる所も學べるものの如し、此等の篇の如き七古として千古の絶調と謂つ可し、漁洋が唐賢三昧集は、空山無人、花開水流を以て宗旨と爲し、而かも此の雄健のものも取る、漁洋其の人の詩、唯神韻を主とするのみならず、時に雄勁のものあるは、右丞の内外表裏を明徹して知る人なればなり、

燕支行

燕支行

漢家天將才且雄、
來時謁帝明光宮、
萬乘親推雙闕下、
千官出餞五陵東、
誓辭甲第金門裏、
身作長城玉塞中、
衛霍纒堪一騎將、

漢家の天將才且雄、
來時帝に謁す明光宮、
萬乘親ら推す雙闕の下、
千官出でて餞す五陵の東、
誓つて甲第を辭す金門の裏、
身は長城と作る玉塞の中、
衛霍纒かに一騎の將に堪へたり、

【注解】明光宮、明光殿なり、漢宮の殿名、未央宮の西に在り、金玉珠璣を以て簾箔と爲し、晝夜明光と「三秦記」に見ゆ、現推、古、王者の將を遣るや、跪きて推敬して曰く、闕以内は寡人之を制せん、闕以外は將軍之を制せよと、雙闕、爾雅郭璞注「に、宮門雙闕とあり、門の兩旁に在りて、中央闕然道を爲すなり、千官、「荀子」に、古者天子千官、諸

朝廷不數貳師功、
趙魏燕韓多勁卒、
關西俠少何咆勃、
報讎只是聞嘗膽、
飲酒不曾妨刮骨、
畫戟雕戈白日寒、
連旗大旆黃塵沒、
疊鼓遙翻瀚海波、
鳴笳亂動天山月、
麒麟錦帶佩吳鉤、
颯踏青驪躍紫驄、
拔劍已斷天驕臂、
歸鞍共飲月支頭、

朝廷數へず貳師の功、
趙魏燕韓勁卒多く、
關西の俠少何ぞ咆勃、
讎を報ずる 只是嘗膽を聞く、
酒を飲んで曾て骨を刮ることを妨げず、
畫戟雕戈白日寒く、
連旗大旆黄塵没す、
疊鼓遙かに 翻る 瀚海の波、
鳴笳亂れ動かす天山の月、
麒麟の錦帶吳鉤を佩ぶ、
颯踏青驪紫驄を躍らす、
劍を抜いて已に断つ天驕が臂、
歸鞍共に飲む月支が頭、

侯百官とあり、近來文武百官の語を天子に用ふ、宜しく文武千官と改むべし、五陵、長陵(高帝)安陵(惠帝)陽陵(景帝)茂陵(武帝)平陵(昭帝)、此の五陵は長安の北に在り、杜陵(宣帝)霸陵(文帝)此の二陵は南に在り、辭甲第、堂堂たる樓閣を甲第と謂ふ、辭甲第、堂堂たる樓閣を甲第と謂ふ、「漢書霍去病傳」に、上爲治第、令視之、對曰、匈奴不滅、無以安家爲也、第甲乙を以て次第し、第一宅を甲第と爲す、玉塞、玉門關塞を謂ふ、疊鼓、漢の大將軍衛青と霍去病となり、共に單于を破り、大功を樹つ、朝廷、今日の所謂政府なり、君主受朝の所を謂ふ、「五子」に朝廷莫如詩とあり、貳師、漢の李廣利、貳師將軍と爲り、屬國六千騎、及び都國の巫少年數萬人を發し、以て往いて宛を伐ち、貳師城に至り、善馬を

初因避地去人間。
 夏間成仙遂不還。
 峽裏誰知有人事。
 世中遙望空雲山。
 不疑靈境難聞見。
 塵心未盡思鄉縣。
 出洞無論隔山水。
 辭家終擬長游衍。
 自謂經過舊不迷。
 安知峯壑今來變。
 當時只記入山深。
 青溪幾度到雲林。
 春來偏是桃花水。

初め地を避けて人間を去るに因つて、
 夏に聞く仙と成りて遂に還らざることを、
 峽裏誰か知らん人事あることを、
 世中遙かに望めば空しく雲山、
 疑はず靈境聞見し難きことを、
 塵心未だ盡きず郷縣を思ふ、
 洞を出でて論することなし山水を隔つることを、
 家を辭して終に擬す長く游衍することを、
 自から謂ふ經過舊迷はずと、
 安んぞ知らん峯壑今來變することを、
 當時只記す山に入るの深きを、
 青溪幾度か雲林に到る、
 春來偏く是桃花水、

不辨仙源何處尋

辨せず仙源何れの處に尋ねることを、

【題義】 晉の陶淵明に桃花源記及び五言長詩あり、晉の太元中に武陵の漁人が水に従ひ魚を捕へて桃花源に至りし事を記す、右丞は淵明の記と詩とに縁つて此の詩を作れるものなり、
 【大意】 漁舟が水を透うて山を愛しながら春の氣分を楽しむ、舟の行く兩岸皆桃花にて去津を夾んで開く、舟中に坐して紅樹を看つつ進み、竟に遠く來りしことを知らず、青溪を行き盡くして一人の影も見ず、其の入るや初め山口を潛行するに限陝より始まる、既にして山の開いて曠望なる處に出でて平陸の地を旋れば、遙かに看る一處に雲樹が森森と攢まるを、近く入るに於て看る千家悉く花竹が散在してあるを、樵客は人に向つて僕は漢民の誰であると告ぐ、而して居人はと見ると盡く秦の衣服を著けて居る、其の居住する處は總て武陵源なり、現代を離れて別に此の中に田園を起し耕やす、月明の夜、松下に房櫺の靜かなるを見る、翌日曉天に至れば、雲中に雞犬の聲喧しきを聴く、已にして桃源中の人は俗客が來ることを驚聞して、樵客を見んと欲して争ひ來集する、而して競うて各の家に招じて秦の都邑今如何なる状なるやを問ふ、平明には聞巷の門落花を掃うて開き、薄暮には漁人も樵父も水に乗じて入る、初め秦の亂を此の地に避けて人間を去りしに因つて、終に長く仙と成りて舊邑に還らざると聞く、峽裏の者は誰も人事あるを知る無し、人世の中を遙望するも空しく漠漠たる雲山

のみ、靈境は容易に聞見せざるの語は疑はざるも、塵心盡きざるが故に郷縣を思ふこと頻り、洞を出でて權客は原の路に返れば、仙境と塵境との懸隔には論無し、家を辭し去つてより終に長く遊行自態なるを覺ゆ、自ら謂ふに經過の路は舊迷はずと、而かも安んぞ知らんや峯壑今來變せしことを、當時は只記憶す山に入ること深く、青溪を幾處も廻りて雲林に到りし事を、春來れば仙凡二境皆桃花水なり、仙境は杏として辨せず、辨せざるが故に何處に尋ぬる方法も無し、

【餘論】此の篇は右丞年十九の作なり、七度換韻して成る、殊に對句多く平仄の整整なること、排律に異ならず、桃花源記の骨髓を奪取して、此の至奇至妙の詩と成るもの、顧可久評して、彼事展拓、段段血脉、段段景象、親切如畫、流麗醇雅と曰ふは當れり、但武陵源の事、東坡評して俗説と爲せしより、人の東坡に阿附する者多し、趙殿成も、右丞此詩、亦未だ能免俗と評するは、東坡の言を信すればなり、然りと雖も實事是れ傳ふるが詩の生命にあらずと知らば、一概に之を排するを得ず、

洛陽女兒行

洛陽女兒行

洛陽女兒對門居

洛陽の女兒門に對して居り、

纔可顏容十五餘

纔かに顏容十五餘可、

【注釋】洛陽女兒、魏の武帝の詩、

河中之水向東流、洛陽女兒名莫愁とあり、對門居、魏の武帝が樂府に讚

良人玉勒乘驄馬

良人玉勒驄馬に乗り、

侍女金盤脍鯉魚

侍女金盤鯉魚を脍にす、

畫閣朱樓盡相望

畫閣朱樓盡く相望み、

紅桃綠柳垂簷向

紅桃綠柳簷に垂れて向ふ、

羅帷送上七香車

羅帷送上七香車、

寶扇迎歸九華帳

寶扇迎歸九華帳、

狂夫富貴在青春

狂夫富貴青春に在り、

意氣驕奢劇季倫

意氣驕奢季倫より劇し、

自憐碧玉親教舞

自ら憐む碧玉親しく舞を教へしことを、

不惜珊瑚持與人

惜まず珊瑚持して人に與ふることを、

春窗曙滅九微火

春窗曙滅九微の火、

九微片片飛花璫

九微片片花璫を飛ばす、

戲罷曾無理曲時

戲罷みて曾て曲を理する時無く、

古詩 洛陽女兒行

家女兒對門居とあり、玉勒、勳の美なるを謂ふ、皮開府の賦に、控玉勒、而推屏、防金鞍、而騎月とあり、金盤、古詩に、就我求珍肴、金盤脍鯉魚とあり、七香車、車中に於て種種の香を燒き、路傍の臭氣を防ぐ爲めとの説もあり、七種の香木にて造りし車なりとの説もあり、後説信すべきが如し、九華帳、宋の鮑照の「行路難」に、七輝芙蓉之羽帳、九華蒲桃之錦衾とあり、注に、

是是古時花式之名とあり、狂夫、前の良人と矛盾するが如きも、良人の游蕩を恨んで言ふ語、季倫、晉の石崇、字は季倫、財産豐積、室宇宏麗、美人數百、皆執輪を曳き、金翠を珥にし、絲竹盡く當時の選、彫磨水陸の珍を窮む、貴戚たる王愷、羊琇の徒と、奢靡を以て相尙ふ、愷は靴を

謂言青鸞是我兒

一一口銜食

養得成毛衣

到大啣啾解游颺

各自東西南北飛

薄暮空巢上

羈雌獨自歸

鳳凰九雛亦如此

慎莫愁思憔悴損

容輝

謂つて言ふ青鸞是我が兒と

一一口食を銜み

養ひ得て毛衣を成す

大なるに到りて啣啾として游颺を解し

各自東西南北に飛ぶ

薄暮空巢の上

羈雌獨り自ら歸る

鳳凰の九雛亦此の如し

慎みて愁思憔悴容輝を損すること莫れ

の雛、脚より出でんと欲する者、親鳥の哺を受け、自ら食ふ能はざるもの、俗に「ヒヨコ」と稱す、『史記』に、趙武靈王が雀を採りて之を食ふとあり、啣啾の語、鳥鳴を形容するなり、多く使用せざる語、羈雌、又は羈雌に作る、羈雌同室義に使用す、羈雌は脚を一匹の雌鳥なり、九雛、『古風西行』に、鳳凰鳴啾啾、一母將九雛とあり、

【詩意】黄雀は癡なり黄雀は癡なり、黄雀は謂へらく青鸞は我が兒であると思ふが故に一一口に食を銜んで來て啣はしむ、既にして漸漸鳥としての毛衣が成長するを見る、巢を出でて自由に飛颺する頃は、各の啣啾と鳴いて東西南北に飛び去る、薄暮に及んで親鳥と自ら思ふ一匹

の雌鳥は元の巢に歸り來る、黄雀の體を養ふ獨り此の如くなるにはあらず、鳳凰の九雛を養ふも亦此の如し、我は爾に言ふ、慎みて愁思憔悴して自ら美毛たる容輝を損することなかれ、

【餘論】此の篇は、古樂府の烏生八九子に倣うて作れるもの、梁の劉孝威の烏生八九子及び吳均の城上烏、亦學べるもの如し、諷諭の旨、言外に隱然たり、

榆林郡歌

榆林郡の歌

山頭松柏林

山頭の松柏林

山下泉聲傷客心

山下の泉聲客心を傷ましむ

千里萬里春艸色

千里萬里春艸の色

黃河東流流不息

黃河東流流れて息まず

黃龍戍上游俠兒

黃龍戍上游俠の兒

愁逢漢使不相識

愁へて漢使に逢うて相識らず

【注解】榆林郡、隋に始めて郡を置く、『唐書地理志』に、關内道歸州、

今日の鄂爾多斯、黃河の北岸、即ち秦の長城在る所、黃河、榆林郡の北、黃河に至る五里、黃龍戍、『宋書』に、馮跋自ら燕王と號し、其の治、黃龍城なるを以て、故に之を黃龍國と謂ふ、梁の元帝の詩、黃龍戍北花如錦、元兗城前月似霜とあり、游俠兒、漢

の曹植の時、借問誰家子、幽并俠兒とあり、

古詩 榆林郡歌

【題義】 檜林郡の風色と、游俠兒の氣分とを銜するもの、願本に檜林羣とあるは誤なり、

【大意】 山頭には蕭殺たる松柏の林あり、山下には嗚咽する泉あり、松柏林は多く墓林なり、密心を傷ましむる所以、千里も萬里も春艸荒涼の色あり、黄河は千年も萬年も東流して息まず、黃龍成上に放浪する游俠兒、偶々漢使の來るに逢ふも、漢使たるを知らず、漢使は即ち我が郷人なりと識らば、聊か愁を慰むるに足るも、識らざるを以て愁は終に慰められざるなり、

【餘論】 此の篇、二韻短古、獅子兔を搏つ、猶は全力を用ふる概あり、願可久曰く、模寫荒遠愁絶之最流麗、平凡の批評なるが如きも、此の外に評言なかるべしと思ふ、

問寇校書雙溪

寇校書が雙溪を問ふ

君家少室西

君が家は少室の西

爲復少室東

復少室の東と爲す

別來幾日今春風

別來幾日か今春風

新買雙溪定何似

新たに雙溪を買うて定んで何似なる

餘生欲寄白雲中

餘生寄せんと欲す白雲の中

【注解】 寇は姓、未だ其の人を評らかにせず、校書、唐書百官志を案するに、宏文館に校書郎二人あり、集賢殿書院に校書郎四人あり、秘書省に十人、著作局に二人、崇文館に二人、司經局に四人、俱に官は九品、書籍を校勘するの役とす、後漢以來

之を置き、元以後之を廢す、少室は山の名、河南府告成縣の西北五十里に在り、高さ十六里、周圍三十里、

【題義】 寇校書が雙溪を買うて所有と爲したるを聞きて、之を訪ひしものか、或は詩を以て寄問したるものか、判然せず、判然せざるも詩を解するに何等の不審無し、

【大意】 君が家は少室山の西に在りしなり、然るに復少室山の東に移つたと聞く、別來對面せざるこゝと久しくして今や春風の吹く時となる、而して聞く新たに雙溪を買ひたりと、それは定んで何似なる心ぞや、察するに餘生を白雲の中に寄する爲であらん、

【餘論】 此の篇の如き、古調を學んで成りしものなれども、右丞の詩としては、所謂尋常喫茶飯に屬するものなり、

寄崇梵僧

崇梵僧に寄す

崇梵僧崇梵僧

崇梵僧崇梵僧

秋歸覆釜春不還

秋覆釜に歸りて春還らず

落花啼鳥紛紛亂

落花啼鳥紛紛として亂れ

瀨戸山窗寂寂閑

瀨戸山窗寂寂として閑なり

【注解】 崇梵僧、崇梵は寺名なるべし、崇梵寺の住僧と見て可なり、覆釜は地名、崇梵寺は覆釜郡に在るなるべし、

峽裏誰知有人事。 峽裏誰か知らん人事あることを、
郡中遙望空雲山。 郡中遙かに望む空しく雲山、

【大意】崇梵師僧上崇梵師僧よ、秋は覆釜に歸錫するも春は還鉢せざるや、覆釜春晩の景色は、落花啼鳥紛紛として飛散し、而かも師在らざるを以て洞戸山窗は寂寂として閑なり、山際は別に人間の事あるを知る者無し、郡中より遙望すれば空しく雲山漠漠たるのみ、

【餘論】此の篇の意義、解すべく、又解すべからず、崇梵僧が覆釜に還らざることは明白なるも、去つて峽裏に遊ぶものによ、或は街頭に托鉢する者なるや、此の點疑問に屬す、蓋し詩としての味は義理の解すべき外に在り、顧氏、流麗と評す、當れり、

同崔傳答賢弟 崔傳と同じく賢弟に答ふ

洛陽才子姑蘇客。 洛陽の才子姑蘇の客、
桂苑殊非故鄉陌。 桂苑殊に非ず故郷の陌、
九江楓樹幾回青。 九江の楓樹幾回か青し、

【注解】洛陽才子、晉の潘岳が西征賦に、賈生洛陽の才子とあり、姑蘇は山名、江蘇省吳縣の西南に在り、或は姑蘇に作り、又姑蘇に作る、

一片揚州五湖白。 一片の揚州五湖白し、

揚州時有下江兵。 揚州時に江を下るの兵あり、

蘭陵鎮前吹笛聲。 蘭陵鎮前笛を吹くの聲、

夜火人歸富春郭。 夜火人歸る富春郭、

秋風鶴唳石頭城。 秋風鶴唳石頭城、

周郎陸弟爲儔侶。 周郎陸弟儔侶を爲し、

對舞前溪歌白紵。 前溪を對舞し白紵を歌ふ、

曲机書留小史家。 曲机の書は小史が家に留まり、

艸堂碁賭山陰墅。 艸堂の碁は山陰の墅を賭にす、

衣冠若話外臺臣。 衣冠若し外臺の臣を話らば、

先數夫君席上珍。 先づ數ふ夫君席上の珍、

夏聞臺閣求三語。 夏に聞く臺閣三語を求むることを、

遙想風流第一人。 遙かに想ふ風流第一人、

姑蘇臺其上に在り、吳王夫差が遊る所、今日の吳縣治即ち是なり、桂苑、桂林苑は吳立つ、昇州上元縣の北四十里、落星山の麓に在り、諸本多く杜宛に作る、趙殿成本と余が藏する明板の不分卷『王維集』は、共に桂苑に作る、杜宛は洛陽と地理相違し、桂苑は姑蘇と按ず、乃ち桂苑を正しとす、故郷陌、顧可久は右丞の故郷と解するが、余は崔兄弟の故郷と解す、九江、九江の名は『禹貢』に見ゆる、其の説種種あり、或は曰ふ江は荊州の界に於て、分れて九と爲る、(尙書孔傳)江は海陽より分れて九道と爲る、蓋し言ふ大江分れて九と爲る、故に九江と曰ふ、(漢書地理志)九江は各の源を別にし、流れて大江に合するなり、(尙書正義引鄭氏說)烏江、蚌江、烏白江、濠澗江、

賦江、湘江、廬江、漢江、是を九江と爲す、(壽陽記)浙江、揚子江、楚江、湘江、荆江、漢江、南江、吳江、松江、是を九江と爲す、(寰宇記)此の外尚多説あり、煩を避けて載せず、要するに洞庭を以て九江と爲す宋の胡旦の説を以て、余は信ずべきものと爲す、九江郡と稱し、又九江府と稱し、今は九江縣治なり、五湖も異説多し、五湖は太湖の別名なり、(靈物吳錄)青湖、蠡湖、洮湖、滄湖、太湖、是を五湖と爲す、(吳越春秋)長湖、射湖、菱湖、滄湖、太湖、是を五湖と爲す、(水經注)要するに太湖を中心として、他の諸湖之を繞る、因つて即ち太湖は五湖、五湖は太湖と認むべきなり、(方輿勝覽)に太湖一湖にして五湖と曰ひ、昭餘郡一澤にして名けて九澤と曰ひ、九江一水にして名けて九江と曰ふ、地名には多く此の類のものあるなり、揚州は揚州と同じ、今南方支那と稱する、江蘇、安徽、江西、浙江、湖北の地は古江南と稱す、江南は即ち揚州なり、時有は今日の時にはあらず、古の時なり、下江兵、漢代南郡の蠻、江夏の羊牧、蠻社桂林より起りて、號して曰ふ、下江兵衆皆萬餘人と、關陵、常州府城北八十里、萬歲鎮の西南に在り、富春郭、會稽郡の富春縣なり、晉の謝靈運の詩に竹洲、魚浦、且及富春郭とあり、石頭城、江寧縣の西、石頭山麓に在り、漢の建安十六年に、吳の孫權が徒、秣陵に治す、明年、石頭に城く、諸葛亮、孫權に謂つて曰く、鍾山龍盤、石城虎踞と爲し、石頭を鎮せしむ、以上の九江、揚州、關陵、富春、石頭、皆姑蘇と接近して、總じて吳地と稱す、周郎、吳の周瑜は年少、吳人呼んで周郎と爲す、陸弟、吳に陸遜なる傑物有るも、今之を指すにあらず、陸遜の弟たる陸雲を指し、以て崔の賢弟に比するものなり、前漢は「樂府古題要解」に晉の車騎將軍沈珩が造る所の舞曲の名なり、白紵、「晉書」に、白紵、按ずるに舞辭に巾袍の言あり、紵は本、吳地に出づる所、宜しく是れ吳舞なるべし、白紵は白紵を以て正しとす、曲帆、「晉書」に、王羲之、嘗て門生が家に詣り、幾凡の潔淨なるを見る、因つて之に書す、眞車半ばす、後其の父の爲めに誤つて削去せらる、門生驚いて愧むもの果日とあり、恭肅、「晉書」に、苻堅、衆百萬を率ゐて淮淝を攻む、京師震恐す、謝安に征討大誓を加ふ、謝安夷然として懶色無し、駕を命じて登に出づ、輒劇學く集る、方に謝安と苻を闘み、別殿を始にす、外臺、「漢官儀」に、尙書を中臺と爲し、御史を憲臺と爲し、詔者を外臺と爲す、樂松之「三國志注」に關臺を外臺と爲し、詔書を内臺と爲す、「杜氏通典」に或は謂ふ州府を外臺と爲すと、夫君、「楚辭」に思夫君兮太息とあるは是れ時が夫を稱するなり、然るに所人

は友人を稱して夫君と曰ふ、今は友人を指す、右丞が友人孟浩然の時に、衡門未だ掩、竹立望夫君、乃ち友人を望むなり、席上夢、「禮記」に簪有、席上之夢、以待聘とあり、蓬閣、「後漢書仲長統傳」に、蓬閣三三公、事歸蓬閣とあり、章懷太子の注に、蓬閣謂、尙書也とあり、三語、晉の阮瞻、司徒王戎に見ゆ、戎問うて曰く、衆人は名教を重む、老莊は自然を明らむ、其の旨、固なりや異なるや、瞻曰く將に同じきこと無からんとす、戎善談良久し、即ち辟して豫と爲す、時人之を三語と謂ふ、據は去聲十七畫の韻にて本書は「エン」なり、假借して平聲十畫の韻、丞の義「シヨウ」に用ふ、今日の所謂屬官に當る、

【題義】崔傳は唐書に傳を闕く、察するに右丞が友人として交遊する人、乃ち右丞と同じく崔が弟の爲め、詩を作りて之を弟に贈りしものならん、

【大意】洛陽の才子と稱へられし崔傳は今日姑蘇の客と爲つて居る、往來する所の桂苑は殊に故郷の街陌とは異なる、乃ち客中に見る所の九江の楓樹、幾回か青きなり、一片即ち一地の揚州を繞る五湖は水白きなり、其の揚州は時に下江の兵士を見ることあり、蘭陵鎮前に吹笛の聲を聴くことあり、夜燈火を認む、是人の富春郭に歸るなり、秋風時に鶴唳を聞く、此は石頭城上に鳴く聲なり、周郎の如き才人や、陸弟の如き秀才が僑侶と爲つて、前漢曲を對舞し白紵歌を誦ふ、時には王羲之の如き書聖が來臨することもあり、時には苻を圍んで謝安の如く夷然たることもあり、當路の大官が若し外臺の臣を語るあらば、先づ屈指せよ夫君や席上の珍を、此の上に聞きしことあり、臺閣に於て三語の名士を求むることを、其の名士は誰と爲す、遙に想ふ高風雅流第一の人、即ち賢弟なることを、

古詩 同崔傳答賈弟

詩意、余が解する如くに解せざる人もあるべし、何處までが自らを敍し、何處までが賢弟を敍したるにや、三四五六度、翻覆推敲、猶ほ判然せざるもの多し、作者を除く外、如何なる學者も、記事文の如く明白に解する者、恐らくは之れ無からんと思ふなり、詩は風韻に在り、文は事實に在り、是の詩亦其の風韻を味はば足る、是の篇、右丞集中、三昧妙諦に屬するものなり、

同比部楊員外十五夜游有懷靜者季

比部楊員外と同じく、十五夜游、靜者季を懷ふことあり

承明少休沐

承明は休沐少く、

建禮省文書

建禮は文書を省す、

夜漏行人息

夜漏行人息み、

歸鞍落日餘

歸鞍落日餘る、

豈知三五夕

豈知らんや三五の夕、

萬戶千門闌

萬戶千門闌くを、

夜出曙翻歸

夜出でて、曙翻つて歸り、

【注】承明、『漢書嚴助傳』に、

君厭承明之塵とあり、承明塵は石渠閣外に在り、宿直して止まる所を塵と曰ふ、建禮、『宋書』に、漢何書寺居建禮門内とあり、尙書郎は主として文書起草を作す、晝夜更直して建禮門内に五日止まる、傾城、一城内の人盡く家を出づるなり、五侯、『漢書元后傳』に、河平二年、舅、驃平阿侯、商、成都侯、立、立、紅陽侯、

傾城滿南陌

城を傾けて南陌に滿つ、

陌頭馳騁盡繁華

陌頭の馳騁盡く繁華、

王孫公子五侯家

王孫公子五侯の家、

由來月明如白日

由來月明白日の如く、

共道春燈勝百花

共に道ふ春燈百花に勝れりと、

聊看侍中千寶騎

聊看侍中の千寶騎、

強識小婦七香車

強識す小婦の七香車、

香車寶馬共喧闐

香車寶馬共に喧闐、

箇裏多情俠少年

箇裏多情の俠少年、

競向長楊柳市北

競うて向ふ長楊柳市の北、

昔過精舍竹林前

昔過ぐ精舍竹林の前、

獨有仙郎心寂寞

獨り仙郎ありて心寂寞、

卻將宴坐爲行樂

卻つて宴坐を將て行樂と爲す、

古詩 同比部楊員外十五夜游有懷靜者季

俱を南陌侯、當時高平侯と爲す、五人同日に對す、故に世之を五侯と謂ふ、侍中、禁中に在りて天子に侍す、故に謂ふ、漢の張良の子、張辟、強に始まる、後漢以來、侍中の官、二千石に比す、唐時、侍中は正一品、今の句の侍中とは異なる、長楊、『三輔黃圖』に、長楊宮、在今靈州縣東南三十里、本秦舊宮、至漢修飾之、以備行幸、宮中有飛揚數畝、因爲宮名とあり、柳市、『漢書』に、萬章、字子夏、長安人也、長安城東、街南各有豪俠、章在城西柳市、精舍、佛刹を曰ふ、『涅槃經』に、佛在王舍大城、住迦蘭陀竹林精舍とあり、宴坐、即ち無坐又は安坐なり、安息の貌を謂ふ、行樂、『漢書』に、人生行樂耳とあり、藝薈、『史記』に、饗饈之食、藝薈之樂とあり、藝と薈、即ち

偷覓忘懷共往來。 偷し忘懷を覓めて共に往來せば、

幸霑同舍甘藜藿。 幸に同舍藜藿を甘んずるに霑はん、

リ業なり、貴者、修行者の食ふものなり、

【題義】比部員外郎に楊を氏とするものあり、是の人と十五夜に月を賞して、季と曰ふ靜者即ち修養の有人人を懷うて此の詩を作るなり、

【大意】承明に職を奉ずる者は休沐が頗る少く、建禮に出仕する者も文書を校合する爲め忙し、夜中漏の音を聞く刻には行人の景が絶ゆ、落日より夜に臨まんとする際皆歸鞍し去ればなり、夜夜此の如きものならんと思ふは然らず、十五夜は全く之に反す、城中の萬戸千門は皆開き、夜遊を爲して家に歸るは曙に及ぶ、其の賑かなる様は南陌に充滿する、南陌を馳騁する者は盡く富貴の人、彼も王孫、此も公子、五侯の家の子弟ならざるは無し、由來月明は白日を欺くが如く、之に加ふるに軒頭に懸けたる春燈は美麗なること百花に勝る、注意せずとも看る侍中の千寶騎なることを、注意をして識る小婦の七香車なることを、其の小婦の香車と、侍中の寶馬と、車聲馬聲共に喧闐甚だし、箇の裏別に一隊を認む、是多情の俠少年輩なり、此の輩の競うて赴く處は長楊柳市の北にして、竹林精舍の門前には向はざるなり、獨り季君の如き寂寞を愛する心事の人あり、彼等の行樂と反對に宴坐を以て自分の行樂と爲す、偷し人間の懷を忘れて塵外に往來する友を覓めば、清淨の舍を同じうし、寂寞の心

を養ひ、精進料理を喫する樂しみに霑はん、

【餘論】此の篇、五度換韻して成る、第一に比部の事を敘し、第二に十五夜、貴遊繁華の状を敘し、第三に季の清梵を愛する事を敘し、結末比部と自己と季と紛俗以外に道を樂しまんとする旨を敘す、意義良に明白とす、右丞が食不葷、衣不綵の志を知らば、是真に自己を明白に敘したるものなり、

故人張諶工詩善易卜兼能丹青草隸頃以詩見贈聊獲酬之

酬之

故人張諶、詩を工にし易卜を善くし、兼て丹青草隸を能くす、頃詩を以て贈らる、聊か之に酬ゆるを獲、

不逐城東游俠兒、 逐はず城東游俠の兒、

隱囊紗帽坐彈碁、 隱囊紗帽彈碁に坐す、

蜀中夫子時開卦、 蜀中の夫子時に卦を開き、

洛下書生解詠詩、 洛下の書生詠詩を解す、

藥欄花徑衡門裏、 藥欄花徑衡門の裏、

【注解】隱囊、車中にて身體を海らせ掛ける大なる袋なり、鞞鞞即ち是なり、『通鑑』に、陳漢主、倚隱囊、置張貴妃於席上」とあり、『顏氏家訓』にも、漢朝の盛時、貴冑の子弟、面を剃り、粉を傅し、朱を施し、蓋子に坐し、隱囊に憑るとあり、彈碁、

時復據梧聊隱几

屏風誤點惑孫郎

團扇草書輕內史

故園高枕度三春

永日垂帷絕四鄰

自想蔡邕今已老

夏將書籍與何人

時に復梧に據り聊か几に隱る

屏風誤つて點し孫郎を惑はし

團扇草書内史を輕んず

故園杖を高くして三春を度り

永日帷を垂れて四鄰を絶つ

自ら想ふ蔡邕今已に老いたるを

夏に書籍を將て何人に與へん

【西京雜記】に、漢の成帝、臨御を好む、羣臣、勢に勝へず、之に代ふる彈碁を作り、以て獻すとあり。碁譜に、唐人爲る所の碁局、方二尺、中心高く覆蓋の如く、其の側に小壺を爲る、四角微しく隆起すとあり、然らば「坐シテ碁ヲ彈ズ」るにはあらす。彈碁ニ坐スルなり、其の後漢、君子端人と異なるを謂ふ、案するに碁は今日行はるる物と異なり、小壺の中へ碁を擺ち入れて以て遊戯を爲

し、而して其の壺へ腰を容るれば身體の工合が極めて善かりしものならんか、蜀中夫子、「高士傳」に、嚴遵、字は君平、蜀の人、隱居して仕へず、成都市に賣トシ、日に百錢を得以て自給し、ト訖りて則ち肆を閉じ、簾を下し、以て著書を事と爲すとあり、洛下書生、「晉書」に、謝安が能爲洛下書生歟とあり、謝安、鼻疾あり、故に其の晉語る、名達其の跡を愛して及ぶ能はず、或は手鼻を掩ひ以て之に效ふとあり、蔡邕、藥草を培養する園なり、李濟翁が「資暇錄」に、今園庭中藥欄、欄即藥、藥即欄、輪言二園後、非ニ花藥之欄也、有不悟者、以爲藥架疏園、可作碑對、是不知其由來矣とあり、是の説、白樂天の詩、廓紫藥架、夾砌紅藥欄の時に對して言ふならん、唐の庾肩吾の時に、向、嶺分ニ花徑、隨階轉藥欄とあり、是の詩も「花ノ徑」「藥ノ欄」にて「花即花徑」「藥即藥欄」にはあらず、藥欄を藥園に作る尤も分明などといふ説も、右丞の心にはあらず、謬説にせよ藥欄花徑を對句として用ひらるる以上、藥園の範圍、花園の路徑と見て可ならんと思ふなり、據格、「莊子」に、據梧而隱とあり、古代より既に梧桐を製して成ればなり、

隱几、「莊子」に、南郭子綦隱几而息とあり、隱は隠るなり、几は几筵、即ち「ヒヤカケ」なり、誤説、「歷代名畫記」に、吳の曹丕、吳、吳興の人、孫權、之に屏風を畫かしむ、誤つて筆を落して素を點す、因つて就いて龜の狀を成す、據其の眞かと疑ひ、手も以て之を彈すとあり、内史、「晉書」に、王羲之、右軍將軍、會稽内史と爲る、嘗て蕺山に在りて一老妪を見る、六角竹扇を持ちて之を賣る、其の扇に書し、各の五字を爲る、妪初め懼る色あり、因つて妪に問つて曰く、但、是は王右軍の書と言ひ、以て百錢を求めぬ、妪其の言の如くす、人聽うて之を買ふ、蔡邕、「魏志」に、王粲、長安に從る、左中郎將蔡邕見て之を奇とす、時に愚才學顯者、朝廷に貴重せらる、嘗に車騎巷に墮ち、賣客座に盈つ、樂が門に在りと聞けば、屣を倒にして之を迎ふ、每年少にして短軀、一座盡く驚く、昌曰く、此れ王公が孫なり、異才あり、吾如かざるなり、吾家の書畫文章、盡く當に之に與ふべし、

【題義】 故人の張謹は詩を工に作るのみならず、易學も、畫も草書も隸書も盡く善能す、頃者詩を贈られたるを以て、我も之に酬ゆるに此の詩を以てすとすなり、

【大意】 城東の游俠兒は、甲も乙も隱憂や紗帽や坐彈碁、古の驕奢の徒の態度に倣うて、高風正流の狀無し、張君は其等の徒の態度を逐はず、嚴君平と稱する古の高士が業に效ひ、又、謝安なる高士の吟詠に習ひ、其の住居は藥欄や花徑、清淨なるも極めて疏末な門の裏に棲む、時ありては梧に據り几に隱る世外人の静味を掬し、時ありては曹丕興が孫郎をして疑はしめし程の畫を書き、又内史王羲之を輕視する程の筆を揮ひ、而して故園に高枕して三年を度る、我は如何、永日に帷を垂れて四鄰と往來せず、自から想ふに、我が元氣も既に老いたり、聊か藏する所の書籍は、盡く君に呈贈せんと思ふなり、

【餘論】此の篇、三度換韻して成る、張を以て王樂に比し、自ら以て蔡邕に擬し、其の抱負の大、右丞が終身を通じて決して妄にあらざるを知る、詩として強ひて甲乙を論ずる時は、夷門歌や、老將行や、隴頭吟には及ばざるなり、

答張五弟

張五弟に答ふ

終南有茅屋

終南に茅屋あり、

前對終南山

前は終南山に對す、

終年無客長閉關

終年客無うして長く關を閉づ、

終日無心長自閒

終日無心にして長く自から閒なり、

不妨飲酒復垂釣

妨げず酒を飲み復釣を垂るるを、

君但能來相往還

君但能く來りて相往還せよ、

【大意】張五弟が近況を問はれたるを以て答ふ、終南山下に吾が茅屋あり、茅屋は終南山に正面してあり、一年中客無きを以ての故に長く關門を閉せり、終日何の機心も無く長く自然と閒寂なり、妨げ

ず酒を飲み復釣を垂るることを、君よ切切に來りて相往還し玉へ、
【餘論】此の篇、終と無と長との三字を疊用して、以て其の神力を示す、而して妙は自然に在り、巧妙を求めんと欲して初めより此の伎を弄するものは、遂に此の自然あらざるなり、

贈吳官

吳官に贈る

長安客舍熱如煮

長安の客舍熱して煮るが如し、

無箇茗糜難御暑

箇の茗糜無くば暑を御ぎ難し、

空搖白團其諦苦

空しく白團を搖かして其の諦苦、

欲向縹囊還歸旅

縹囊に向はんと欲して還歸旅、

江鄉鯖鮓不寄來

江郷の鯖鮓寄せ來らず、

秦人湯餅那堪許

秦人の湯餅那ぞ許に堪へん、

不如儂家任挑達

如かず儂家挑達に任して、

艸屬撈蝦富春渚

艸屬蝦を撈る富春の渚、

【注】煮、暑熱強くして物を煮るが如し、茗、茶なり、糜は粥なり、蜀、蜀之を製して賣るとあれば、蜀人の職業なるべし、右丞が友人儲光羲にも喫茗粥の五言古あり、當堂暑氣盛の句に依つても知る、夏日に限り食ふものなるか、白團、「香書」に、王琅好提「白團扇」とあれば、字も盡し無き扇子なり、諦苦、佛經に四諦を説く、苦諦、集諦、滅諦、道諦なり、我等人間界の事は、畢竟苦患にして、其の性質實なるを之苦

名産於饅饅とあり、餠餅、日本の餠の類なり、湯餅、「荆楚歲時記」に、六月伏日に、竝に湯餅を作り、名けて辟惡と爲すとあり、
「魏氏春秋」にも、何晏、伏日を以て湯餅を食ひ、巾を取りて汗を拭ふ、面色依然、乃ち知る粉を博するにあらず、則ち伏日湯餅を食ふ、魏以來之れあるなり、饅饅、吾家と同じ、按述、「詩經」に饅饅進兮とあり、往來相見の貌、饅饅、即ち草履と同じ、芒にて造りし履を曰ふ、撈蝦、蝦は海老なり、撈は網にて取るなり、願可久本は婦娘に作る、誤寫なり、

【題義】吳官なる人は傳を詳かにせず、右丞此の時を贈りて、夏日自由に遊ぶの官に在るに勝るを説くものなり、

【大意】長安城中の客舎は、熱氣煮るが如し、儘の茶粥の冷したるもの無くんば暑を御ぐこと能はず、白扇を以て涼風を噴ばんと欲するも、其の苦諦の世、到底涼味を求むる能はず、是に於て書物を讀むには歸旅の身と爲るに如かず、長安に在りては我が江郷の餠餅も寄せ來らず、秦人即ち長安に製する湯餅にては満足する能はず、如かず郷里の儂家に自由自在を樂しみ、衣冠束帶と反對に漁父其の儘の態を學んで蝦を富春渚に撈ひとらんには、

【餘論】此の篇、右丞が詩としては、聊か詰屈の態あるを免れず、誦苦の佛語、右丞として得意ならんも、強用の誦亦免れざる所なり、

雪中憶李揖

雪中李揖を憶ふ

積雪滿阡陌。

積雪阡陌に滿つ、

故人不可期。

故人期すべからず、

長安千門復萬戶。

長安千門復た萬戶、

何處蹀躞黃金羈。

何れの處にか蹀躞す黃金の羈、

【大意】積雪が東阡南陌に滿つ、故人は會期を約すべからず、長安城中千門復た萬戶、何れの處に向つて白馬黄金の羈にて蹀躞するぞ、

【注解】蹀躞、「調會に行く貌とあり、如何なる歩行の態度なるを詳かにせず、黄金羈、馬の「オモカイ」を黄金にて製るなり、

送崔五太守

崔五太守を送る、

長安廐吏來到門。

長安の廐吏來りて門に到る、

朱文露網動行軒。

朱文の露網行軒を動かす、

黃花縣西九折坂。

黃花縣の西九折坂、

玉樹宮南五丈原。

玉樹宮の南五丈原、

褒斜谷中不容轡。

褒斜谷中轡を容れず、

古詩 雪中憶李揖 送崔五太守

【注解】長安廐吏、漢の朱買臣が會稽太守と爲るとき、長安廐吏が驕馬車に乗り、來りて買臣を迎ふ、太守は驕馬車に乗るを得、朱文、「從漢書王興傳」に、柱下無朱文之轡也とあり、車轡の注に、朱文畫、車爲レ文也とあり、車に朱を以て畫くな

唯有白雲當露冕。

唯白雲ありて露冕に當つ、

子午山裏杜鵑啼。

子午山裏杜鵑啼き、

嘉陵水頭行客飯。

嘉陵水頭行客飯す、

劍門忽斷蜀川開。

劍門忽ち断えて蜀川開き、

萬井雙流滿眼來。

萬井雙流滿眼來る、

霧中遠樹刀州出。

霧中の遠樹刀州出で、

天際澄江巴字回。

天際の澄江巴字回る、

使君年幾三十餘。

使君年幾んど三十餘、

少年白晢專城居。

少年白晢城を専らにして居る、

欲持畫省郎官筆。

畫省郎官の筆を持して、

廻與臨邛父老書。

廻つて臨邛父老の與に書せんと欲す、

各口三山、眞然對峙、南曰襄、北曰斜、在唐爲縣路、所以通巴漢とあり、不詳、惟は車轍、熱を御ぐ爲めに設ける、車の「水日」なり、露冕、冠冕なり、子午山、「三秦記」に、長安正南山名三秦、各曰子午とあり、「長安志」に、子午谷長六百六十里、北曰子

在、府南、南曰子午、在、律車東、子は北方なり、午は南方なり、南北交通の中心なるを以て子午谷と名くるなり、今陝西長安縣の南とす、杜鵑、子規なり、蜀王たる望帝の化する鳥と稱す、嘉陵水、「太平寰宇記」に、嘉陵江は鳳州大散關より發源し、利州より下流して劍州劍門關の界に入るとあり、「一統志」に、嘉陵江は漢中府略陽縣治西南に在り、源、鳳縣の東大散關より出で、兩當略陽を經、東谷等の水流に會し、四川の利閬合州を經て、重慶府に至り、大江に入るとあり、劍門、「太平寰宇記」に、劍門關、本、漢の梓潼縣の地、諸葛武侯、蜀に相と爲り、此に於て劍門を立つ、大劍山、此に至り陝東の路あるを以て、故に劍門と曰ふ、蜀の姜維、魏の鍾會を此に拒ぐ、蜀川は劍門より西に當る、今日民間の成都縣是なり、高井、「漢書」に、一同百里、提封萬井とあり、街區が井然たるを曰ふ、雙流、左思が「蜀都賦」に帶三江之雙流とあり、劉涓子曰く、江水、岷山より出で、分れて二江と爲る、成都を經て、東南に流れて之を經、故に帶と曰ふ、又一を内江と謂ひ、一を外江と謂ふ、刀州、「晉書」に王濬が夜夢む、三刀を臥屋梁上に懸く、須臾に又一刀を益すと、濬驚きて覺め、意甚だ之を恐む、主簿李毅、再拜賀して曰く、三刀は州の字なり、又一を益すは明府、其れ益州に臨むか、果して益州の刺史に遷る、唐人、蜀地を以て刀州と爲すは此に本づく、巴字回、巴峽の水、屈曲して巴字を爲すと、或は云ふ、江、三流に分れ、中に小流あり、横貫して巴字を成す、故に以て名と爲すと、白晢、顔面の潔白なるを曰ふ、專城居、「古辭」に四十專、城居とあり、一城を自分の自由にするの謂なり、畫省、明光殿省、省中皆胡粉を以て壁を飾り、古賢烈女を畫く、郎官、漢、「漢官」に云ふ、尙書丞郎は月に赤管の大筆一雙を賜ふとあり、臨邛、漢の司馬相如、郎と爲る數歲、會ま唐蒙、使して夜郎使中を略通す、巴蜀の吏卒千人を殺す、郡又多く爲めに轉漕萬餘人を殺す、軍興の法を用て、其の聚卒を誅す、巴蜀の民大に驚恐す、上之を聞きて乃ち相如を遣り、唐蒙等を責めしむ、因つて巴蜀の民に諭告するに上の言にあらざるを以てす、

【題義】 崔五が知事と爲りて蜀地に赴くを送るなり、

【大意】 長安の應吏は知事公を送る爲めに皆門に来る、知事の乗る軒車は朱文露網が躍動する、第一に黃花縣の西の九折坂を過ぎ、それより玉樹宮南の五丈原、それより褒斜谷を過ぎ、谷狭ければ體を

容るるに充分ならず、唯白雲のみありて吾が驚疑の上に當る、子午山を經る頃には杜鵑が啼く、嘉陵水を渉る頃は畫堂の時なり、劍門關の斷路には前に蜀川の開くあり、而して蜀の街は井然として其中に二江が流れて眼前に展開し來る、霧中に認むる遠樹は刀州なるを知る、天際を流るる澄江は巴字を回らして居る、今使君は年幾んど三十餘なり、猶ほ壯年に達せざる少年、面容白皙、而かも一城の主と爲りて任務を専らとす、畫省郎官の筆は頗る重し、其の貴重なる筆を以て臨邛の父老に示す書を作らんと欲す、

【餘論】此の篇は、四度換韻して成る、起二句と結末の四句は、推其の人を説き、其の他の十句は道中を敘し、陝西と四川との名勝悉く此の中に在り、顧可久が登涉を模寫し、陝蜀の山川險易の景畫の如しと評したるは信に當る、

送李睢陽

李睢陽を送る

將進酒思悲翁

將に進酒せんとして悲翁を思ふ、

使君去出城東

使君去つて城東に出づ、

麥漸漸雉子斑

麥漸漸として雉子斑なり、

槐陰陰到潼關

槐陰陰として潼關に到る、

騎連連車遲遲心

騎連連車遲遲心中悲しむ、

中悲

宋又遠周問之

宋又遠くして周之を問す、

南淮夷東齊兒

南は淮夷東は齊兒、

碎碎織練與青絲

碎碎たる織練と青絲と、

游人買客信難持

游人買客信に持し難し、

五穀前熟方可爲

五穀熟するに前んじて方に爲す可し、

下車閉閣君當思

車を下り閣を閉づ君當に思ふべし、

天子當殿儼衣裳

天子殿に當つて衣裳儼なり、

太官尙食陳羽觴

太官尙食羽觴を陳す、

彤庭散綬垂鳴璫

彤庭綬を散じて鳴璫を垂る、

黃紙詔書出東廂

黃紙の詔書東廂より出で、

【注解】將進酒・思悲翁、共に漢の鼓吹樂十八曲中の題目なり、悲翁は右丞自身を謂ふ、麥漸漸、潯岳が雉城に、麥漸漸以澤とあり、漸

漸は秀を含むの貌なり、雉子斑、漢の鼓吹樂十八曲の一、今其の字を借用す、宋は即ち今の睢陽、春秋の時宋と魏す、東周洛陽と魏を接す、淮夷、睢陽の南に當る、齊兒、睢陽の東に當る、碎碎、瑣瑣にして織練なるを曰ふ、下車、漢の班伯が定襄の太守と爲る、定襄の民、其の下車して威を作すを畏る、閉閣、漢の韓延壽は左闔閤と爲り、高陵に至る、民に兄弟相争ふものあり、延壽己が教化足らざるの罪と爲し、閣を閉じて自ら責む、兄弟深く悔い、肉袒して謝す、太官、漢代大膳職の官名、尙食、唐代大膳職の官名、羽觴、種々異説あり、斷定すべからざるも、余は孟康の註に頭尾羽翼有るが故に名くの説を取る、鳴璫、璫は元來耳の飾具の名、後、冠に著ける飾玉と

輕執疊綺爛生光、
 宗室子弟君最賢、
 分憂當爲百辟先、
 布衣一言相爲死、
 何況聖主恩如天、
 鸞聲鸞鳴魯侯期、
 明年上計朝京師、
 須憶今日斗酒別、
 慎勿富貴忘我爲、

二五二
 爲る、黃紙詔書、梁の簡文帝の謝啓に、黃紙詔書、先開「泉府」とあり、魏晉以來詔書は黃紙紙を使用したるものなり、東廂、正寢に東廂と西廂とあり、宗室、唐室は李姓、李暉は李暉の子、乃ち太宗の曾孫に當る、分憂、「晉書」に、宣帝曰、吾於庶事、以夜繼日、無須臾寧息、此非以爲樂、乃分憂耳、百辟、「詩」に百辟其刑之とあり、諸侯を謂ふ、布衣一言、燕の荆軻、魏の侯森の如きを謂ふ、鸞聲鸞鳴、詩義頌の語、鳥の鳴聲を鸞鳴と曰ふ、轉じて鈴の鳴聲と爲る、上計、公吏が一年中の計

會を上るを曰ふ、

【題義】李が臨關の太守と爲りて任に赴くを送るなり、

【大意】將に別を送る酒を進めんとして、先づ此の悲翁を自から思ふ、使君は我と別れ去りて城東門を出づ、麥は漸漸として其の雉子は斑なり、路傍の桃樹は陰陰として瀟關まで到る、從騎は連連、從車

は遲遲、我が心中は悲しむ、宋地は又遠し、況んや周が其の間を塞ぐをや、南方は淮夷、東方は齊兒、瑣碎なる織練も青絲も、交通便ならざるが故に、遊人も買客も共に艱難する、五穀の成熟せざる收穫前に方に良政を爲むべし、下車して民を畏れしめし事も、閉閣して民を威せしめし事も、君は宜しく三思し玉へ、天子は殿に登りて衣裳儼然、大膳職よりは玉食羽觴を薦む、宮庭の大官は綬を散じて各の鳴璫を垂る、黃紙の詔書が東廂より出づるを見る、是の詔書は或は織練と青絲とを徵す爲めならん、乃ち獻する所の輕執疊綺は爛然として光を放つ、意ふに宗室の子弟として君は最も賢明の人なり、國家の爲めに憂ふるは諸侯よりも先に範を示し玉へ、布衣の身ですら、知己が一言の爲めには死せり、何に況んや君を太守に任ずる天子の恩は天の如く高し、鸞聲鸞鳴として朝參の期、乃ち明年治下の狀を奏上する爲め京師に来る時は、今日斗酒以て送別せしことを記憶し玉へ、謹慎して我を忘れ富貴に詫る下車の類の人と爲ること勿れよ、

【餘論】此の篇、六度換韻して成る、道中を説き、天子を説き、遂に訓戒に結ぶ、玄宗の開元二十八年、徐酒の二州蠶無く歲税を免す、此の詩の成るは、其の後復無蠶の時の作ならんと、貴人、民苦を知らず、輕執は誰が製り、疊綺は誰が造る、考此に及ばざる者は、亂茲に生ず、右丞、李を送るに殷勤丁寧、此の誠訓を爲す、我が日本人の此の如き題目に出會する時の作は如何、阿附佞媚の言を羅ね、醜態言語に絶す、宜しく此等の詩を三讀四讀すべきなり、

寒食城東卽事

寒食城東の卽事

清溪一道穿桃李。

清溪一道桃李を穿ち、

演漾綠蒲涵白芷。

綠蒲演漾し白芷涵す、

溪上人家凡幾家。

溪上の人家凡を幾家、

落花半落東流水。

落花半落つ東流の水、

蹴鞠屢過飛鳥上。

蹴鞠屢ば過ぐ飛鳥の上、

鞦韆競出垂楊裏。

鞦韆競ひ出づ垂楊の裏、

少年分日作遊。

少年分日遊遊を作す、

不用清明兼上巳。

用ひず清明と上巳とを、

て樹に懸け、架を立て之を爲す、秋千に作る、香榎のみ、清明、古曆にては三月の節、新曆にては四月五日、又は六日、上巳、古曆三月三日、水上に觀して疾病惡氣を除くなり、

【題義】冬至より後一百五日、乃ち清明前二日を以て寒食と爲す、城中、火を禁ずること三日、晉の文公、林を焚きて、介子推を求む、子推、木を抱きて死す、文公之を哀しみ、禁ず、人の是の日、火

を擧ぐることを、

【大意】清溪の一道は兩岸の桃李を穿ちて、綠蒲が演漾ひ、又は白芷が涵してあるを見る、蹴上の人家は幾家あるやは知らず、落花は半東流の水に落ちて去る、岸上に遊ぶ少年は蹴韆して鞦韆は飛鳥の邊まで高く飛ぶ、又女兒は鞦韆に乗りて垂楊の裏に在り、少年輩は寒食と清明と上巳と日をつけて各の遊遊を作し、清明の遊は何、上巳の遊は何と區別せざるもの如し、

【餘論】右丞の詩は杜甫と同じく、字字來歴有る所に技倆を示すもの如し、來歴あるを是と論ずる者、非と論ずる者あり、余は來歴あるを是とする論者に屬するもの、顧可久曰く、流麗溫雅と、余は寒食汜上作の七絶を以て名篇と思ふ、是の詩は遠く彼の七絶に及ばざるなり、

不遇詠

不遇の詠

北闕獻書寢不報。

北闕に書を獻じて寢みて報せず、

南山種田時不登。

南山に田を種えて時登らず、

百人會中身不預。

百人會中身預らず、

五侯門前心不能。

五侯門前心能はず、

古詩 寒食城東卽事 不遇詠

【注】不報、漢の朱買臣、長安に至り、闕に詣りて上書す、久不報と『漢書』にあり、不登、『禮記』に、凶年穀不登とあり、百人會、『世說』に、孝武西堂に在りて會す、伏前預かり坐す、選りて車より下り、其の

身投河朔飲君酒。身は河朔に投じて君が酒を飲む、
 家在茂陵平安否。家は茂陵に在りて平安なりや否や、
 且共登山復臨水。且く共に山に登り復水に臨み、
 莫問春風動楊柳。問ふ莫れ春風の楊柳を動かすことを、
 今人作人多自私。今人人と作り多く自ら私す、
 我心不說君應知。我が心説はず君應に知るべし、
 濟人然後拂衣去。人を濟うて然して後衣を拂うて去らん、
 肯作徒爾一男兒。肯て徒爾の一男兒と作らんや、

と俱に五侯の上客と爲る、長安醉して曰ふ、谷子雲が筆札、據雲卿が舞否と、其の信用せらるるを言ふなり、河朔、漢末の劉松と冀州は、三伏の際、寒夜間飲して醉を極め、無知に至り、以て一時の身を避くと云ふ、故に河朔に避暑の飲あり、

【題義】不遇を歎じて作る詩、案するに、右丞自身、決して不遇の人と謂ふを得ず、然らば他に不遇の人ありと假定して作りしものなるか、余は恐らくは假定しての作と思ふなり、
 【大意】北闕に上書して我を認められんと欲するも、其の事寝んで報せられず、退いて南山に嘒やす

も不幸にして登らず、百人會する席に百一人となれば、我一人は除かる、五侯の門に遊ばんと欲するも、谷水や樓護の如く五侯の職心を得る能はず、身は河朔の豪傑に寄せて聊か酒を飲むを得るも、官を免められたる馬相如は茂陵に在りて平安なりや否や、若し平安ならば其の不遇を歎せずして、我と共に山に登り復水に臨んで遊ばん、問ふこと莫れ世間は春風習習として楊柳を動かすことを、今人の性質は多く自ら私を主義と爲る、それは我が心の説ばざる所、君も余が心を知るであらう、我は私を嫌ふが故に他人を濟うて後、衣を拂うて去らん、肯て空空寂寂たる一男兒にして老いんや、
 【餘論】此の篇、三度換韻して成る、蓋し題目として漢魏六朝の間に無き所のもの、右丞の新創と謂つて可、

王右丞集卷六終

〔義〕 三輔黃圖に、栢梁臺は武帝元鼎二年春起、此臺長安城中北門内に在り、三輔舊事に云ふ、香栢を以て築と爲すなり、帝嘗て其の上に置酒し、羣臣に酌し和詩せしむ、七言詩を能くする者、乃ち上るを拜、太初中臺災す、(以上) 今日傳ふる七言聯句なるものは、後世の聯作言ふに足らざるなり、建章、宮は未央宮の西、長安城外に在り、武帝太初元年に、栢梁、災あり、帝是に於て建

王右丞集卷七

近體詩 三十九首

奉和聖製賜史供奉曲江宴應制

聖製史供奉に曲江宴を賜ふに奉和す、應制

侍從有鄒枚瓊筵就水開。

侍從鄒枚あり、瓊筵水に就きて開く、

言陪栢梁宴新下建章來。

言に陪す栢梁の宴、新に建章より下り來る、

對酒山河滿移舟艸樹廻。

酒に對して山河滿ち、舟を移して艸樹廻る、

天文同麗日駐景惜行盃。

天文麗日に同じ、景を駐めて行盃を惜む、

【注解】 侍從、天子の左右に給事する者、官名にはあらず、鄒枚、梁王に文學を授けし人、就水、曲江池上なり、栢梁、漢の亡名氏撰なる『三輔黃圖』に、栢梁臺は武帝元鼎二年春起、此臺長安城中北門内に在り、三輔舊事に云ふ、香栢を以て築と爲すなり、帝嘗て其の上に置酒し、羣臣に酌し和詩せしむ、七言詩を能くする者、乃ち上るを拜、太初中臺災す、(以上) 今日傳ふる七言聯句なるものは、後世の聯作言ふに足らざるなり、建章、宮は未央宮の西、長安城外に在り、武帝太初元年に、栢梁、災あり、帝是に於て建

東宮を作る、千門萬戸を廣爲す。

【題義】玄宗、中書省の務劇しく、文書滯多きを以て、乃ち文學の士を選び、翰林供奉と號し、集賢院學士と、分掌して詔書を制せしむ、開元二十六年又改めて翰林學士と爲し、別に學士院を置き、内命を專掌せしむ、乃ち翰林供奉に曲江池に於て賜宴あり、玄宗先づ詩成る、右丞輒ち之に和して作る、天子の命、之を應制と曰ふ、

【大意】侍從には鄒枚の如き文學の士あり、乃ち此の學士等と曲江池上に環宴を開き玉ふ、臣等は言に柏梁臺に陪する光榮を荷ふ、天子は新たに建章宮より茲に下降し玉ふ、酒に對すれば山河滿つるの豊富あり、舟を移せば舳舳廻るの奇觀あり、天文即ち天子が作らるる文章は麗日と同じく光輝あり、是に於て日影を駐めて行盃を懸惜する、

【餘論】此の詩は五律の正體とす、應制詩、必ず排律か或は短律、古體及び絶句は非禮と爲せしもの如し、此の篇、麗純正に題目に副ふ、蓋し玄宗が曲江宴詩は「全唐詩」に於て之を闕く、

從岐王過楊氏別業應教 岐王に從ひ、楊氏が別業を過ぐ、應教
楊子談經所淮王載酒過 楊子經を談する所、淮王酒を載せて過ぐ、

興蘭啼鳥換坐久落花多 興蘭にして啼鳥換り、坐久しうして落花多し、
逕轉廻銀燭林開散玉珂 逕轉じて銀燭廻り、林開いて玉珂散す、
嚴城時未啓前路擁笙歌 嚴城時未だ啓かず、前路笙歌を擁す、

【注釋】楊子、漢の楊子雲、家素貧、酒を嗜む、人其の門に至る者なり、時に好事の者あり、酒肴を載せて遊學す、楊氏、姓を同じうす、因つて用ふ、淮王、漢の淮南王なり、學術を好み、節を折りて士に下り、英高を招致し、言を以て盡ふ、今以て岐王の道を學ぶに比す、嚴城、梁の何遜の詩、禁門嚴閉、嚴城方響、夜とあり、

【題義】岐王、名は範、睿宗の第四子、初の鄭王と爲り、次ぎに衛王と爲り、夏に岐王と爲る、學を好み、書に工み、文學の士を愛し、士、貴賤と無く、皆盡く禮接せらる、右丞は之に陪從して楊氏が宅を訪ひ、命あり此の詩を作る、魏晉以來、天子の命を應詔、應制と稱し、太子の命を應令と稱し、諸王の命を應教と曰ふ、

【大意】楊子雲が經を談する所、淮王が酒を載せて之を訪ふ、興味の閑なる、啼鳥が屢ば換るを見、談坐の久しき、益す落花の多きを知る、既にして夜に入る、歸路に就きて逕に銀燭の光が廻る、林の開闢なる邊に及んで各の東西に玉珂を散じて別る、嚴城の門は猶未だ啓かず、夜遊するもの在于るが爲め、前路笙歌を擁する家あり、

【餘論】明の紙齋詩話に、前人の詩、落花思致あるものを言へば、三あり、維が興闋にして啼鳥換り、坐久しうして落花多し、李嘉祐が細雨衣を濕はし看るに見えず、閒花地に落ち聽くに聲無し、荆公が細かに落花を數へて應に坐久しかるべし、縦く芳艸を尋ねて歸を得ること遅し、余、今謂ふ、興致似たりと雖も、自から甲乙丙あるを知る、

從岐王夜讌衛家山池應教

岐王に從ひ夜衛家の山池に讌す、應教

座客香貂滿宮娃綺幔張

座客香貂滿つ、宮娃綺幔張る、

澗花輕粉色山月少燈光

澗花粉色輕く、山月燈光を少く、

積翠紗窗暗飛泉繡戶涼

積翠紗窗暗く、飛泉繡戶涼し、

還將歌舞出歸路莫愁長

還つて歌舞を將て出づ、歸路長きを愁ふる莫れ、

【注解】香貂、高官の代名詞、貂の尾を以て冠の飾とすればなり、宮娃、宮女の代名詞、娃は美好の貌、綺幔、司馬相如が「長門賦」に「張三羅綺之帳帷」とあり、

【大意】滿座の客は皆香貂の人なり、座席を周旋して綺幔を張るは皆美人なり、澗花を看れば粉色良に輕妙なり、山月の輝あり、燈光の減少するも可し、積翠が鬱蒼たる故は紗窗は暗きも、庭屋には飛

泉あるが故に繡戶は涼し、還るには美人が之を送り、餘興あるが故に、歸路の長きは愁ふべからず、
【餘論】此の詩右丞集中に於て太佳なるものにあらず、輕と少との二字、工夫の細かなる所あるのみ、

和尹諫議史館山池

尹諫議が史館の山池に和す

雲館接天居霓裳侍玉除

雲館天居に接し、霓裳玉除に侍す、

春池百子外芳樹萬年餘

春池百子の外、芳樹萬年の餘、

洞有仙人籙山藏太史書

洞には仙人の籙あり、山には太史の書を藏す、

君恩深漢帝且莫上空虛

君恩漢帝より深し、且く空虛に上ること莫れ、

【注解】雲館、漢の左思が「吳都賦」に、虹蜺懸帶於雲館とあり、館の高く聳ゆるなり、天居は天子の居座を謂ふ、霓裳、楚辭に青雲女兮霓裳とあり、玉除、除は殿階を謂ふ、百子、漢の劉歆の「西京雜記」に、戚夫人が侍兒、賈佩蘭説、宮内に在る時、常に七月七日を以て百子池に臨み、子蘭の樂を作すとあり、子蘭は所謂西域、葱嶺の北に在り、今日は新疆の和闐州、萬年樹「西京雜記」に、初め上林苑を修す、靈臣、遠方より各の名果異樹を獻す、亦美名を製爲し、以て奇異を標するあり、中に千年長生樹十株、萬年長生樹十株あり、仙人籙、仙道に關する書籍、太史書、史記を著せし太史公は百家の雜語を整理して、之を名山に藏す、上空虛、「葛洪神仙傳」に、河上公は其の姓字を知ること莫し、漢の文帝の時、草を藉んで鹿を河の濱に爲る、帝、老子を禮す、頤る之を好む、解せざる所あり、數ば時人に問ふ、答ふる者なし、使者を遣り、之を河上公に問はしむ、公曰く、道は寧く、德は貴し、悉かに

問ふべきにあらず、帝即ち其の庵に幸し、朝から之を問ふ、帝曰く、子、道ありと雖し、猶ほ朕が民なり、自から問する能はず、何ぞ乃ち高きや、公、即ち筆を操し坐して聽る、冉冉虚空の中に在り、地を去る數丈、俄仰して答へて曰く、余、上、天に至らず、中に星せず、下、地に居らず、何の臣民か之をらん、帝即ち車を下り、稽首して曰く、朕、不徳を以て、先業を統ぶるを委うす、才小にして任大、堪へざるを憂ふ、世事を治むと雖し、心、道に敬す、直た時昧を以て、了せざる所多し、願はくは道君皇て教ふるあれ、公、書書二巻を授く、朕にして其の所在を失ふと、

【題義】尹愔は秦州天水の人、博學にして、尤も老子の書に通ず、初め道士たり、玄宗、老子を尙ふ、愔を薦むるものあり、召對喜び甚し、厚く之を禮し、諫議大夫、集賢院學士兼修國史に拜す、固辭して起たず、詔あり道士の服を以て、事を視せしむ、乃ち職に就き、専ら集賢史館圖書を領す、開元の末卒すと、宋祁が『唐書』にあり、尹が山池の詩を示されたるに右丞が和して此の詩を作る、

【大意】史館は堂堂たる高館、乃ち天子の居に接して聳ゆ、霓裳、即ち道人の服を衣て以て玉除に待す、春池は雲の百子池外に光榮あり、芳樹は曾て獻せられし萬年樹以上の華麗なり、而して仙洞には仙人録多くあり、名山には太史の書を多く藏す、今日天子の恩は漢の天子の恩よりも深し、古の河上公の如く虚空に半上り我は臣民にあらずなどと言ふこと莫れ、

【餘論】短律と雖も、尹が道士たる所以、尹が諫議たる所以、尹が王臣たる所以、説き盡して切當なり、雲館、霓裳、春池、芳樹、願ならざる無し、綺ならざる無し、五律の上乗なるもの、今人動もすれば道士に附るに、釋子の語を以てし、釋子に附るに道士の語を以てし、體を成さざるものあり、此等の詩を精讀して、真宗を知るべきなり、百子は明板の王維集及び趙注王維集同じ、百舛に作る本は非なり、

同崔員外秋宵寓直

崔員外と同じく秋宵寓直

建禮高秋夜、承明候曉過、

建禮高秋の夜、承明、曉を候して過ぐ、

九門寒漏徹、萬井曙鐘多、

九門寒漏徹し、萬井曙鐘多し、

月迴藏珠斗、雲消出絳河、

月迴にして珠斗を藏し、雲消えて絳河出づ、

更慚衰朽質、南陌共鳴珂、

更に慚づ衰朽の質、南陌共に珂を鳴らすを、

【題義】崔員外と共に宮省に寓直して、夜より曙に達する狀を敘す、
【大意】建禮門には高秋の夜宿直し、承明廡には曉色を候うて出仕す、夜静かなるが故に九門に寒漏の徹するを聞き、曉も亦閉なるが故に萬井に曙鐘の響渉るを聞く、月光は迴たる中に斗が珠の如く貫ぬくを藏し、雲影消したるを以て絳河の明かなるを見る、更に慚づ我は衰朽の質、退隱して居る筈の者が、壯年の者と同じく參内したり、退宮したりして、南陌に共に玉珂を鳴らして馳することを、

【餘論】五律の作法、杜甫の如きは起二句必ず對す、杜甫のみならず盛唐の大家多く然り、而して此の法、中唐以下亂る、引いて我が邦に及んで、起句は對を爲さざるもの如く思へり、右丞の詩、或は不對のものありと雖も、奉和聖製より此に至る、皆起句對を成して作る、盛唐の正法宜しく此の如くなるべし、後進は必ず注意すべし、

奉和楊駙馬六郎秋夜卽事

楊駙馬六郎が秋夜卽事に奉和す

高樓月似霜秋夜鬱金堂

高樓月霜に似たり、秋夜鬱金堂、

對坐彈盧女同看舞鳳凰

對坐して盧女を彈じ、同じく看る鳳凰舞ふことを、

少兒多送酒小玉夏焚香

少兒多く酒を送り、小玉夏に香を焚く、

結束平陽騎明朝入建章

結束平陽の騎、明朝建章に入る、

【注解】鬱金堂、鬱金香を以て堂に添ふるなり、沈佺期が詩に盧家少婦鬱金堂とあり、盧女、自名なり、梁の武帝の詩、昔聞女子名芙蓉、十五嫁爲盧家婦とあり、舞鳳凰、漢の班固が「東京賦」に、舞丹穴之鳳凰とあり、少兒、『漢書』に、衛青が父衛季、其と爲つて、平陽の曹壽が家に給事す、曹壽、武帝の孫、陽信長公主に侍す、衛季、主の信宿婦と通じ、青を生む、青、故に姓衛氏を言す、衛媼が長女君嬙、次女少兒、又次文子夫、子夫、武帝に奉せられ、後、后と爲る、霍仲孺は少兒と通じ、金瓶を生む、小玉、吳王夫差の女、小玉死する後、形を玉の前に見ばす、其の母之を抱けば、舞臺として煙霧の如く散す、平陽騎、漢の大將軍衛青は平陽の人、他家の騎と異りて、平陽公主に從ふ、節の子夫が武帝に奉せらるるの故を以て、衛青は建章監侍中と爲る、

【題義】駙馬都尉の官たる、楊氏が秋夜卽事の詩を示されたるを和して贈りしなり、魏晉以後、天子の女、所謂公主なるもの夫となるものは必ず是の官を拜す、楊も亦然るなり、

【大意】高樓を照す月色は正に霜の如く白し、此の月を賞しながら秋夜居る所は鬱金堂たるなり、堂上に美婦と對坐して盧女曲を彈じ、且同じく看る佳人が鳳凰の舞を爲すを、而して少兒は多く酒を送り來り、小玉は旁に坐して香を焚く、髪を結び束ぬる平陽の騎は、秋夜の遊に留連せず、明朝は建章宮に入りて其の務に就く、

【餘論】此の篇、駙馬の駙馬たる所以を敘述するに過ぎずして、特に讀すべき所無し、

酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作

虞部蘇員外が藍田の別業を過ぎて留まられざるの作に酬ゆ

貧居依谷口喬木帶荒邨

貧居谷口に依り、喬木荒邨を帯ぶ、

石路枉迴駕山家誰候門

石路枉げて駕を廻らし、山家誰か門に候する、

漁舟膠凍浦獵火燒寒原

漁舟凍浦に膠し、獵火寒原を燒く、

近體詩 奉和楊駙馬六郎秋夜卽事 酬虞部蘇員外過藍田別業不見留之作

唯有白雲外疎鐘聞夜猿。

唯白雲あるの外、疎鐘夜猿を聞く、

【題義】虞部員外郎は工部に屬す、官從六品上、蘇は姓、右丞が藍田別業を過ぎ、留宿せずして歸り、而して詩を贈られたるが故に、右丞此の酬詩を作る、

【大意】我が貧居は桐谷口に依る、荒邨は需木が一行に帶す、磊砢たる石路を枉げて廻駕せられたるも、山家儀禮に熟れざる僕童輩候門の禮を聞く、舟游の慰を爲さんと思へども、漁舟は皆凍浦に膠したる如く動かす、平原の游を以て遇せんと欲するも、是も猛火が寒原を燒きて良に殺風景なり、唯白雲あるの外は、疎鐘の聲と夜猿の聲を聞くのみ、

【餘論】此の詩も、起二句、對仗を以て成る、平易の中、品地極めて高く、寸毫の俗氣無き所、右丞としての面目あり、「唐賢三昧集」之を採録す、洵に我が心を獲たり、

酬比部楊員外暮宿琴臺朝躋書閣率爾見贈之作

比部楊員外が暮に琴臺に宿し、朝に書閣に躋り、率爾贈らるるの作に酬ゆ

舊簡拂塵看鳴琴候月彈。

舊簡塵を拂うて看、鳴琴月を候して彈す、

桃源迷漢姓松樹有秦官。

桃源漢姓に迷ひ、松樹秦官あり、

空谷歸人少青山背日寒。

空谷歸人少く、青山背日寒し、

羨君棲隱處遙望白雲端。

羨む君が棲隱の處、遙かに望む白雲の端、

【大意】書閣に躋るときは舊簡即ち古書の塵を拂うて看、琴臺に宿するときは鳴琴月を候して彈す、其の居は桃源の如く幽邃なれば、秦人以外に漢人あることは信せず、其庭に在る松樹は秦時大夫に封せられたるかと思はるる老木なり、而して空谷は歸る人甚だ少し、青山は日の背面に在りて、恆に寒し、良に羨む君が棲隱の幽處なるを、遙かに望む白雲の端、

【餘論】此の篇、屬可久評する如く、冲澹清俊、其の本色を見る、余は特に空谷の十字を愛誦するものなり、

酬嚴少尹徐舍人見過不遇

嚴少尹、徐舍人、過ぎらるるも遇はざるに酬ゆ

公門暇日少窮巷故人稀。

公門暇日少く、窮巷故人稀なり、

偶值乘籃輿非關避白衣。

偶々籃輿に乗るに値ふ、白衣を避くるに關するにあらず、

近體詩 酬比部楊員外暮宿琴臺朝躋書閣之作 酬嚴少尹徐舍人見過不遇

不知炊黍否。誰解掃荆扉。 知らず黍を炊ぐや否や、誰か荆扉を掃ふことを解せん、
君但傾茶椀無妨騎馬歸。 君但茶椀を傾けよ、馬に騎りて歸るを妨ぐることを無し、

【注解】公門、官省を曰ふ。暇日、暇日。少、少。最、最。餘、餘。二人、公務の爲め休日少なきを曰ふ。乘、乘。重、重。晉の陶淵明、脚疾あり、嘗て籃輿に
乘り、一門生と二兒となして之を坐せしむ。又先日酒無し、菊を摘んで把に置ち、其の側に坐す、飯望すること久しうして白衣の人
至るを見る、乃ち江州刺史王宏、酒を送るなり、復ち酌分請うて歸る。炊黍、三國の世、林董、字は德信、始め名更たり、志介あり、
嘗て弟が家に過ぐ、姉爲めに餅を饗し黍を炊ぐ、而かも留まらずして去る。

【題義】殿は姓、少尹は尹の下官、徐は姓、舍人は少尹の又下官、此の二人過ぎられたるも、不在に
て過はざりしを以て、此の詩を贈りしものなり、

【大意】公務劇しくして暇日の少き二君が特に來る、窮巷は平素故人の來ること稀なり、偶ま他出し
たるに値ひたるは、客の來るを避ける爲にはあらざるなり、主人の僕は不在と雖も、家人は黍を炊ぎ
しや否や、家人輩は殷勤に之を過する禮を聞きしならん、二君は茶なりとも喫して歸り玉ふとも、騎
馬にて歸らるるなれば、多少の時間は妨げなかるべし、

【餘論】此の詩も起句對を以て成る、二人が不在中訪はれたるも忽忽と去りて、少留せざるを怪しむ、
余此の詩を讀んで感ずることあり、余一人ならず、誰人も感ずるものあるべし、凡そ社交上、人を訪
うて、過はざる程、不決なる事は無し、又、一方より言へば、今日は此の事を爲さざるべからずとし

て、大切な時間を、客に接する爲め、其の時間を空費し去る程、不快なる事は無し、但し君子と君
子との交はりに於ては、少留も、不在も、過も不遇も、それは問題にあらざるなり、我が中井履軒
先生は、俗人來りて平生の疎闊を謝すれば、曰く疎闊を以て我は喜ぶ所なり、何ぞ謝を用ひんと、此
の言の味あるは、俗人の知らざる所とす、

慕容承攜素饌見過

慕容承素饌を攜へ過ぎらる、

紗帽烏皮几閒居懶賦詩、

紗帽烏皮几、閒居詩を賦するに懶し、

門看五柳識年算六身知、

門は五柳を見て識り、年は六身を算へて知る、

靈壽君王賜雕胡弟子炊、

靈壽君王賜ひ、雕胡弟子炊ぐ、

空勞酒食饌、特底解人頤、

空しく酒食の饌を勞して、特底人頤を解く、

【注解】烏皮几、黒漆を以て几を飾りたる物、六身、「左傳」に、結廬の老人、子無し、人、食を與へ、其の年を問ふ、曰く臣は小
人なり、紀年を知らず、臣生るるの歲、正月甲子朔、四百四十五甲子なり、其の季、今に於て三の一なり、東走りて謝を朝に問ふ、
則卿が曰く、七十三年なり、史記が曰く、亥二首六身あり、下の二は身の如し、是其の目數なり、士文伯曰く、然らば則ち二萬六千
六百六旬なり、略して曰へば、二首は二萬、六身は六千六百六十日と爲る、靈壽、「漢書孔光傳」に、大節に靈壽杖を賜ふとあり、靈
壽は木の名、竹に似て節あり、長八九尺、圍三四寸に過ぎず、自然に杖削に合ふ、削治を須ひず、解人頤、「漢書」に、世に時を解

近體詩 慕容承攜素饌見過

く者無し。匡鼎來りて詩を説く、人の眼を解く、解頤とは、人をして笑うて止まざらしむるなり。

【題義】慕容承なる人が、素饌即ち膳立をしたるものを備へて過訪せられたるを謝するなり。

【大意】紗帽を著け烏皮几に倚る、閒に居ると雖も而かも詩を賦するに懶きを覺ゆ、門は五柳を看て我が家であることを識り、年は六身を算へて我が年であることを知る、家に靈壽杖あり、簡は君王の賜ふ物、厨に雕胡あり、弟子が來り炊ぐ、君をして空しく酒食の饌を勞せしむ、馳走が充分にして吾が頤を解かしむるか。

【餘論】此の詩の妙は、解頤の原意を翻して、以て酒食の方へ利用したる所に在り。

酬慕容上

慕容上に酬ゆ

行行西陌返駐轡問車公

行き行きて西陌に返り、轡を駐めて車公に問ふ、

挾轂雙官騎應門五尺童

轂を挾む雙官騎、門に應ず五尺の童、

老年如塞北強起離牆東

老年塞北の如く、強ひて起つて牆東を離る、

爲報壺邱子來人道姓蒙

爲に報ず壺邱子、來人道ふ姓は蒙と、

【注釋】車公、晋の車引警て程淵が清中と爲る、會ありて問じからざるときは、温顔ち曰ふ車公無く樂まず、晉書「世宗王辟傳」

に、匡鼎「晉書李密傳」に、内無應門五尺之童とあり、塞北、「淮南子」に、塞翁が馬の事を出す、人間の弱點、本、定まり無きを謂ふ、轡車、一巻の發機に老夫陳轡車とあり、今は強ひて離るるを謂ふ、壺邱子、「高士傳」に、壺邱子は鄙人なり、道法甚だ饒る、列禦寇、之に師事す、姓蒙、莊子は蒙の人、蒙以て蒙に通用せしむ、

【大意】乙地甲地に行き行いて西陌に返る、轡を我が家の門に駐めて旁の人に問ふ、轂を挾んで至る雙官騎は誰である、門に應ずる家童の禮は如何にや、我は老に及んで塞翁の如く禍福の常ならざるを觀ず、今日は強ひて起つて牆東を離れて遊ぶ、爲めに報ず我が知己にて壺邱子の如き高士に、來訪せられし人は、古の蒙叟の如き恬澹無爲の人である、

【餘論】此の詩の意を案するに、右丞が外出して、歸家に際し、蒙が來りて門に在りしが如し、自らを敘し、彼を敘し、意義良に明白なり、故事を多く用ふことは、右丞の長所にてもあり、短所も亦此にあり、曰く車公、曰く壺邱子、曰く姓蒙、不用意に之を讀めば、誰を指したるや人をして迷はしむ、

酬張少府

張少府に酬ゆ

晚年唯好靜萬事不關心

晚年唯靜を好み、萬事に關心を關せず、

自願無長策空知返舊林

自ら願ふ長策無く、空しく知る舊林に返るを、

近體詩 酬慕容上 酬張少府

松風吹解帶山月照彈琴。

松風解帶を吹き、山月彈琴を照らす、

君問窮通理漁歌入浦深。

君窮通の理を問はば、漁歌浦に入りて深し、

【注解】長策、漢書王吉傳を案するに、治を欲するのまは、不世出なり、公卿宰に其の時に遭遇するを得、言は難かれ、誰は従はる、然して未だ萬世の長策を建て、明主を三代の隆に導げたるはあらず、窮通、莊子に、子貢曰く古の道を得る者、窮し亦樂み、通し亦樂む、樂む所は窮通にあらざるなり、

【題義】一縣の令を明府と曰ふ、明府を輔翼する者を少府と曰ふ、張は姓、是の人の贈詩に對し、之に酬ゆるなり、

【大意】五十以上の年になりては唯靜味を好む、人間の萬事一向に關心せず、自己を反省して知る世を教ふの長策を有せず、退きて舊林に返るの善きを知るのみ、舊林の靜味は如何、讓讓たる松風が解帶を吹き、皓皓たる山月が我が彈琴の座を照らす、君が若し窮通の理を問はば、漁歌浦に入りて深しと答へんのみ、

【餘論】五言急上右丞の本色に入る、此等の詩、司空表聖の所謂、持之匪強、來之無窮もの、唐賢三昧集に於て黃培芳評して、宕開收言、不盡意、此亦一法と、顧可久曰く俊逸、

喜祖三至留宿

祖三が至りて留宿するを喜ぶ

門前洛陽客下馬拂征衣。

門前洛陽の客、馬より下りて征衣を拂ふ、

不枉故人駕平生多掩扉。

故人の駕を枉げされば、平生多く扉を掩ふ、

行人返深巷積雪帶餘暉。

行人深巷に返り、積雪餘暉を帶ぶ、

早歲同袍者高車何處歸。

早歲同袍の者、高車何れ處にか歸る、

【注解】同袍、詩に、豈曰無衣、與子同袍とあり、高車、史記子定國傳に顯馬高車とあり、

【題義】祖三は祖詠なり、洛陽の人、開元十二年の進士、右丞と特に親交あり、來り留宿せられたるを喜ぶ詩なり、

【大意】門前に留まる客は洛陽より至る、馬より下りて先づ衣服を整ふ、之を迎へて主人曰く、故人の駕を枉ぐるにあらざれば、平生は多く門扉を掩ふ、故人にあらざる普通の行人は我を訪ふ人にあらず、深巷に返る、積雪が日に映じて餘暉を帶ぶるを看るのみ、年、我より若き同袍の者よ、高車は何れの處に向つて歸るぞや、

【餘論】此の詩も亦「唐賢三昧集」に入る、行人の十字、敘景自然喜ぶべし、早歲の二句は他人を言ひ、以て其の厚意を見すと顧可久辨す、然り祖三の歸を問ふにあらざるなり、祖詠の詩、四年相見せ

す、相見復何を爲ん、手を握りて言未だ畢らず、却つて別離を傷ましむ、堂に升り還馬を駐め、醴を酌んで俊ち兒を呼ぶ、語默自ら相對す、安んぞ傍人の知るを用ひん、右丞は人の字二、祖は相の字三あり、偶然の病と爲すなり、

酬賀四贈葛巾之作

賀四が葛巾を贈るの作に酬ゆ

野巾傳惠好、茲脫重兼金。

野巾惠好を傳ふ、茲脫兼金より重し。

嘉此幽棲物、能齊隱吏心。

嘉す此の幽棲の物、能く隱吏の心を齊ふ、

早朝方暫挂、晚沐復來簪。

早朝方に暫く挂け、晚沐復來つて簪す、

坐覺羈塵遠、思君共入林。

坐に覺ゆ羈塵の遠きことを、君を思うて共に林に入る、

【注解】 五取、取は賜と同じ、贈と同じ、他人が贈物に對して敬稱する語、兼金は好金を謂ふ、其の價、當の金に兼倍するが故なり、齊の江淹が時に承安重兼金とあり、晚沐、晚日に休沐するなり、入林、「世說」に、謝公違ふ、兼章若し七賢に遇へば、必ず自ら臂を把りて林に入らんとあり、

【題義】 賀四が葛巾を贈られ、且、詩を以てせらるるに酬ゆる作なり、

【大意】 野巾てふ好物の惠あるを傳ふ、茲の脱は實に兼金より重し、我が此の幽棲物を嘉納する所以

のものは、之を戴けば隱吏の心を能く齊へしむればなり、早天に朝賀する時は暫らく床上に挂け、晚日に休沐する時は乃ち取りて以て簪す、坐ろに覺ゆ羈塵と遠ざかることを、君と共に此の葛巾を戴きて山林に入らんと思ふ、

寄荊州張丞相

荊州張丞相に寄す

所思竟何在、悵望深荆門。

所思竟に何くに在る、悵望荆門深し、

舉世無相識、終身思舊恩。

舉世相識無し、終身舊恩を思ふ、

方將與農圃、藝植老邱園。

方に農圃に與かるを將て、藝植して邱園に老いんとす、

目盡南飛鳥、何由寄一言。

目は盡く南飛の鳥、何に由りて一言を寄せん、

【注解】 所思竟何在、悵の劉孝綽の詩に、所思竟何在、相望徒盈盈とあり、荆門、荊州に在る山の名、唐人多く荊州を以て荆門と稱す、特に山を指さざる時あり、方將、先輩之を「ハワシヤウ」と訓したる本あり、「シヤウ」とすれば去聲にて、平聲にあらず、平聲にあらずれば、詩體を成さず、余は斷じて平聲なりと定む、

【題義】 開元二十五年に、監察御史周子諒、上書して旨に忤ふ、之を殿庭に擗つ、朝堂、之を杖死するに決す、尙書右丞相、張九齡、曾て子諒を推薦せしを以て、荊州の長史に左遷せらる、九齡、荆

州に在るを以て右丞が此の詩を寄せしなり、

【大意】我が思ふ所の魂は何くに向うて在る、唯悵然として望む荆門の深きを、一世を擧げて眞の相識は無し、相識としては終身張丞相の舊恩を思ふのみ、晩年は身を農圃の間に託して、蔬菜を研作して以て邱園に老いんと志す、荆門を望むも視力は盡く、唯南天即ち荆門の方へ飛ぶ鳥を見るのみ、一言の謝禮を欲べんと欲するも其の由は無きなり、

【餘論】此の詩は、至誠感恩を欲する意彰彰たり、字句の瑣細、論ずるの要なし、

朝川閑居贈裴秀才迪

寒山轉蒼翠秋水日潺湲

朝川の閑居、裴秀才迪に贈る

倚杖柴門外臨風聽暮蟬

寒山轉た蒼翠、秋水日に潺湲、杖に倚る柴門の外、風に臨んで暮蟬を聴く、

渡頭餘落日墟里上孤煙

渡頭落日を餘し、墟里孤煙上る、

復值接輿醉狂歌五柳前

復接輿が醉に値うて、狂歌す五柳の前、

【注解】轉を韻本に據て作る、轉にして下の日に切なり、轉は運轉、又旋轉なり、寒山が秋に向つて蒼翠と爲るなり、接輿は、春秋の世、楚の人、佯狂して世を避く、嘗て歌うて孔子を通ぐ、今以て裴迪に贈ふ、

【題義】朝川は藍田縣の西南二十里に在り、右丞が別業を此に構ふるなり、裴迪は右丞と同じく世外に志あるの人、

【大意】寒山は秋深に向つて蒼翠も轉た増す、秋水の流聲も日に潺湲の響きを増す、乃ち秋容を看んと欲して杖に倚りて柴門の外に立ち、風に臨んで嚶嚶たる暮蟬を聴く、渡頭の邊は落照の餘暉あり、墟里の邊は孤煙の上るあり、復接輿が醉ふに値うて、覺えず五柳の前に狂歌す、

【餘論】此の詩は全く陶淵明の真境より來るもの、詩法としては對を以て起し、情景一合して、毫も支離の處を見ず、元の劉須溪曰く、無情の景を以て、無情の意を欲ふ、復作者の有する所にあらず、明の顧可久曰く、清虛の景、閒適の情、佳主賓にあらずんば、此を領會する能はず、意甚だ含蓄悠長、清の黃培芳曰く、寒山轉蒼翠の五字尤も妙、渡頭の語は陶より出づ、「唐賢三昧集」之を收む、空中の音、相中の色、水中の月、鏡中の象の玄味あるを以てなるか、

冬晚對雪憶胡居士家

寒更傳曉箭清鏡覽衰顏

冬晚雪に對し、胡居士が家を憶ふ

隔牖風驚竹開門雪滿山

寒更曉箭を傳へ、清鏡衰顔を覽る、牖を隔てて風竹を驚かし、門を開けば雪山に滿つ、

近體詩 朝川閑居贈裴秀才迪 冬晚對雪憶胡居士家

灑空深巷靜積素廣庭閒
空に灑ぎて深巷靜か、素を積みて廣庭閒なり、
借問袁安舍儻然尙閉關
借問す袁安の舍、儻然として尙は關を閉づ、

【注解】 傳、胡居士、杜甫の詩に「灑空深巷積素廣庭閒」の句あり、未だ何事たるを評らかにせず、積素、謝靈運の「雪賦」に、積素未融とあり、廣庭、魏の曹植の詩に、王粲列「廣庭」の句あり、袁安、「汝南先賢傳」に、時に大雪、地に積む丈餘、洛陽の令、自ら出でて案行し、人家を見る、皆雪を除く、出でて食を乞ふ者あり、袁安の門に至る、行路有ること無し、謂ふ安已に死せりと、人をして除雪せしむ、安が無狀するを見る、問ふ何を以て出でざる、安曰く大雪人皆無う、人に干むるに宜しからず、令以て賢と爲し、舉げて孝廉と爲す、

【題義】 冬晚雪に對し、胡居士が如何に起臥して居るやを憶うて作れる詩なり、

【大意】 寒夏に曉箭を傳ふ、乃ち起ちて清鏡を把り衰顔を覽る、時に聽く隔を隔てて風の竹を驚かす聲を、如何なる音なるやと門を開いて見れば山一面皆雪なり、空に灑ぎ露霽として深巷は靜寂なり、素を積んで廣庭は深閑たり、乃ち問ふ今代の袁安の舍、儻然として尙は閉關して無事なるや否や、

【餘論】 此の詩、或は王邵の作なりと、案するに「唐詩正聲」及び「唐詩別裁」及び「唐賢三昧集」皆之を右丞の詩として收む、余も亦右丞の詩たるを信するものなり、殊に開門の五字、古今雪を詠するもの、此を凌駕するもの無し、柳子厚の千山鳥飛絶の五絶の如き、纖俗の極、漁洋の説を待たずして知る、余は開門雪滿山と、章蘇州の門對三寒流雪滿山と、童子開門雪滿山を以て、古今雪詩の白眉とす、黃培芳曰く雪詩如此其大雅と、右丞を知るものと謂ふべし、

山居秋暎

山居秋暎

空山新雨後天氣晚來秋
空山新雨の後、天氣晚來秋なり、
明月松間照清泉石上流
明月松間に照し、清泉石上に流る、
竹喧歸浣女運動下漁舟
竹喧しくして浣女歸り、運動いて漁舟下る、
隨意春芳歇王孫自可留
隨意に春芳歇む、王孫自から留まるべし、

【注解】 浣女、晉の謝靈運「溪」に入り、二女の浣紗を見る、嘲つて曰く我は是れ謝靈運、一箭に雙鶴を射る、試みに問ふ浣紗の女、前は何處より落つ、二女答へて曰く、我は是れ溪中の鶴、暫らく出でて溪頭に食ふ、食し罷んで又潭に還る、靈運何處に當めん、遂に見えず、其の溪を浣紗溪と名く、春芳歌、晉の劉琨の詩、屢見漁芳歌とあり、王孫、「楚辭」に、王孫遊兮不歸、春芳生兮要要とあり、

【題義】 山居して秋日の晩暮を歌ふものなり、

【大意】 空山に新雨一過して後、天氣晴朗にして晚來秋なり、明月は自から是松間に照らし、清泉は自から是石上に流る、竹林の間、喧しきは何ぞ、是浣紗の女の歸るなり、蓮葉の間を動かすものは何ぞ、是漁舟の下るなり、隨意自然に春芳は歇む、王孫は尙留まりて秋暎を賞せよ、

【餘論】 此の詩は明月の十字自然の妙ありと稱して、古今數誦する所なり、近時黃培芳曰く、寫景太多、非其至者、漁洋知るあらば、爲めに一笑を發すべし、

歸嵩山作

嵩山に歸るの作

清川帶長薄。車馬去閑閑。

清川長薄を帯び、車馬去つて閑閑、

流水如有意。暮禽相與還。

流水意あるが如く、暮禽相與に還る、

荒城臨古渡。落日滿秋山。

荒城古渡に臨み、落日秋山に滿つ、

迢遞嵩高下。歸來且閉關。

迢遞たり嵩高の下、歸來且つ關を閉づ、

【注解】長薄、草木の叢生するな薄と曰ふ、晉の陸機の詩に、按、轉運長薄とあり、閑閑、車の動搖する貌を曰ふ、

【題義】嵩高山は河南府告成縣の西北二十三里、登封縣の北八里に在り、亦、外方山と名く、東を太室と曰ひ、西を少室と曰ふ、嵩高は總名、即ち中岳なり、右丞が居、此に在りしなり、

【大意】嵩山の麓を流るる川頭は草木が叢生してある、其に旁うて行く車馬は自から閑閑たり、非情の流水も意あるが如く、空を飛ぶ暮禽は相與に還る、荒城は人無くして古渡に臨んで立ち、落日は光ありて秋山に影を留む、迢遞たる長遠の路を繞りて嵩山の下に歸る、歸り來れば直ちに關門を閉づ、

【餘論】宋の方處谷は評して曰く、閑適の趣、澹泊の味、工を求めずして、未だ嘗て工ならずんばあらず、此の詩是なり、清の紀曉嵐曰く、工を求めざるにあらず、乃ち己に獨し、己に疎し、後朴に還る、斧鑿の痕、俱に化するのみ、詩を學ぶ者、當に此を以て進境と爲すべし、當に此を以て始境と爲すべからず、須らく切實の處より入り、手方に走作せざるべし、明の顧可久曰く、此等の詩、當に其の作法條理を知るべし、前の四句、歸途景色の趣を敘し、後の四句、嵩山の景色閑曠、以て迢遞すべきの趣を敘す、景自から分屬望がらず、紀は古人に於て服せざる人、而して其の言此の如し、詩にして神に入るものと謂ふ可し、

歸朝川作

朝川に歸るの作

谷口疎鐘動。漁樵稍欲稀。

谷口疎鐘動き、漁樵稍稀ならんと欲す、

悠然遠山暮。獨向白雲歸。

悠然たり遠山の暮、獨り白雲に向つて歸る、

菱蔓弱難定。楊花輕易飛。

菱蔓弱くして定り難く、楊花輕くして飛び易し、

東臯春艸色。惆悵掩柴扉。

東臯春艸の色、惆悵柴扉を掩ふ、

【注解】菱蔓、「ヒシノヅル」なり、菱は水草、葉四出して水面に浮ぶ、夏時、小白花を著く、楊花、楊は「カハナナギ」、多く水邊に生ず、枝條垂れずして花を著く、

【大意】別墅の有る朝川に歸る、朝谷の入り口にて疎鐘の響きを聞く、漁人も樵父も己に歸去して、其の影稀なり、悠然として遠山の暮色を見つつ、唯獨り白雲に向つて歸る、路傍の水頭に或は菱蔓の

近體詩 歸嵩山作 歸朝川作

弱くして風の吹くまま定住なきを看、又楊花の風の吹くまま飛ぶを觀る、車草春艸の青青たる色を踏み來りて、惆悵として自から柴扉を掩ふ、

【餘論】此の詩、顧可久の評して、仕へて意を得ざるの作、含蓄露さずと曰ふは或は當る、菱菱の二句は人事の定節無きを比體としたるは明白なり、詩としては悠然の十字、餘味津津、

韋給事山居

韋給事が山居

幽尋得此地。詎有一人曾。

幽尋此の地を得たり、詎ぞ一人の曾てするあらん、

大壑隨階轉。羣山入戶登。

大壑階に隨つて轉じ、羣山戸に入りて登る、

庖廚出深竹。印綬隔垂藤。

庖廚深竹より出で、印綬垂藤を隔つ、

卽事辭軒冕。誰云病未能。

卽事に軒冕を辭す、誰か云ふ病んで未だ能はずと、

【大意】山中を幽尋して漸く此の地を認むるを得、此の如き幽處は詎ぞ曾て一人の來るあらんや、大なる壑は階に隨つて轉じ、羣山は戸の中から登る、庖廚の煙は深竹より出で、給事たる印綬は垂藤を隔てて挂く、卽事に官界を辭し去らんと思ふ、誰か云ふや病んで未だ能はずと、

【餘論】盧谷此の詩を評して曰ふ、曾登の二韻、險にして述無し、羣山の一句尤も奇、紀曉嵐曰く、大壑の句亦雄闊と、余曾て日光に遊び、大壑蒼雲氣、湍流爭水音の句を得たり、本田種竹居士賞して王維に通ると評せらる、全く右丞よりの賜なり、

山居卽事

山居卽事

寂寞掩柴扉。蒼茫對落暉。

寂寞として柴扉を掩ひ、蒼茫として落暉に對す、

鶴巢松樹徧。人訪蕁門稀。

鶴は松樹に巢うて徧く、人は蕁門を訪うて稀なり、

嫩竹含新粉。紅蓮落故衣。

嫩竹新粉を含み、紅蓮故衣を落す、

渡頭燈火起。處處採菱歸。

渡頭燈火起り、處處菱を採りて歸る、

【注解】蒼茫、北周の庾開府の詩、日晚荒城上、蒼茫餘落暉とあり、蕁門、左傳に、蕁門圭賈之人とあり、荆竹を以て門を構ふ、隱士の門、貧者の門なり、蕁衣、庾開府の詩に、蕁蒲舊紅衣とあり、

【大意】柴扉は掩ふが故に寂寞たり、日影は落暉に廻るが故に蒼茫たり、鶴は巢を結んで幾松樹にも在り、人は蕁門を叩くもの極めて稀、庭中の嫩竹は新粉を含み、池中の紅蓮は枯葉を落す、前方の渡頭を望めば燈火の點するを見る、處處に女兒が採菱して歸る、

【餘論】此の詩山居の寂寞を寫すが本旨なるも、熟讀すれば、澹中に極めて腴あるを知る、訪人の稀

なるは山居なればなり、鶴巢の多きは害者無きを知ればなり、竹の新粉を含むは物盛んなるなり、蓮の故衣を落すは物衰ふるなり、多と少と新と陳と極めて緻密の理を言ふ、顧可久曰く起句情致超忽にして、一聯二聯、景極めて清寂、景極めて典思、玄虚流動す、佛家解脱より来る、景を寫し、象を著はし、又、象を著けず、中聯象を著く、此は是作法、洵に余が心を獲たり、落の字二字あるは、是を病とす、

終南山

終南山

太乙近天都、連山到海隅。

太乙は天都に近く、連山海隅に到る。

白雲廻望合、青靄入看無。

白雲望を廻らせば合し、青靄看に入りて無し。

分野中峯變、陰晴衆壑殊。

分野中峯變じ、陰晴衆壑殊なり。

欲投人處宿、隔水問樵夫。

人處に投じて宿せんと欲し、水を隔てて樵夫に問ふ。

【注解】太乙、終南山と太乙とを一山と爲す説と、太乙と終南とは二山なりとの説とあり、右丞は太乙を以て即ち終南山と爲す、横に關中の南面に互り、西は秦隴に起り、東は東田に徹す、山高十八里なり、近天都、山の高きを謂ふ、帝都に近き意味は聯が驚す、連山、四面連接する山、到海隅、山の廣きを謂ふ、詩は地理志にあらす、海の有無に關係せず、廻望合、山に入りて後を顧みる則は雲影を望む、入看無、山に入りて前に進む則は瞻從つて聞く、分野、吳道暉は、「唐書三隴集注」に、分野、去聲讀と曰ふは、遠見と

謂ふべし、實に平聲にあらざるなり、乃ち天の分、地の野なり、以て陰と晴とに對を爲す、分を平聲讀とすれば、野を分つなり、何ぞ陰晴と對するを得ん、要するに中峯が高くて、天地が變化するかと訝る意、

【大意】太乙山は高大にして天都に接近する、其の支山は横廣にして海隅に奔走する、山に入るとき多く雲が有りしとも思はざるに、後を顧みれば白雲が一面に結合してある、青靄が多く有ると思ひしが、進むに従つて靄は無し、分野は變するものにあらずと思ひ居りしも、中峯に到れば其の變するものなるかと疑ふ、山高きが故なり、北壑は陰るも、西壑は晴れる、壑深きが故なり、黃昏に及んで投宿せんと思へども旅舎の有無を知らず、遙かに水を隔てて居る樵夫に問ふ、

【餘論】此の詩の絶精絶妙なるは、古今歎稱して措かざるものなり、小小の文字、山の遼廓荒遠、高深雄大、目前に彷彿す、字字金玉、句句珠寶、黃昏芳許して、四十字無一字可易と曰ふは、洵に當る、終南山に關する詩として、前後唯一人のみ、孟浩然の歸終南山の詩、稍之に次ぐ、

朝川閑居

朝川の閑居

一從歸白社、不復到青門。

一たび白社に歸つてより、復青門に到らず、

時倚簷前樹、遠看原上邨。

時に倚る簷前の樹、遠く看る原上の邨、

近體詩 終南山 朝川閑居

青菰臨水映白鳥向山翻。

青菰水に臨んで映じ、白鳥山に向つて翻る、

寂寞於陵子桔槔方灌園。

寂寞たり於陵子、桔槔方に園に灌ぐ、

【注解】 白社、地名なり、河南洛陽縣の東、晉の重京、洛陽に至り、被髮して行き、逍遙味跡、常に白社中に留し、時に市に乞ふ、青門、長安都市の門、青菰、菰は水脚、マコモシ、高さ四五尺、夏秋の間、花開き實結ぶ、於陵子、「高士傳」を案するに、陳仲子は齊の人、其の兄、陳黨、齊の卿と爲り、金珠萬斛、仲子以て不義と爲す、妻子を將ひて楚に過き、於陵に居り、自から於陵仲子と謂ふ、楚王其の賢を聞きて、以て相と爲さんと欲す、使者に金百鎰を持せしめ、於陵に至り、仲子を聘す、仲子出でて使者に謝し逃れ去り、人の爲め園に灌ぐ、桔槔、水を汲むハネツルベシなり、「莊子」に不見夫桔槔とあり、

【大意】 一たび此の朝川に歸臥してより、復足跡を都門の中に印せず、時ありては簷前の樹に倚り、遠く看る原上の邨、或は青菰の水に臨んで映するを看、或は白鳥の山に向つて翻るを看る、寂寞として世の榮華と異なる於陵子、桔槔を以て園に灌ぐの高風を慕ふ、

【餘論】 此の詩も清雅極まり無し、宋の約齋は、時倚簷前樹、遠看原上邨を誦して心酔すと、詩として聊か奇なるは、白社、白鳥、青門、青菰、多く類を見ず、紀曉嵐曰く、青白二字、究めて是重複訓と爲すべからず、詩は則ち靜氣人を迎へ、自然に超妙、小疵を以て之を廢すべからず、三四の句は、自然に流出して、典象天然と、漁洋の「唐賢三昧集」採らざるは所謂訓と爲すべからざるを以てならん、沈歸愚は「唐詩別裁」に之を收め、而して曰く、三四天然、青白重複と、右丞の詩は近體に往往

同字あるを見る、久しき間の誤寫もあるならんと思ふ、

春園卽事

春園卽事

宿雨乘輕履春寒著敝袍。

宿雨輕履に乘じ、春寒敝袍を著く、

開畦分白水間柳發紅桃。

畦を開いて白水を分ち、柳に間つて紅桃發く、

艸際成碁局林端舉桔槔。

艸際碁局を成し、林端桔槔を舉ぐ、

還持鹿皮几日暮隱蓬蒿。

還つて鹿皮の几を持ち、日暮蓬蒿に隠れん、

【大意】 前日より息まざる細雨に輕履にて園中を散策する、春寒きが故に敝袍を著服して居る、畦道を南北に開いて以て白水を分流せしむ、又柳樹の間に於て紅桃が發く、艸際の道は碁局形に成りて通ず、林端には井戸の桔槔が高く舉げてある、園中を散歩して還りて後は鹿皮几を持ち、日暮れて吾は乃ち蓬蒿に隠る、

【餘論】 開畦、艸際の二聯、我が邦の俳句に適するものと思ふ、古雅喜ぶべし、

淇上卽事

淇上の卽事

屏居淇水上東野曠無山
日隱桑柘外河明閭井間
牧童望邨去田犬隨人還
靜者亦何事荆扉乘晝關

屏居す淇水の上、東野曠として山無し、
日は隱たり桑柘の外、河は明かなり閭井の間、
牧童邨を望んで去り、田犬人に隨つて還る、
靜者は亦何事ぞ、荆扉晝に乗じて關す、

【注解】淇水は何南林縣の東南、臨淇縣より出で、東北に流るるものは淇國と新河と合し、東南に流るるものは、潁陰、淇縣を経て新河に入る、右丞が一時住したる地ならん、桑柘、柘も亦桑の一種なり、閭井、邨里の野を曰ふ、

【大意】屏居は淇水の上に在り、東面は平野にして山は無し、日影は桑柘の外に隠れて、河流は閭井の間を繞りて明かなり、牧童は邨を望んで去る、獵犬は主人に隨つて還る、營營たる以外の人、即ち靜者は其の狀如何、荆扉を白日に閉鎖して居る、

【餘論】方虛谷曰く、右丞の時は山林に長ず、河明の一聯、詩人未だ有らざる所、牧童田犬の句尤も雅淨と、紀曉嵐曰く、三四如畫、「瀛奎律髓」に題目を淇上卽事とあり、諸本、淇上卽事田園とあり、余は律體を可と思ふ、田犬も獵犬に作る本あり、余は願本に従ふ、

與盧象集朱家

盧象と朱家に集る

主人能愛客終日有逢迎
賞得新豐酒復聞秦女箏
柳條疎客舍槐葉下秋城
語笑且爲樂吾將達此生

主人能く客を愛し、終日逢迎あり、
賞り得たり新豐の酒、復聞く秦女の箏、
柳條客舍に疎に、槐葉秋城に下る、
語笑且つ樂みを爲す、吾將に此生を達せんとなす、

【注解】盧象、字は韓柳、張九齡の爲め其の才を認められ、諸官に歴任して卒す、開元中、王維、崔顥と章句放縱せらる、朱家は未詳、或は榮子酒家か、新豐、梁の元帝の時に、試射新豐酒、逐勳陽臺人とあり、新豐は地名、陝西臨潼縣の東北、及び廣東長寧縣にあり、酒の美なるは廣東より出づるものならん、賞は餘なり、現金を拂はずして酒を求めるなり、「史記」の高祖紀には餘酒とあり、

【大意】朱家の主人は極めて客を好愛す、是を以て終日逢迎絶えず、天下の美酒を賞り來るのみならず、復天下の美人の箏を吹くを聞かしむ、節は正に秋、柳條は客舍を繞りて疎影と爲る、槐葉は紛紛と秋城に下る、語笑して且つ樂みを爲さん、吾は將に此の生を愉快に送らんとす、

【餘論】此の詩は、右丞集に於ては聊か平凡に屬するものなり、殊に客の字重複、到底病たるを免れず、願可久は自然正大古雅と、右丞に心酔する結果、當るもあり、當らざるもあり、此の詩に於ては當らず、

過福禪師蘭若

福禪師が蘭若に過ざる

巖壑轉微逕、雲林隱法堂。

巖壑微逕を轉じ、雲林法堂を隱す、

羽人飛奏樂、天女跪焚香。

羽人飛んで樂を奏し、天女跪いて香を焚く、

竹外峯偏曙、藤陰水夏涼。

竹外峯偏に曙け、藤陰水夏に涼し、

欲知禪坐久、行路長春芳。

禪坐の久しきを知らんと欲せば、行路春芳を長ず、

【注解】羽人、羽毛を生ずるの人、人が欲を斷つて道を得れば即ち羽人と爲る、仙人は是なり、天女、天道界に住する美女なり、禪坐、修禪狀坐なり、

【題義】福禪師は未詳、佛徒は、大底は二字の名なり、然るを一字除いて稱すること唐以來の常式と爲る、禪師も道福とか法福とか稱する人ならん、阿蘭若處を略して蘭若と曰ふ、清淨に生活する住處と云ふ意味、

【大意】禪師を訪はんと欲して、巖壑の間の細微な逕を旋轉して行く、已にして雲林の間に法堂の隱れたる如きを認む、法堂には羽人が飛んで樂を奏する圖も有り、又天女が跪いて香を焚く畫も有り、竹林外の一峯は高きが故に早く曙け、紫藤陰の水は塵無きが故に夏に涼し、禪師が禪坐する久しきを知らんと欲する人は、行路を見れば直ちに判る、行路に春艸が生長してあればなり、

【餘論】此の詩の前聯を余は禪師が事に解せずして、法堂の事に解す、右丞も法堂に上りて、即日湧きし思想を歌ひしならん、結句の意は、暗に律部の壞生戒を用ひしもの如し、比丘は夏中妄りに行歩するを許さず、艸の根や、小蟲の命を害する恐あればなり、右丞が用意の深き、驚歎すべきものあり、知らざる者は輕輕に讀過す、惜しむべきなり、

黎拾遺所裴秀才迪見過秋夜對雨之作

黎拾遺所、裴秀才迪、過ぎらる、秋夜雨に對するの作

促織鳴已急、輕衣行向重。

促織鳴いて已に急、輕衣行く重なるに向ふ、

寒燈坐高館、秋雨聞疎鐘。

寒燈高館に坐し、秋雨疎鐘を聞く、

白法調狂象、元言問老龍。

白法狂象を調し、元言老龍に問ふ、

何人願蓬徑、空愧求羊蹤。

何人が蓬徑を願みて、空しく愧づ羊蹤を求むるを、

【注解】促織、コホロギ、寒に向ふが故に機織を急げと促す蟲なり、一名蟋蟀、陰曆の七月に始めて鳴く、白法、佛典に白業と曰ふ、黑業と黒法とあり、白法を行ふ、之を白業と曰ふ、調狂象、印度に於て不空三藏が街路に安坐す、狂象奔りて此に至り、皆頓止露伏し、少頃にして去ると「僧傳」にあり、調は柔和の性に變化させるなり、元言、直言なり、「莊子」に神農氏が老龍吉に學ぶとあり

近體詩 過福禪師蘭若 黎拾遺所裴秀才迪見過秋夜對雨之作

り、求羊展、「軍輔」に、求仲と羊仲、何許の人なるを知らず、皆治軍を業と爲す、厚を授き名を過る、將湖の兗州を去りて杜陵に
歸るや、荆棘門を塞ぎ、舍中に三徑あり、出でず、唯二人之に従つて遊ぶ、時人、之を二仲と謂ふ、

【題義】黎昕は官拾遺なり、裴迪は布衣、乃ち秀才の敬稱を以てす、二人が相攜へて過訪せらる、時
秋夜にて雨を聽いて話する詩、

【大意】促織は鳴くこと正に急、單衣は盡懸衣に更ふ、寒燈を點して高館に坐し、秋雨の中に疎鐘の
響きを聞く、高僧が善法を修して昔狂象を調御したり、神仙が玄言を老龍に問ひしこともあり、我
は彼の白法を習ひ、又玄言を問はんと欲す、然るに君等は何人ぞや、我が蓬徑を顧みしぞ、蔣元卿は
羊中や求仲を教ふる資格ありしも、余は此の資格無きを愧づとなり、

【餘論】此の詩、秋節と此夜と二人と我と景情一合して、緊密なる作法とす、多くの選本之を採らざ
るは何ぞや、

晚春嚴少尹與諸公見過

晚春嚴少尹 諸公と過ぎらる

松菊荒三徑 圖書共五車

松菊三徑荒れたり、圖書五車を共にす、

烹葵邀上客 看竹到貧家

葵を煮て上客を邀へ、竹を見て貧家に到る、

雀乳先春草 鶯啼過落花

雀乳して春草に先だち、鶯啼いて落花を過ぐ、

自憐黃髮暮 一倍惜年華

自ら憐む黃髮の暮、一倍年華を惜む、

【注釋】三徑「歸去來辭」に、三徑就荒、松菊猶存とあり、進上客、陳の比約の時、西牧歸葵、可以留上客とあり、葵、昔
通「アサビ」なり、今蔬菜の意味、蓋は招待するなり、來迎にはあらず、黃髮、少年の髮は黒、老年の髮は白、大老の髮は黃、

【題義】晚春三月に嚴少尹が先導して諸公が右丞を訪ふなり、

【大意】松竹菊の三徑は皆荒る、唯圖書は五車に積むあり、諸公と共に之を讀まん、松露でも煮て以
て上客に供せん、諸公は竹を看ながら貧家に到る、雀の雛に乳するは春艸よりも先なり、鶯の啼く
は正に落花を過ぐ、我は自ら憐む黃髮の晩年に逼るを、春晚に遇うて他人より一倍に年華を惜しむ、
【餘論】右丞の卒年は六十五、然るに五十以後の詩は大底衰老や黃髮等の字を用ひて以て嗟歎す、意
ふに杜甫は儒教的に世を憂へ、右丞は佛教的に世を傷むものの如し、此の詩亦以て一端を知るに足る、

過感化寺曇興上人山院

感化寺曇興上人の山院を過ぐ

暮持筇竹杖 相待虎溪頭

暮に筇竹杖を持して、相待つ虎溪の頭、

催客聞山響 歸房逐水流

客を催して山響を聞き、房に歸りて水流を逐ふ、

近體詩 晚春嚴少尹與諸公見過 過感化寺曇興上人山院

野花叢發好谷鳥一聲幽。

野花叢發好，谷鳥一聲幽なり。

夜坐空林寂松風直似秋。

夜坐空林寂たり，松風直秋に似たり。

【注解】虎溪、廬山東林寺の溪の名、惠遠法師、客を起るに此の溪を越えず、陶淵明と陸修靜とを起りて、此の橋を過ぎ、三人大笑すと「蓮社高賢傳」に在り。空林、願本に空室に作る、空林を誇れりとする。

【題義】感化寺は總名で、山院は一人住する草庵を謂ふ、是の寺は藍田に在り。

【大意】日の暮に上人は筇竹杖を持して、我が來訪を虎溪の頭に相待つ、我が機を催さんが爲めに山の響きを聞けよと言ふ、自分の房に歸るには水流を逐うて行く、名も知れざる野花は叢がり發いて好く、名も知れざる谷鳥が一聲鳴いて幽なり、夜坐するに到りては空林愈よ寂寥、松風の颯颯たる、直秋に似たるの思ひあり。

【餘論】右丞集に裴迪の此の題詩を付す、遠からず灑陵の邊、安居十年に向んとす、門に入つて竹逕を穿ち、客を留めて山泉を聽く、鳥は啼す深林の裏、心は閒なり落照の前、浮名竟に何の益ぞ、此より願はくは棲禪せん。

夏日過青龍寺謁操禪師

夏日青龍寺を過ぎて操禪師に謁す

龍鍾一老翁徐步謁禪宮。

龍鍾たり一老翁、徐步して禪宮に謁す。

欲問義心義遙知空病空。

問はんと欲す義心の義、遙かに知る空病の空。

山河天眼裏世界法身中。

山河天眼の裏、世界法身の中。

莫恠銷炎熱能生大地風。

恠む莫れ炎熱を銷することを、能く大地の風を生ず。

【注解】龍鍾、行いて進まざるの貌、又老いて衰れ病む貌、二音合して龍と爲る、義心義、第一義心の略稱、眞理の究竟なる義、其の究竟と稱する義理を問はんと欲するなり、空病空、淨名經に、是法平等、無有二倫病、唯有空病、空病亦空とあり、病は元來空無なり、而かも其の空無に執着すれば、空も亦有と爲りて、心が憊むなり、天眼、肉眼、法眼、慧眼、佛眼、天眼、之を五眼と稱す、天眼は大千世界を徹見する眼を言ふ、法身、應身、報身、法身、之を三身と稱す、報應二身は猶ほ小にして、法身は最大なり。

【題義】青龍寺は隋の開皇二年の創建にして、弘法師が順宗の永貞元年入唐して、惠果に法を受けし寺とす。

【大意】世事に奔走して疲れたる一老翁、今日徐歩して青龍の禪宮に謁す、禪師に謁するも他を問ふにあらず、問ふ所のものは、第一義心の義理と、空病の空理であるなり、案するに禪師は肉眼の人にあらすして、天眼の人なれば、山河も大地も之を一法身と了觀せらる、是の故に夏日の炎熱も炎熱と思ふ念無し、其の念無きは大地に涼風を生ずればなり。

【餘論】此の詩を解するに、字を追ひ、句を逐はば、反つて右丞の作意を誤る。遙知の二字の如き特に然り、佛語を使用して蕤蔔の氣無き所、大家の實力を見るべきなり、「本集」に裴迪の同詠あり、

鄭果州相過

鄭果州相過

麗日照殘春、初晴艸木新。
麗日殘春を照らし、初晴艸木新なり、

牀前磨鏡客、林裏灌園人。
牀前磨鏡の客、林裏灌園の人、

五馬驚窮巷、雙童逐老身。
五馬窮巷を驚かし、雙童老身を逐ふ、

中厨辦蠹飯、當恕阮家貧。
中厨蠹飯を辦す、當に阮家の貧を恕すべし、

【注解】磨鏡客、列仙傳に、負局先生は何許の人なるを知らず、語、燕代間の人に似たり、常に磨鏡局を負ひ、吳の市中に拘へ、磨鏡を術る、一錢因つて之を磨す、輒ち問ふ主人疾苦有りや無やと、疾苦ある者には、紫丸藥を出し之に與ふ、得る者愈えざること莫し、此の如きこと數十年、後、大疫病あり、家家戸戸に藥を與へ、活者、萬を以て計ふ、一錢を取らず、吳人乃ち其の貧人なるを知ら、又「四十二章經」に、譬如磨鏡、垢去明存とあり、右丞の意は後者にあり、前者にあらず、題注を非として、題注を是とす、五馬、五馬の說多様あり、要するに天子は六馬の車、諸侯は五馬の車、漢代と唐代とを問はず、當時の人の詩を以て、之が證と爲すべきのみ、雙童、北齊の庚開府の詩、五馬遙相問、雙童來夾車とあり、中厨、古樂府に左顧敔中厨、促令辦蠹飯とあり、阮家貧、晉の阮咸は阮籍と共に竹林の游を爲し、叔父の籍と甥の咸とは道南に居り、諸阮は道北に居る、乃ち北阮は富、南阮は貧、

【題義】鄭と稱する果州の知事が訪問せられたるを謝する詩とす、

【大意】麗日が正に殘春を照すの時、昨日の雨が晴れたるを以て草木が皆新なり、乃ち牀前に於て靜かに修養し、又、倦めば堂を下りて園井に水を灌ぐ、料らざりき太守の來訪ありて窮巷を驚かさんとは、雙童が其の接待を督促して老身を逐はる、厨の中にて蠹飯を呈する爲め聊か辦ふ、幸に阮家の貧を知りて佳肴珍味の無きを恕し玉へ、

【餘論】此の詩の磨鏡を解するに、松谷は「列仙傳」を以てし、可久は「四十二章經」を以てす、松谷の學、可久の及ぶ所にあらず、余の思慮を盡る、多く松谷にあり、然りと雖も、此の句の意は、「列仙傳」にあらずして、「四十二章經」にあることは、兒童も首肯する所なり、松谷の可久を取らざるは何ぞ、

香積寺

香積寺

不知香積寺、數里入雲峯。
知らず香積寺、數里雲峯に入る、

古木無人徑、深山何處鐘。
古木人徑無く、深山何れの處の鐘ぞ、

泉聲咽危石、日色冷青松。
泉聲危石に咽び、日色青松に冷か、

近體詩 鄭果州相過 香積寺

薄暮空潭曲安禪制毒龍

薄暮空潭の曲、安禪毒龍を制す、

【注解】香積寺、長安縣の南三十里、神禾原に在り、唐の永隆二年の創建とす、宋に至り開利寺と改む、後、復、香積寺と稱す、今日に寺廢し、大小の塔を存するのみ、唯、孔稚珪の「北山移文」に、石泉咽而下澗とあり、安禪、僧伽の異名と見るべし、毒龍、「涅槃經」に、但我住處、有二毒龍、其性暴急、恐相危害とあり、

【大意】香積寺の名は耳にする久しきも、始めて訪ふの人、其の所在を知らず、里數なぞ覺えぬが雲峯の深きに入り來る、古木は蒼蒼たるも人徑は一向に無し、中途にして鐘聲を聞きたるも、深山なれば鐘の出處は一向に明かならず、泉聲は危石に當りて咽ぶ如きの音を爲し、日色は青松に當りて涼冷の氣味を覺えしむ、薄暮漸くにして空潭の曲に至れば、一人の高僧が修行して居られしに會ふ、

【餘論】此の詩は、「古今詩歸」にも、「唐詩正音」にも、「唐賢三昧集」にも、「唐詩別裁集」にも皆採りて寺觀詩中の最上乘に屬するものとす、黃家鼎は、幽而渾、中晚人有此法、多失之單と、又曰く甚淺易、甚深遠、非尋常語と、顧與新曰く、潔淨玄微、無聲無色と、日本の絶海は深雲古寺鐘の句を以て姚道衍を驚かしたるも、深雲何處鐘の自然に及ばざるなり、

過崔駙馬山池

崔駙馬が山池を過ぐ

畫樓吹笛妓、金椀酒家胡。

畫樓吹笛の妓、金椀酒家の胡、

錦石稱貞女、青松學大夫。

錦石貞女を稱し、青松大夫を學ぶ、

脫貂貫桂、醕射雁與山厨。

貂を脱して桂醕を貫り、雁を射て山厨に興ふ、

聞道高陽會、愚公谷正愚。

聞道らく高陽の會、愚公谷正に愚なり、

【注解】吹笛妓、「晉書王愨傳」に、有女妓吹笛とあり、酒家胡、漢の李延年の詩に、依倚將軍勢、剛笑酒家胡とあり、錦石、唐開府の詩に、錦石平砥面、蓮房接丹墀とあり、貞女、「水經注」に、貞女峽の西岸の高巖を貞女山と名く、山下の際に石あり、人形の如く、高さ七尺、狀、女子の如し、故に貞女峽と名く、古來相傳ふ、數女あり婦を此に取る、風雨寒暄に遇ふ、化して石と爲る、脱貂、「晉書」に、阮孚、黃門侍郎散騎常侍に遷る、嘗て金貂を以て酒に換へ、所司の彈劾に遇ふ、桂醕、醕の比約の賦に、席布醕醕、堂流桂醕とあり、高陽會、晉の山簡が高陽池上に燕會せしことあり、愚公谷、「說苑」に、齊の桓公出でて獵し、鹿を逐ひ走りて山谷の中に入り、一老を見る、公問ふ是れ何の谷と爲す、對へて曰く愚公の谷と爲す、公曰く何の故ぞ、對へて曰く臣を以て之を名く、公曰く、今、公の備狀を觀るに愚人にあらざるなり、何爲れぞ公を以て名くる、對へて曰く臣請ふ之を陳べん、臣故牝牛を畜ふ、子を生み大にして之を賣りて駒を買ふ、少年曰く牛は馬を生む能はず、遂に駒を持ちて去る、傍鄰之を聞き、臣を以て愚と爲す、故に此の谷を名けて愚公谷と爲す、

【題義】崔姓の駙馬は單に一人ならず、誰を指したるや明白ならず、蓋し崔氏が山池に過ぎ、其の狀を詠するものなり、

【大意】畫樓には吹笛の妓あり、金椀は酒家の胡の如きの狀あり、共に貧家には無き所のものなり、

庭上の石は、貞女石の如く價の貴き石あり、庭中の松は始皇が大夫に封せしとも思はるる喬松なり、禮帽を脱ぎたる後は美酒を御用商人より届けさせ、出獵して射て來る雁は下男下婢に命じて調理させる、嘗て貧なる山簡は富める習氏の池上に會せり、今日は貧なる王維は富める鄭氏の堂に來るとなり、
 【餘論】此の詩、右丞集中に於て最下に屬するもの、宜なり各家の選本一も之を採るもの無きや、

送李判官赴江東

李判官が江東に赴くを送る

聞道皇華使、方隨阜蓋臣。

聞道らく皇華の使、方に阜蓋の臣に隨ふと、

封章通左語、冠冕化文身。

封章左語に通じ、冠冕文身を化せん、

樹色分楊子、潮聲滿富春。

樹色楊子を分ち、潮聲富春に滿つ、

遙知辯壁吏、恩到泣珠人。

遙かに知る壁を辯するの吏、恩は珠に泣くの人に到らん、

【注解】皇華使、皇大中華の使者なり、阜蓋、早は黒龍なり、乃ち黒色の蓋、官二千石たる者は、蓋は黒色にて、轎乃ち車の蔽ひは朱色なり、封章、天子に上乘する文、皆、封章と曰ふ、左語、楊雄が劉向に、劉之先代人民、惟結左語、不曉文字とあり、壁人の語と同じ、文身、『禮記』に東夷被髮文身とあり、丹青を以て其の身を文飾するなり、肉體に刀を以て筆に代へ、或は象虎を畫く、水に入れば數龍畫せず、山に入るも象虎避くとの、愚俗の迷信此に至るもの如し、楊子、楊子江と鎮江との分界、富春、富春江は浙江の上流、杭州富陽縣の南に在り、泣珠、晉の于夷が獨なる『搜神記』に、南海の外に鮫人あり、水居して魚の如く、織貝

を廢せず、其の眼泣くときは珠を出す、

【題義】今日大使なり公使なりが、西洋へ赴任するや、必ず武官が一人何付と稱して隨行す、唐代に、節度使が命を奉じて各州に赴く際は、必ず判官一人隨行す、李氏は判官として之に赴く、李を送るが主旨なれば、本使は誰たるを記せず、

【大意】聞く所に依れば、判官は中國の使と爲つて、方に本使に隨行すると、宛も佳し疊語に通ずるを以て、復命の封章にも誤ること無し、而して中國の威儀ある冠冕を示して、彼等が文身の醜惡なるを教化すべし、其の道中、樹色に綠つて楊子江と鎮江との分界を知り、又潮聲の富春江に滿つるも聞くべし、我は遙かに知る本使や判官は壁の貴むべきと又賤しむべきとを辨別するの吏なり、乃ち能く泣珠の野蠻人をして中國の恩を感せしめん、

【餘論】此の詩、三四寫情、五六寫景、而して起句は對法の正を持す、一振一披、五律として上乘のものに屬す、『唐賢三昧集』之を採る、識有りと謂ふべし、

王右丞集卷七終

れ、水中するに先づ帆を揚げるに夏口よりし、風雨を案節して以て吳門に向ふ、已にして任地に著する頃は、帆は丹陽城郭に映するならん、映する所以は、前方に赤岸山を控へて楓樹の攢生するあればなり、百城には多く著任を計りて候吏が出でて待つ、太守たるの露冕は一に何ぞ其れ尊きや、

【餘論】此の時も、起句對法正し、發軔より著軔まで一脈貫通して毫も支離せず、以て後人五律を作爲する法と爲すべし、

送嚴秀才還蜀

嚴秀才が蜀に還るを送る

寧親爲令子。似舅即賢甥。

親を寧んじて令子と爲る、舅に似て即ち賢甥、

別路經花縣。還鄉入錦城。

別路花縣を經、郷に還りて錦城に入る、

山臨青塞斷。江向白雲平。

山は青塞に臨んで斷え、江は白雲に向つて平、

獻賦何時至。明君憶長卿。

賦を獻じて何れの時か至らん、明君は長卿を憶ふ、

【注解】寧親、「法言」に孝英大於寧親とあり、令子、令は善なり、他人を敬して曰ふ、「南史」に、褚彥回嘗て任彦に謂つて曰く、爾は金子あり、似舅、「南史」に、何無忌は對準之が外甥、爾は其の舅に似たり、花縣、晉の潘岳、河陽令と爲る、桃李の花を植ふ、人號して花園一縣花と曰ふ、錦城、蜀州の南、笮橋の東、流江の南岸に在り、錦官城、又は錦里城と號す、長卿、漢の司馬相如、字

は長卿、蜀郡成都の人、子虛賦を著はす、蜀の人、博得重なる者、狗彘と爲り、武帝に傳す、武帝、「子虛賦」を讀み、之を善として曰く、朕此の人と時を同じうするを得ざらんや、得重曰く、臣が邑人司馬相如、自ら言ふ此の賦を爲ると、武帝驚いて之を召す、

【題義】唐六典に、凡そ貢舉の人、博識高才、待問失なきものは、秀才と爲す、然りと雖も此の稱を用ふるは我より以下の年少と爲す、

【大意】親を寧んずるは孝子なり、孝子は良に令子なり、舅は良に賢者なり、其の舅に似たる君は即ち賢なり、別路は花縣の麗地を經、而して還る處は錦城と云ふ美地なり、歸途中の景色は如何、山は則ち青塞に臨んで斷え、江は則ち白雲に向つて平なり、獻賦の爲め上京するは何れの時ぞや、明君は君を憶ふこと漢帝の長卿を憶ふごとくなり、

【餘論】此の時も起句對法、而して寧親の句は還郷の句に接し、似舅の句は直ちに別路の句を起す、花縣には舅が在すなり、錦城には親が在すなり、文脈通融、以て此の詩の妙を知るべし、「別裁」之を探る可なり、

送張判官赴河西

張判官が河西に赴くを送る

單車曾出塞。報國敢邀勳。

單車曾て塞を出で、國に報じて敢て勳を邀へんや、

近體詩 送嚴秀才還蜀 送張判官赴河西

見逐張征虜今思霍冠軍

張征虜を逐ふことを見る、今思ふ霍冠軍

沙平連白雪蓬卷入黃雲

沙平かにして白雪に連り、蓬巻いて黃雲に入る、

慷慨倚長劍高歌一送君

慷慨長劍に倚る、高歌して一に君を送らん、

【注解】 單車、李陵が書に、以單車之使、適萬乘之虜とあり、張征虜、蜀漢の張飛は、宜都太守征虜將軍と爲る、霍冠軍、前漢の霍去病は冠軍侯と爲る、

【題義】 黃河より以西を總稱して河西と曰ふ、今日の陝西、甘肅及び蒙古の鄂爾多斯、阿拉善皆是なり、張判官が朝命にて此に向ふを送る詩なり、

【大意】 單車即ち一人にて中國の地を離れ、畏怖の念無きは國に報せん志に因るのみ、勳名を邀ふる爲にはあらず、其の勇氣は蜀漢の張飛にも似、又前漢の霍去病にも似て居る、塞外の風土は如何、平沙千里、白雪相連る、長風は蓬を巻いて高く黃雲に入る、慷慨の志、長劍唯知る、我今高歌して一に君を送らん、

【餘論】 此の詩、通體雄渾、良に題に副ふ可し、蓋し見逐の二字多見せざる所、「史記」に「逐客令」あり、逐は放逐、又驅逐、逐ひ拂ふ意義なり、然るに今は追慕の意味にて驅逐の意味にあらず、乃ち知る、詩は平仄の關係上、字の本義に由らずして用ふることを、

送岐州源長史歸

岐州の源長史が歸るを送る

握手一相送心悲安可論

手を握りて一に相送る、心悲安んぞ論すべけん、

秋風正蕭索客散孟嘗門

秋風正に蕭索、客は散す孟嘗の門、

故驛通槐里長亭下權原

故驛槐里に通じ、長亭權原に下る、

征西舊旌節從此向河源

征西の舊旌節、此より河源に向ふ、

【注解】 孟嘗門、「史記」に、孟嘗君、薛に在り、諸侯の賓客及び亡人の罪ある者を相救す、皆孟嘗君に歸す、孟嘗君、之を厚遇す、故を以て天下の士を傾け、食客數千人、槐里は驛名、興平縣郭下、東咸陽驛に至る四十五里、西武功驛に至る六十五里と「長安志」に在り、長亭、五里に短亭、十里に長亭、短亭は小驛、長亭は大亭を曰ふ、權原、秦中の地、初唐、宋之間の時に、人鹿槐里月、馬路權原道、とあり、旌節、節度使が辭するの日、朝廷、之に雙旌雙節を賜ふ、河源、匈奴に接する地名、

【題義】 源長史は右丞と同じく崔常侍が幕中に在り、時に常侍歿せるを以て岐州の故里に歸るなり、岐州は岐山あるを以て名く、後に鳳翔府と改む、

【大意】 手を握りて送別の禮を行ふ、心中の悲みは口に論すべきにあらず、時正に秋風、氣は蕭索たり、今の孟嘗君たる崔常侍は歿したるが故に、賓客は皆離散せざるを得ず、君の歸路は如何、故驛が槐里に通じてある、長亭よりして權原に下るであらう、君は征西しての舊旌節を持する人、名聲を輝

かしながら河源に向ふなり、

【餘論】此の時、送別の詩として誦すべきものなり、『唐賢三昧集』を除く外の選本此を採らざるは何ぞ、黄培芳は起二句を評して意在筆先、起便情深と、顧可久は全首を評して悲婉と曰ふ、先師枕山先生は、夜雨酒空文學座、秋風客散孟嘗門の句あり、右丞は古人の句を多く我が物とす、先師亦右丞の句を以て我が物とす、右丞の知己と謂ふべし、

送張道士歸山

張道士が山に歸るを送る

先生何處去、王屋訪毛君。

先生何れの處に去る、王屋毛君を訪ふ、

別婦留丹訣、驅雞入白雲。

婦に別れて丹訣を留め、雞を驅りて白雲に入る、

人間若剩住、天上復離羣。

人間剩住の若く、天上復離羣す、

當作遼城鶴、仙歌使爾聞。

當に遼城の鶴と作つて、仙歌爾をして聞かしむべし、

【注解】王屋、山名なり、河南府王屋縣北十五里に在り、周圍一百三十里、高さ三十里、毛君、『真跡』に、昔、毛伯道、劉道憲、謝雅堅、張光期、皆後漢の人なり、道を學んで王屋山中に在り、後んで四十餘年、共に神丹を合す、毛伯道、先づ之を服して死す、道憲、之を服し又死す、謝と張と二人が此の如きを見て、背て之を服せず、竝に山を捨てて歸り去る、後、伯道、道憲が山上に在るを見る、二人悲得し、遂に彼きて道を請ふ、之に茯苓を與ふ、持し行きて方に之を服す、曾數百歲とあり、別婦、晉の許邁は、臨安の西山に入り、巖に登り芝を茹ふ、神丹自得し、終焉の志あり、乃ち名を元字と改め、遼陽し、婦に香を與へて告別し、又詩十二首を作り、神仙の事を論ず、顧景、『神仙傳』に、唐君、道を學んで仙を得、白日に昇天し、鶴は天上に鳴き、狗は雲中に吠ゆとあり、遼城鶴、『搜神記』に、丁令威は本遼東の人、道を靈虛山に學び、後、鶴と化して遂に歸り、城門の華表柱に降り、時に少年あり、之を射んと欲す、鶴乃ち飛んで、空中に徘徊して言ふ、鳥あり鳥あり丁令威、家を去つて千年今始めて歸る、城郭故の如く人民は非なり、何ぞ仙を學ばずして靈童たる、遂に高く上りて天に神す、

【大意】先生は何れの處に向つて歸り玉ふや、察するに王屋山に向つて毛君を訪ふ爲ならん、昔は婦に別れて仙丹の秘訣を留めし人あり、又雞を驅役して白雲中に入りし人もあり、人間即ち塵中に住したるは眞住にあらずして、剩住なりしが如し、天上即ち山中に入り去つて塵中の人とは離羣する、後人間に来る時は鶴と化して來り、仙人の歌を、仙を知らざる爾等に聞かしむべきなり、

【餘論】此の詩、余が所藏の明板の『王維集』に、毛君を茅君に作り、若剩住を苦難住に作る、又「文苑英華」には、數剩住に作り、顧元綸本は、苦難剩に作る、茅君の非なるは論勿きも、若剩住の句は如何なる意味にも解釋するを得、今、姑らく趙松谷の説を取るものなり、

同崔興宗送瑗公

崔興宗と同じく瑗公を送る

言從石菌閣、新下穆陵關。

言に石菌閣よりし、新たに下る穆陵關、

近體詩 趙雲道士歸山 同崔興宗送瑗公

獨向池陽去，白雲留故山。

獨り池陽に向つて去る、白雲故山に留む、

綻衣秋日裏，洗鉢古松間。

綻衣秋日の裏、洗鉢古松の間

一施傳心法，唯將戒定還。

一たび傳心の法を施して、唯戒定を將て還る、

【注解】言從、言の字は意無し、從の語助なり、穆陵關、松谷曰く淮南府に故の穆陵關あり、是れ楚の境、乃ち今の湖北麻城縣の北一百里、唐の觀察使李道古、兵を引きて、穆陵關を出で、遂に中州を攻む、是なり、池陽、縣名なり、雍州涇陽縣の西北三里、乃ち左馬廄に屬す、綻衣、唐の『玄奘法師傳』に、布紙而綻、拋棄而棄とすとあり、綻は破綻て衣の綻ひ目が解けることなり、解ければ即ち綻はざるべからず、綻衣は綻衣を自分で縫ふこと、律僧たる者の常法とす、傳心、以心傳心は禪法の常説とす、

【大意】叢公は石菴閣を去つて、此より新たに穆陵關を下る、關を下りて向ふ處は池陽なり、侍者も無く獨往する、而して白雲は依然として石菴閣の故山に留めて在る、三衣の綻びを縫うて秋日の裏にあり、一鉢を洗うて古松の間にもあり、然るに以心傳心の禪法は小師に施したる、今日は自分の身に修する戒定のみを將て還る、

【餘論】此の詩、解する人に依つて、異同あらんも、余は白雲以下の四句は石菴閣に在住せし方に定め、歸後の事は一言も敘べずと解するものなり、佛典の義理より之を言へば、結末徹底せざるの語、詩家の詩、佛者の詩にあらず、咎むべき理はあらざるなり、

送錢少府還藍田

錢少府が藍田に還るを送る

草色日向好，桃源人去稀。

草色日に好きに向ひ、桃源人の去ること稀なり、

手持平子賦，目送老萊衣。

手に平子が賦を持して、目送す老萊が衣、

每候山櫻發，時同海燕歸。

毎に山櫻の發くを候し、時に海燕の歸るに同す、

今年寒食酒，應得返柴扉。

今年寒食の酒、應に柴扉に返るを得べし、

【注解】平子賦、漢の張衡、字は平子、『歸田賦』あり、老萊衣、『列士傳』に、老萊子、二親に孝養、行年七十、嬰兒を以て自ら擬しむ、五色の采衣を着け、曾て樂を取りて堂に上り、跳仆す、因つて地に臥して、小兒の啼を爲す、或は烏鳥を親の側に見す、山櫻、蘇の沈約の詩に、山櫻火似、俗とあり、

【大意】春草の色は日に生長して好美に向ふ、而かも桃源に向つて人の歸去するは稀なり、錢少府は手に平子が賦を持す、我は目送す君が老萊の衣を着けて行くを、故山には宛かも山櫻の發く候であると察し、身は宛かも春日海燕の歸るに同じ、謂ふに今年寒食の酒は、應に故山にて此の節を祝ふべし、

【餘論】此の詩、第一句向を平聲とし、以て第二句の去の仄聲と對す、乃ち仄仄仄平仄、平平平仄平、老杜も時に此の法あり、知らざるべからず、

留別錢起

錢起到留別

卑棲却得性。每與白雲歸。

卑棲却つて性を得たり、毎に白雲と歸る。

徇祿仍懷橘。看山免採薇。

祿を徇めて仍は橘を懐にし、山を見て薇を採るを免る。

暮禽先去馬。新月待開扉。

暮禽去馬に先ち、新月開扉を待つ。

霄漢時回首。知音青瑣闈。

霄漢時に首を回せば、知音青瑣闈。

【注解】徇祿、謝靈運の詩に、徇祿反窮海、臥病對空林とあり、徇求秩祿と成語して、「モトム」なり、懷橘、「三國志」に、吳の陸績、年六歳、九江に於て賣術を見る、術、橘を出す、績、三枚を懐にして去る、拜辭して地に墮つ、術、謂つて曰く、陸馬、賣客と爲つて橘を懐にするか、跪きて答へて曰く、歸りて母に遺らんと欲す、術、大に之を奇とすとあり、採薇、殷の伯夷叔齊なり、

【大意】右丞が錢起に留別して曰ふ、民間に卑棲する身は却つて自分の本性に契ふ、乃ち青雲を去つて白雲と與に歸る、官吏たりし時の情は祿を求めて十分なるに、其の上に猶ほ橘を懐にして去る、又西山を見て採薇の貴きを知るも、身は夷齊の如く餓死するを免る、巢に歸る暮禽が我が去馬よりも疾し、新月は我が開扉を待つものの如し、歸路天子の在す方の霄漢を回りみて見れば、知音たる錢起は青瑣闈に在るを思ふ、

送邱爲往唐州

邱爲が唐州に往くを送る

宛洛有風塵。君行多苦辛。

宛洛風塵あり、君行いて苦辛多からん、

四愁連漢水。百口寄隨人。

四愁漢水に連り、百口隨人に寄す、

槐色陰清晝。楊花惹暮春。

槐色清晝に陰し、楊花暮春を惹く、

朝端肯相送。天子繡衣臣。

朝端肯て相送る、天子の繡衣の臣、

【注解】四愁、漢の張衡、河間に在りし時、天下爭亂し、憂鬱として志を得ず、四愁詩を爲る、美人を以て君子に比し、珍寶を以て仁義に比し、水深雪氣を以て小人に比し、道術を以て相報じ時君に貽らんと思へども、讒邪の以て通ずるを得ざるを懷る、百口、一家眷屬を曰ふ、『晉書』周顛の傳に、伯仁以百口累顛とあり、隨人、隨州人なり、隨州は、『元和郡縣志』に、西到唐州三百六十里とあり、朝端、『宋書』王安石傳に、丞承人乏、位副朝端とあり、官更を謂ふ、繡衣、大官の衣服は繡すればなり、

【題義】『唐書地理志』に、山南東道昌州春陵郡治に唐州あり、邱爲が往くは官命が私人としてか明白ならず、右丞が此の詩を賦し以て送るなり、

【大意】宛洛の間は戰亂あり、君が此の間を行く、苦辛の事多からん、四愁は長きを以ての故に漢水に連り、百口は亂を避けるを以ての故に隨州の人に寄食させる、道中の様子は如何、初夏に還れば槐樹の陰が清晝に滿ち、楊花が風に飛んで暮春の景色を惹く、朝廷の官人が肯て相送る。其の送る所の

人は皆天子が寵幸する繡衣の臣なり、

【餘論】前聯、情を斂し、後聯、景を斂す、右丞慣用の手段とす、明の釋蒼雪は、大江連三漢水、

孤艇接三殘春の句を以て大に漁洋や沈歸愚の賞讃を博せり、右丞が四愁の句を學んで成りしは明白と

送元中丞轉運江淮

元中丞が江淮に轉運するを送る

薄稅歸天府、輕徭賴使臣。

稅を薄うするは天府に歸し、徭を輕くするは使臣に賴る、

歡沾賜帛老恩及卷綃人。

歡は帛を賜ふ老恩を沾し、恩は綃を卷く人に及ぶ、

去問珠官俗來經石劫春。

去つて珠官の俗を問ひ、來つて石劫の春を經、

東南御亭上莫使有風塵。

東南御亭の上、風塵有らしむること莫れ、

【注解】天府、天子府中なり、輕徭、漢明帝紀に、輕徭薄賦、與民休息とあり、徭は徭役又は舊戍などと成語して國家の爲めに勞役するなり、賜帛老、漢文帝紀に、年九十以上賜帛とあり、卷綃人、漢の左思が「吳郡賦」に、泉室層巒而卷綃とあり、俗に傳ふ、鮫人、水中より出で、會て人家に寄寓す、晝日、綃を賣る、鮫人去るに隨んで、主人に綃を索め、泣いて珠を出して盤に滿ち、以て主人に與ふと、猶ほ薄綃なり、珠官、「三國志」に、吳孫權、黃武七年改合浦爲珠官郡とあり、石劫、晉の郭璞の「江賦」に、石鼓應節而揚葩とあり、李善の説に、石鼓形、龜脚の如く、春雨を得れば則ち花を生ず、花は舞花に似たり、余は和名を知らず、

御亭上、「輿地志」に、御亭は吳縣の西六十里、吳の大帝立つる所、隋の開皇九年、置きて驛と爲す、趙本を除く餘の本、悉く高亭上に作る、高は平聲にして其の誤耶知るべきなり、

【題義】元載は肅宗の御史中丞と爲り、漕艘の任を領して江淮に往くを送るなり、

【大意】稅を薄くして徳を天府に歸し、徭を輕くするの力は使臣に賴る、歡は帛を賜はる大老の者を沾し、恩は綃を卷く所の漁人にまでも及ぶ、乃ち去つて珠官の風俗を問ひ、又來つて石劫の春を經、

殊に東南の御亭地方、風塵の昏亂を生ずるなからしむべし、

【餘論】此の時は起句對法とす、君を貴び、民を憐むの旨、彰彰たり、顧曰く、意、含蓄多く、時政必ず徭を輕くし、稅を薄くせざるものあらん、高古、

送崔九興宗游蜀

崔九興宗が蜀に遊ぶを送る

送君從此去、轉覺故人稀。

君を送りて此より去る、轉た覺ゆ故人の稀なるを、

徒御猶回首、田園方掩扉。

徒御猶は首を回らし、田園方に扉を掩ふ、

出門當旅食、中路授寒衣。

門を出でて旅食に當り、中路寒衣を授く、

江漢風流地、游人何處歸。

江漢風流の地、游人何れの處にか歸る、

【注解】徒御、徒行する者と、御車する者となり、旅食、魏の文帝が吳質に與ふる書に、驪駒北場、旅食南館とあり、授、詩經に九月授衣とあり、

【大意】君が游蜀を送り此より別れ去る、轉た故人の稀なるを覺ゆ、徒行の人も御車の人も、相互に後を振りかへり見る、田園の家は方に扉を掩ふ、門を出て去つた人は都て旅食と爲る、路半ばにして氣節が變れば、乃ち寒衣を授かる、此の別を敘する江漢の地は、風流文雅の處なり、君が游に倦んで歸るは何れの處よりなるぞ、

【餘論】明の顧可久は、徒御の二句を評して、去住婉戀之情不盡深至と、結句を評して、何處二字深長、意謂可遊處多、難定歸自何處也、有情冲澹と、清の黃培芳は、起二句を評して、發端極有神、五律最爭起手と、余謂ふ、起句對法を取るが正法なるに、此の詩は對起せず、黃は其の事を論せずして反つて賞揚す、右丞知るあらば、必ず笑はん、二句の故人、結句の游人、是亦病なり、小疵は論せざるか、

送崔興宗

崔興宗を送る

已恨親皆遠誰憐友復稀

已に恨む親皆遠きを、誰か憐む友復稀なるを、

君王未西顧游宦盡東歸

君王未だ西より顧みず、游宦盡く東に歸る、

塞關山河淨天長雲樹微

塞關くして山河淨く、天長くして雲樹微なり、

方同菊花節相待洛陽扉

方に菊花の節を同じうす、相待つ洛陽の扉、

【注解】君王、誰たるを明知する能はざるも、顧可久が説の如く、玄宗が嶽山の亂を避け、蜀に出奔せし時の作ならん、然らば君王は玄宗なり、而して興宗の行は何處なるや判知する能はず、

【大意】已に親戚の皆遠地に在るを恨む、其の上に友人も亦稀少、誰か之を憐まざらん、君王は西に在りて未だ東歸せざるも、游宦は大底東に向つて歸來す、塞外は空闊にして山河は淨く、遠天は長遠にして雲樹は微なり、君が歸來は菊花の節ならん、此の節を同じうして、我は君を洛陽の扉に於て待たん、

【餘論】此の詩も起句對法見るべし、李白が六龍西幸萬人懼を以ても知る、蜀は洛陽よりすれば西に當る、然るに「西ニ」と訓點したる本は不審、余は假に玄宗として「西ヨリ」と訓むなり、

送平澹然判官

平澹然判官を送る

不識陽關路新從定遠侯

陽關の路を識らず、新たに定遠侯に従ふ、

近體詩 送崔興宗 送平澹然判官

黃雲斷春色畫角起邊愁。

黃雲春色斷、畫角邊愁起。

瀚海經年別交河出塞流。

瀚海年を経、交河塞を出でて流る。

須令外國使知飲月支頭。

須らく外國の使をして、月支の頭に飲むことを知らしむべし。

【注解】 國圖、『漢書地理志』に、樓煩郡臨勒に關あり、玉門關の南に在れば關と曰ふ、樓煩の西南一百三十里、嘉峪の西、定遠侯、後漢の張奐、西征して功あり、定遠侯に封ぜらる、黃雲、多くは戰雲の意義に用ふ、瀚海、戈壁沙漠を謂ふ、唐代、瀚海都督府を置く、交河、城の名、今新疆吐魯番縣治西二十里、安西都護府を置きし地なり、水は西州の交河縣の北天山より出で、水、城下に分流するを以て交河の名あり、月支頭、匈奴嘗て月支王の兵を破り、月支王の頭を以て飲器を爲る。

【大意】 判官は今日まで關關の路を知らざりき、新たに定遠侯に隨從して往く、目に見る黃雲が多くして春色を遮斷し、耳に聞く畫角の聲は恐らくは邊愁を起さん、瀚海は路遠し乃ち年を経て別れん、交河は水寒く塞を出でて流るるならん、君が彼方に往けば必ず外國の使者を載視して、中國の命を奉せずんば、爾が王を捕へて、其の頭を以て飲器を爲らんと豪語し玉へ、

【餘論】 此の詩も對法を以て起る、全首雄渾、中晚唐人の夢想せざる所、「別裁」も、「三昧」も、「正音」も、皆之を採る。

送孫秀才

孫秀才を送る

帝城風日好況復建平家。

帝城風日好し、況んや復建平の家。

玉枕雙文簾金盤五色瓜。

玉枕雙文の簾、金盤五色の瓜。

山中無魯酒松下飯胡麻。

山中魯酒無く、松下胡麻を飯す。

莫厭田家苦歸期遠復除。

厭ふこと莫れ田家の苦、歸期遠くして復除なり。

【注解】 建平、『宋書』に、建平王景、梁文章書籍を好み、才義の士を招集し、傾身禮接、以て名譽を收むとあり、玉枕、『清鏡類詠』に、蘭亭帖に玉枕一本あり、宋南渡後、賈似道萬燈を以て而して之を成す、其の斷紋、銅釘を用て綴連すとあり、單、即ち竹席、數具として美觀なるを言ふ、五色瓜、晉の阮瞻の詩に、昔聞東陵瓜、近在青門外、連陰匝、阡陌、子母相鉤帶、五色耀朝日、嘉賓四面會とあり、魯酒、『淮南子』に、魯酒薄而邯鄲園とあり、美酒にあらざるなり、胡麻、已に辨ぜり。

【大意】 帝城は信に風日好し、況んや復富貴の家に於てをや、臥すときは玉枕雙紋の簾あり、食ふには金盤五色の瓜あり、然るに山中は帝城と反對に魯酒ですら無し、松下に於て胡麻の飯を食ふに過ぎず、田家の苦は常なり、君も厭ふこと莫れ、我は歸心あるも其の期は遠く且除であるが故に君に及ばず、【餘論】 此の詩は右丞一人を除く外、明白に意義解すべからず、但し孫をして都を慕ふの念を捨て、田家を愛する念を起させんとの意は明白とす、秀才が下第して歸る、多く此の如きものならん、懸緒の詩と見るべし。

送劉司直赴安西

劉司直が安西に赴くを送る

絕域陽關道、胡煙與塞塵。

絕域陽關の道、胡煙と塞塵と、

三春時有雁、萬里少行人。

三春時に雁あり、萬里行人少なり、

首藉隨天馬、蒲桃逐漢臣。

首藉天馬に隨ひ、蒲桃漢臣を逐ふ、

當令外國懼、不敢覓和親。

當に外國を懼れしむべし、敢て和親を覓めざれ、

【注解】絶域、漢書陳湯傳に、討絶域不羈之君、係萬里離制之勝とあり、首藉、ウマゴヤシ、原野に發生し、葉は互生複葉、春末に小花開く、『史記』に、大宛の左右、蒲桃を以て酒を爲る、富人、酒を藏し、萬餘石に至る、久しきもの數十歲收らず、俗、酒を嗜み、馬、首藉を嗜む、漢の使者其の實を取り來る、是に於て天子始めて首藉を種ふしむ、天馬、烏孫の馬を天馬と曰ひ、大宛の馬を汗血馬と曰ふ、或は曰ふ烏孫の馬を西施と稱し、大宛の馬を天馬と稱す、今の句は、大宛より來るを天馬と曰ふなり、和親、『史記劉敬傳』に、上取家人子、名爲長公主、妻單于、使劉敬往結和親約とあり、

【題義】劉氏なる司直の官あり、安西に赴かんとす、乃ち此の詩を贈る、司直は大理寺に屬し、位は從六品上とす、

【大意】關關の道は中國よりは信に絶域なり、胡塞の間に見る所は但煙塵のみ、三春の中時には雁の來るもあり、萬里の路行人に遇ふこと甚だ少なり、嘗ては勇臣が首藉と天馬とを彼より取り來りしあり、又蒲桃を彼より持ち歸りし漢臣もあり、今君が往く、宜しく彼等をして畏懼せしむべし、彼等に向つて和親などを覓むる恥辱を殘す勿れ、

【餘論】此の詩は、五律として、各種の選本、採録せざるもの無し、沈歸愚は評して、一氣渾淪、神勇之技と、黃培芳は曰く、此是雄渾一派、所謂五言長城也と、余は右丞が用意の深きを特に感ずることあり、そは結句の意義なり、昔、劉敬は單于に、使して和親を覓め、我の威風を損すること甚だ大、然るに君も劉姓の人、幸に彼の法を學んで、以て中國の恥を彼處に暴すことなかれといふなり、

送趙都督赴代州得青字

趙都督が代州に赴くを送る、青字を得たり

天官動將星、漢地柳條青。

天官將星を動かし、漢地柳條青し、

萬里鳴刁斗、三軍出井陘。

萬里刁斗鳴り、三軍井陘を出づ、

忘身辭鳳闕、報國取龍庭。

身を忘れて鳳闕を辭し、國に報じて龍庭を取る、

豈學書生輩、臆間老一經。

豈書生輩を學んで、臆間一經に老いんや、

【注解】天官、『史記』に天官書あり、天文に五官あり、官は星官なり、星座に尊卑あり、人の官曹列位の若し、故に天官と曰ふ、將星、『隋書天文志』に、天將軍十二星、畫の北に在り、武兵を主る、中央の大星は、天の大將なり、外の小星は吏士なり、大將軍攝

近體詩 送劉司直赴安西 送趙都督赴代州得青字

三三三

けは兵起り、大將出で、小屋具はらざれば、兵發す、刁斗、銅にて造る、一斗の量を入る、晝間は炊具とし、夜間は警戒の爲めに擊つ、井陘、『史記正義』に、井陘の故關は井州石支縣東十八里に在り、一名土門關と曰ふ、鳳閣、武帝の建章宮上、銅鳳閣あり、故に鳳閣と曰ふ、龍庭、漢の班固、封燕然山銘に、顧冒頓之國語、焚老上之龍庭とあり、單于が天地を祭る處を龍庭と曰ふ、

【題義】趙氏なる都督が代州に赴くとき送別の燕を聞く、席上にて饌にて韻を分つ、右丞は青の字を得たるなり、都督に大中下とあり、大都督一人從二品、中都督一人正三品、下都督一人從三品なり、趙は中都督たり、代州は雁門郡、中都督の管する所と曰ふ、

【大意】天官即ち天子の軍が出動する時、漢地柳條正に青青たり、遠征萬里刁斗鳴いて鏘鏘たり、三軍は其の路を井徑に取りて出づ、將星の意氣已に一身を忘れて敵に向ふ、國に報ずるには、唯龍庭を奪取するにあり、書生輩が兀兀として應問に一經を抱きて終に老ゆるの愚を學ばんや、

【餘論】此の詩は的對を避けて起し、而して以下整整一語も棄れず、沈歸愚は探り、漁洋は採らず、亦以て二家の宗旨を見るに足る、

送方城韋明府

方城の韋明府を送る

遙思葭莢際、寥落楚人行。

遙かに思ふ葭莢の際、寥落として楚人行く、

高鳥長淮水、平蕪故郢城。

高鳥長淮の水、平蕪故郢城、

使車聽雉乳、懸鼓應雞鳴。

使車雉乳を聞き、懸鼓雞鳴に應ふ、

若見州從事、無嫌手板迎。

若し州の從事を見れば、嫌ふことなかれ手板迎ふことを、

【注釋】葭莢、『詩』に葭莢揚揚とあり、葭は葦なり、葦の未だ秀でざる者、莢は葦なり、葦の小なる者、淮水、唐州に出でて、東と西と高と酒の四州の南境を歴、郢城、荊州江陵縣の東北に在り、楚の平王遷都の地なり、雉乳、『後漢書』に、魯恭、中牟令と爲る、郡國、賦、穀を傷り、大牙餘耳、獨り中牟に入らず、河南尹虞安、之を聞いて其の實ならざるを疑ひ、仁恕恭儉をして親しく往いて之を辱べしむ、恭、隨つて阡陌に行き、俱に桑下に坐す、雉あり過ぎて其の旁に止まる、旁に小兒童あり、親曰く兒何ぞ之を捕へざる、兒言ふ、雉方に雉を狩く、親頓然として起ち、恭と訣れて曰く、來る所以の者は、君の政績を羨せんと欲するのみ、今、魯、恭を犯さず、此れ一異なり、化、鳥獸に及ぶ、此れ二異なり、聖子、仁心ある、此れ三異なり、雞鳴、『詩』に雞已鳴矣とあり、州從事、『廣輿志』に、每州刺史、皆從事あり、手板、『隋書禮儀志』に、笏、晉宋以來、之を手板と謂ふとあり、

【題義】韋氏なる人が唐州方城縣の明府即ち知事と爲りて任に赴くを送る詩なり、縣令、刺史、共に之を明府と敬稱す、後漢以來此の稱あり、

【大意】遙かに思ふ葭莢の水國の際を、寥落たる形影を將て楚人が行く、高鳥の飛ぶ邊は長淮の水を涉るときなり、平蕪を認めたる處は是故郢城下を過ぐるときなり、昔、使者と爲りて車上に雉乳を聽きて其の州の仁政を知りし人あり、又晩天に起き嚴格に時間を守りし世あり、君が正に方城に著し、州の從事が處問せられんことを恐れ、手板を倒しに執りて迎ふる態度を嫌ふこと無かれよ、

【餘論】此の詩、前半四句は韋が道中の狀を敘し、後半四句は其の著任後恪勤なるべきを敘す、顧可

久評して辭新意古と曰ふは、切當なり、

送李員外賢郎

李員外賢郎を送る

少年何處去、負米上銅梁。

少年何れの處にか去る、米を負うて銅梁に上る、

借問阿戎父、知爲童子郎。

阿戎が父に借問して、童子郎たることを知る、

魚箋請詩賦、檀布作衣裳。

魚箋詩賦を請ひ、檀布衣裳を作る、

蕙苾扶衰病、歸來幸可將。

蕙苾衰病を扶け、歸來幸に將む可し、

【注解】負米、『孔子家語』に、子路爲親、負米百里之外とあり、銅梁は諸説あり、或は謂ふ縣名、或は謂ふ山名、銅梁縣の蒲葦山に上るとして、乃ち艱難を辭せずとの意なり、阿戎父、晉の阮籍は王戎が父の王渾と俱に尙書郎と爲る、渾に造る毎に坐未だ安ならず、輒ち曰く卿と語るは、阿戎と語るに如かず、戎に造る毎に必ず日夕にして返る、童子郎、後漢の臧洪は年十五、功を以て童子郎を拜す、羊祜試觀の者拜して郎と爲る、郎は官名、年幼なるを以て童子郎と稱したるなり、魚箋、紙の名、檀布、檀は樹名、此の花を織りて布を作る、劍南道梓州に多く産すと云ふ、蕙苾、藥草の一種、『本草經』に、味は甘く、微しく寒、瘴氣を掃ひ、風濕を醫すとあり、蕙の昔は去聲の「イ」と入聲の「ウク」とあり、今は入聲讀なり、

【大意】李君よ、君は少年の身を以て何處に去くや、君は答ふるならん、子路の如く米を負うて親の爲め艱難を渡ぐと、余は君が父は熟知であるが、父よりは反つて君と談話することを好む、君が行に

臨んで父は君の爲めに送別の詩賦を知己に請ひ、且君が爲めに檀布を以て衣裳を作る、君は歸來の日必ず蕙苾を攜へ返り、父の衰病を扶けて、其の服藥すべきを將むべし、

【餘論】此の詩も前首と同じく起句對せず、李が少年秀才、親の爲め孝なるを稱讃するを以て主とす、昔人は杜詩を評して來歴ありと言ふ、右丞の詩亦來歴の多きに審しむ、歴史を知らずして、此の詩を讀む、何事を敘するやを知る能はざるなり、

送梓州李使君

梓州李使君を送る

萬壑樹參天、千山響杜鵑。

萬壑樹天に參し、千山杜鵑響く、

山中一半雨、樹杪百重泉。

山中一半の雨、樹杪百重の泉

漢女輸檀布、巴人訟芋田。

漢女檀布を輸し、巴人芋田を訟す、

文翁翻教授、不敢倚先賢。

文翁翻つて教授、敢て先賢に倚らず、

【注解】漢女、蜀は即ち漢なり、蜀中の女等なり、巴人、蜀は巴蜀、即ち蜀中の男兒なり、芋田、芋は各地に産するも、蜀中の芋は形圓にして大、之を芋魁と謂ふ、饑年には之を以て糧食に當つ、文翁、漢の文翁は廣江郡の人、蜀の郡守と爲りて、仁愛にして教化を好む、蜀地僻陋にして、蠻夷の風あるを見、文翁、之を聘過して、蜀中大に化し、是に於て蜀學、齊魯の地に比すと『漢書』にあり、

近體詩 送李員外賢郎 送梓州李使君

【題義】李氏が使君即ち太守と爲りて梓州に赴くを送る詩なり、梓州は今日の四川省三台縣治、梓潼郡は三國の世蜀漢の置く所とす、

【大意】李君赴く所の梓州は何處の壘も天を摩する喬樹のみなり、又甲の山も乙の山も杜鵑即ち蜀鳥が盛んに鳴く、山深きが故に天氣定まらず、但し一半は雨の中を行く、雨多きが故に樹杪と云ふ樹杪は、皆百重の泉を懸けて降る、而して蜀中の生活は、女としては襤布を南北に輸して居る、男としては芋田の訴訟などをして居る、今や古の文翁の如き君が赴任して、此の俗を善く教化する、敢て先賢に倚る模倣にはあらざるなり、

【餘論】此の詩は、右丞集中五律の白眉として、各種の選本に採らざるものなし、起句は疎なれども、又對として見て可なり、前半は道中の景、後半は生活の情、作法明明たり、蓋し一半雨を明の高標も願可久も、清の王漁洋も沈歸愚も皆一夜雨と作す、宋の李昉、徐鉉等が奉教編なる「文苑英華」と題殿成と錢愚山は一半雨然るべしと謂ふ、蓋し送行の詩、其の風土、深山冥晦、晴雨相半す、故に一半雨と曰ふ、而して之に續くに樊女巴人の聯を以てするなり、漁洋の精、歸愚の詳も、考へ此に及ばざりしならん、但山二字あるは病なり、紀曉嵐曰く、結二句不可解と、紀にして此の言を發す、一笑すべし、

送張五誼歸宣城

張五誼が宣城に歸るを送る

五湖千萬里、況復五湖西、
五湖千萬里、況んや復五湖の西、

漁浦南陵郭、人家春穀溪、
漁浦南陵郭、人家春穀溪、

欲歸江淼淼、未到草萋萋、
歸らんと欲して江淼淼、未だ到らず草萋萋、

憶想蘭陵鎮、可宜猿夜啼、
憶想す蘭陵鎮、宜しく猿夜啼く可し、

【注解】南陵、「元和郡縣志」に、南陵縣、東、宣州に至る一百里、本、漢の春穀縣の地、從此に於て南陵縣を置く、今日の安徽省蕪湖道に屬す、蘭陵鎮、戰國時代は楚邑、今の山東嶧縣の東、楚、荀況を以て蘭陵令と爲す、即ち此れ、漢晉を経て鎮を置く、今の江蘇武進縣治なり、

【題義】張誼が長安より宣城に歸るを送る詩なり、南陵縣の東四十里の地を宣城とす、今は蕪湖道に屬す、

【大意】長安より五湖は千萬里を隔つ、況んや宣城は其の西方に猶里程あるをや、漁浦は南陵の一郭を送り、人家は春穀溪に沿うて起つ、歸らんと欲するとき江水は淼淼と漲らん、未だ家に到らざる間に草は凄凄と長ずるならん、君が蘭陵鎮を經過する時を憶想すれば、夜猿が嗷嗷として啼くならん、

【餘論】此の詩多く水國の状を言ひ、僅かに草と猿とを以て陸地の状を言ふ、蘭陵を願可久は南陵と

爲し、評して疊用とす、夜猿は浪浦に嗜くものにあらず、察せざるも甚し、南陵への中途、蘭陵の状を欲することを知らば、疊用の二字、無用に屬す、蓋し南陵と上にあり、下に蘭陵と置く、病たるを免れず、黃培芳は讀評してあるが、余は右丞として名篇とは稱せず、

送友人南歸

友人の南歸を送る

萬里春應盡三江雁亦稀

萬里春應に盡くべし、三江雁も亦稀なり、

連天漢水廣孤客郢城歸

天に連りて漢水廣く、孤客は郢城に歸る、

鄖國稻苗秀楚人菰米肥

鄖國稻苗秀で、楚人菰米肥ゆ、

懸知倚門望遙識老萊衣

懸かに知る門に倚りて望むことを、遙かに識る老萊の衣、

【注解】三江、岳州府城下の岷江と澧江と沅江と、皆此に合するを以て三江口と名くと「一統志」にあり、漢水、王逸注は「漢水荆」を著し、東西二あるを論ず、今の句は東漢水に屬す、郢城、春秋に、楚が都を置きし地、今湖北省の江陵なり、鄖國、鄖は郢

と同じ、今の湖北省の安陸縣地方なり、菰米、前に辨べり、倚門、「戰國策」に、王孫賈の母、賈が退朝して晚に歸る時は門に倚りて望み、暮に出て還らざる時は間に倚りて望む、

【大意】南地は暖が早き故に萬里も春は盡きたるべし、三江も、雁は皆北歸して其の影を見る稀ならん、其の盛んなるものは漢水が天に連りて廣大なるのみ、其の方面に向つて孤客が郢城を望みつつ歸

る、鄖國の動勢は稻苗の秀づるを見て知る、楚人の辛苦は菰米の肥ゆるを看て知る、余は遠方に在りて懸かに知る君の歸るを待ちて慈母が門に倚りて居るを、乃ち君が歸るに於ては古の老萊の如く慈母を喜ばすことならん、

【餘論】此の時、起句、對法を以て成る、「文苑英華」に、雁亦稀を雁欲飛に作る、勅選と稱する本に此の杜撰あり、亦稀の妙にして欲飛の拙なるは兒童も之を知る、兒童も知る所を勅選にして誤る、書を撰する亦難い哉、

送賀遂員外外甥

賀遂員外外甥を送る

南國有歸舟荆門泝上流

南國歸舟あり、荆門上流に泝る、

蒼茫葭蕀外雲水與昭邱

蒼茫たり葭蕀の外、雲水と昭邱と、

檣帶城烏去江連暮雨愁

檣は城烏を帯びて去り、江は暮雨に連りて愁ふ、

猿聲不可聽莫待楚山秋

猿聲聽く可からず、楚山の秋を待つこと莫れ、

【注解】南國、「詩」に、滔滔江漢、南國之紀とあり、「草明國語解」に、南國江漢之間也とある、上流、「晉書」に、荆州魯墟上流とあり、葭蕀、前に辨べり、昭邱、魏の王榮が「登樓賦」に西接昭邱とあり、李善曰く、當陽の東南七十里、楚の昭王之墓あり、昭邱即ち是なり、檣、帆柱なり、

近體詩 送友人南歸 送賀遂員外外甥

【題義】賀途なる外甥が員外の官職を帯びて遊び、今南國に歸るを送るなり、

【大意】南國に向つて歸る孤舟あり、荆門を流れて遡うて上る、水國なるが故に、景色は蒼茫として廣く、霞英を見るは勿論なるが、其の外に認むるものは、雲水と昭邱であるなり、櫓は走り鳥は飛ぶ、櫓が鳥を帯びて走る如くに見ゆ、江は長く、其の長きに連りて暮雨が愁ふる如くなり、猿聲を聽けば夏に愁を増す、故に聽くべからず、楚山の秋に及ばざる前に歸らるるが可し、

【餘論】此の詩、明刊の王維集と趙殿成本と「唐詩別裁」とを除く外、多くは送賀途員外甥とあり、余は外外甥を以て正と思ふ、清の黃培芳は評して、大氣磅礴、一滾して出づ、是高貴なることを知るを要す、若し粗豪に落つれば便ち之を失すと曰へり、詩品は所謂神韻派に屬して、格調派に屬せず、歸愚は録して而かも重視せざる所以なり、

送楊長史赴果州

楊長史が果州に赴くを送る

褒斜不容幘之子去何之

褒斜幘を容れず、之子去つて何くに之、

鳥道一千里猿啼十二時

鳥道一千里、猿啼十二時、

官橋祭酒客山木女郎祠

官橋祭酒の客、山木女郎の祠、

別後同明月君應聽子規

別後明月を同じうす、君應に子規を聽くなるべし、

【注解】褒斜、前に辨せり、之子は是子也と「爾雅」にあり、而かも是子の用例は無し、鳥道、南中志に、鳥道四百里、其の險絶を以て、戰騎は難無し、舟上に飛鳥の道あるのみ、祭酒客、趙殿成云ふ、古は出行必ず祖道の祭あり、土を封じて山の象と爲し、昔御輿拍を以て神主と爲し、酒酌所告し、既に祭れば車を以て之を擲きて去る、李長吉の詩に今將下東道祭酒而別祭とあるは此と合す、然れども蜀事には初ならず、恐らくは未だ、然らず、席中の尊者を祭酒と爲し、又、後漢の張魯祭酒を以て正事と爲す事を引いて之を注するは夏に誤る（以上趙殿成）、『華陽國志』に、張魯、晉義司馬と爲りて漢中の斷谷道に往く、既に至りて、鬼道教を以て義命を立て、糝米糝肉を其の中に置く、行者之を取りて、糝飯のみ、多きに過ぐるを得ず、道を學んで信ぜざる者、之を臯と謂ふ、本つて後乃ち祭酒と謂ふ、巴漢の夷民多く之を便とす、其の供通限りて五斗米を出す、世之を米道と謂ふ、女郎祠、蜀中の褒城縣に女郎山あり、山上に女郎墳と女郎廟とあり、俗に言ふ張魯が女を葬むる所と、

【大意】楊が蜀の果州に赴くに褒斜の險路は車を容るる能はざるなり、之子は何處の路を擇んで之くぞ、要するに何處まで行きても鳥道のみ、而して晝も夜も猿啼を聽くのみ、官橋を渡るときは昔の祭酒の客を想ふべし、又山木の靈造なる女郎の祠にも調するならん、今日別れて後明月の夜に遇はば、君は蜀中に在りて不如歸と鳴く蜀魂を聽くならん、

【餘論】此の詩も五律中の上乘に屬す、前半は路の險を敘し、後半は情の真なるを敘す、一字一句として蜀を離れず、余は李白の見説蓋兼路の五律と此の詩と斤力相均しと思ふ、黃培芳は鳥道の十字を獨造句切確と評したるが、但此の十字を賞するは淺し、紀曉嵐は、一片神骨、不比凡馬空多肉と評

す、頗る妙なり、方虛谷は此の詩の評に、右丞詩、入宋唯梅聖俞能及之、可三互看、曉嵐曰く、梅不可、與三右丞、同語、虛谷の肉眼、天眼の爲め破却せらると謂ふ可し、

送邢桂州

邢桂州を送る

饒吹喧京口、風波下洞庭。

饒吹京口に喧しく、風波洞庭に下る、

赭圻將赤岸、擊汰復揚舲。

赭圻と赤岸と、擊汰復舲を揚ぐ、

日落江湖白、潮來天地青。

日落ちて江湖白く、潮來りて天地青し、

明珠歸合浦、應逐使臣星。

明珠合浦に歸す、應に使臣を逐ふ星なるべし、

【注解】饒吹、『唐書儀衛志』に饒吹五都あり、饒吹と羽葆と饒吹と大饒吹と小饒吹となり、元來軍樂なり、饒は小饒即ち「ドラ」と稱す、今出船の報を示す、京口、今の江蘇省丹徒縣治、唐の時代丹陽郡と稱す、洞庭、湖南の岳州府を中心として廣長二百里の間に亘る、赭圻、地名、『元和郡縣志』に、赭圻の故城は、宣州南陵縣の西北一百三十里に在り、西は大江に臨む、舲に赭圻屯處を置く所、赤岸、廣陵の地名、擊汰、『楚辭』に齊舲舲以擊汰と、水夫が櫂を擧げて水波を擊つなり、舲は舟に雷の有るもの、或は曰ふ小舟なりと、合浦、唐の桂州は漢の合浦なり、後漢の孟嘗は合浦の太守に遷る、郡に殷實を産せずして、海に珠賈を出す、交趾と境を接す、曹、通商貿易せしむ、先の宰守、故に多く貪穢人を驚む、探求して紅袖を知らず、珠逐に交趾郡に徙る、是に於て行旅至らず、人物資無く、貧者は道に餓死す、曹、官に到り、前弊を革易し、民の病を求む、會て未だ歳を驗えず、去珠復還り、百姓皆其業に反り、商賈流通すと傳に在り、使臣星、後漢の和帝即位し、使者を分遣して、皆數服軍行し、各の州縣に至り、風俗を觀採せしむ、使者二人、

益州に到るに當り、李邵が候合に投ぜんとなす、時に夏夕露坐す、邵因つて仰ぎ觀、問うて曰く、二君、京師を憂する時、事ぞ朝廷二使を遣るを知るや、二人默然、驚きて相視て曰く、聞かざるなり、問ふ、何を以て之を知る、邵、星を指して示して云ふ、二使星あり、益州の分野に向ふ、故に之を知るのみ、

【大意】邢君は桂州の太守と爲りて將に出發せんとし、京口よりして拔鑑す、風波を冒して洞庭に向つて長江を下る、赭圻城下と赤岸山の下を通過する、水波が擊汰するが故に舲が高く揚るときあり、而して正しく洞庭湖に到り、日落ち潮來るの狀を見る、世界は皆白く、天地は皆青き奇景に驚くべし、昔、孟嘗と曰ふ人間の明珠が合浦郡の太守と爲りて、郡民に信頼せられたり、今日は邢君が明珠と爲りて桂州の民に信頼せられるならん、

【餘論】此の詩、對句を以て起し、三四は當句對の作法、五六の二句は雄闊廣大、老杜の吳楚東南拆、乾坤日夜浮と斤量相敵す、淵明を學んで閑遠幽澹の宗を開き、漢魏を學んで雄闊廣大の派を創す、謂ふ可し、右丞は其れ時に神なるものと、

送宇文三赴河西充行軍司馬

宇文三が河西に赴き、行軍司馬に充るを送る

橫吹雜繁笳、邊風捲塞沙。

橫吹繁笳に雜はり、邊風塞沙を捲ぐ、

近體詩 送邢桂州 送宇文三赴河西充行軍司馬

還聞田司馬、夏逐李輕車。

還聞田司馬、夏に逐ふ李輕車。

蒲類成秦地、莎車屬漢家。

蒲類秦地と成り、莎車漢家に屬す。

當令大戎國、朝聘學昆邪。

當に大戎の國をして、朝聘昆邪を學ばしむべし。

【注解】 橫吹、胡樂なり、張博望が西域に入りて其の法を西京に傳へしなり、笛も胡人製する笛の一種、田司馬、漢の田廣明は鄯を以て天水郡司馬と爲る、李輕車、漢の李蔡は輕車將軍と爲り、大將軍に従ひ、右賢王を擊ち、功あり率に中り、樂安侯に封ぜらる、蒲類、『漢書西域傳』に、蒲類國王、天山の西疏勒谷に治す、長安を去る八千三百六十里、西南都護治所に至る、千三百八十七里とあり、章懷太子曰く蒲類は匈奴中の海の名、敦煌の北に在り、莎車、漢の西域の國の名、今日は新疆に屬す、大戎、西戎の別名、昆邪、匈奴の屬部昆邪王、休屠王を殺し、其の衆を并せ降めて漢に降ると『漢書』にあり、今日甘肅の張掖、酒泉以下八縣に涉る地なり、

【題義】 字文は元來文官なるも、河西に赴く爲め行軍司馬に充てらる、其の行に臨んで之を送る詩とす、

【大意】 河西の地は所謂蠻地に屬して、橫吹の響が笳聲に雜はりて聞ゆ、而して邊土の猛風は塞沙を卷き揚げる、昔、田司馬は文官を以て武を兼ぬ、今眼前に還其の事を聞く、更に李輕車の如く功を立てし人を追逐する、蒲類と號し、莎車と號し、大戎國と號し、獨立して一時威を振ひしも、大底は漢の名將の爲め、或は捕虜と成り、或は降服して、皆漢の臣と爲る、君も行つたなら西戎をして昆邪王の如く臣として朝聘の禮を取らしむべきなり、

【餘論】 此の詩も起句對法とす、而して人名と地名と前後照應し、極めて明白なる作法たるなり、蒲類を蒲壘とし、莎車を莎居としたる本あり、國名たるを知らば、其の誤も亦知るべし、輕車と莎車は例の小疵とす、

送孫二

孫二を送る

郊外誰相送、夫君道術親。

郊外誰か相送る、夫君道術親しむ、

書生鄒魯客、才子洛陽人。

書生鄒魯の客、才子洛陽の人、

祖席依寒草、行車起暮塵。

祖席寒草に依り、行車暮塵を起す、

山川何寂寞、長望淚霑巾。

山川何ぞ寂寞たる、長望涙巾を霑す、

【大意】 郊外に君を送る者は誰ぞや、夫君は道術に親しむ、書生は孔孟の道を學んで鄒魯の客となる、才子は買生の如く洛陽の才人なり、祖席の燕を設けて寒艸に依り、行車は鞭りて暮塵を起す、山川は何ぞ其れ寂寞たるや、長望して涙は巾を霑すのみ、

【餘論】 此の詩は徹頭徹尾、何事を敍したるにや、更に解し難し、右丞の詩として最下に屬するものとす、

送崔三往密州觀省

崔三が密州に往いて觀省するを送る

南陌去悠悠東郊不_レ少留

南陌去つて悠悠、東郊少くも留らず、

同懷扇枕戀_レ獨念倚門愁

同じく枕を扇ぐの戀を懷く、獨り門に倚るの愁を念ふ、

路遠天山雪家臨海樹秋

路は遠る天山の雪、家は臨む海樹の秋、

魯連功未報且莫蹈滄洲

魯連功未だ報いず、且く滄洲を蹈むこと莫れ、

【注解】扇枕、漢の黃香が父は郡の五官と爲る、貧にして奴僕無し、香扇から勤苦を執り、心を盡して供養す、冬、被褥無くして、親は滋味を極む、暑には則ち牀枕を扇ぎ、寒には則ち身席を温む、天山、一名は雪山、又白山、又折羅漫山、最高頂は二萬五千尺、冬夏雪あり、海樹、『元和郡縣志』に、密州東至大海、一百六十里とあり、魯連、戰國の世、田單、魯連を言ひ、之を辟せんと欲す、魯連、海上に逃匿して曰く、吾、富貴にして人に誦せられん莫は、寧ろ貧賤にして世を輕んじ志を辱にせん、

【題義】崔が河南の密州に往きて父母を觀省するを送る詩なり、

【大意】南陌に向つて去つて悠悠、東郊に少留するも欲せず、君が心に懷く所は昔の孝子を戀へばなり、父母が我を待ちて門に倚りて愁ふことを念へばなり、道中は天山の雪を眺望しつつ往き、家に歸る時は正に海樹の秋に遇ふならん、國家は君の功に未だ報ゆることあらず、幸に魯連の如く滄洲を蹈んで身を隱すことなけれ、

送邱爲落第歸江東

邱爲が落第して江東に歸るを送る

憐君不得意況復柳條春

憐む君が意を得ず、況んや復柳條の春、

爲客黃金盡還家白髮新

客と爲りて黃金盡き、家に還れば白髮新なり、

五湖三畝宅萬里一歸人

五湖三畝の宅、萬里一歸人、

知_レ福不能薦羞稱_レ獻納臣

福を知りて薦むる能はず、羞らくは獻納の臣と稱するを、

【餘論】三畝宅、『淮南子』に、任一人之節、不足足以治三畝之宅也とあり、少しの土地を有するなり、知福、後漢の關衡は魯國の孔融と善し、融亦深く其の才を愛す、衡始めて冠冠にして、融年四十、遂に與に交友と爲る、上疏して之を薦む、獻納、班固が「兩都賦」に、朝夕論思、日月獻納とあり、

【題義】邱爲は蕪州嘉興の人、繼母に事へて孝、常に靈芝あり堂下に生ず、累官して太子右庶子と爲る、致仕の後、俸祿の半を以て終身給せらる、年八十餘、母尙恙無し、憂に居るに及んで、觀察使韓攄、致仕官給祿を以て、之を邱爲に恵む、卒する年九十六、王右丞及び劉長卿は共に友たり、察するに、此の詩は年少落第して還るを送る時の詩ならん、

【大意】余は憐れむ君が意を得ざりしことを、況んや柳條青青たる陽春の節に於てをや、客と爲るの久しき黃金は盡き、家に還るの歸還は唯白髮の新なるのみ、五湖の畔には三畝の宅あり、聊か頼む

べし、萬里の路獨歸甚だ凄たり、君は古の稱衡の如き才人なるを僕は善く知るも、而かも推薦する能はず、良に獻納の臣と稱する名に差づるなり、

【餘論】此の詩も右丞五律中上乘に屬するもの、各種の選本、錄せざるもの無し、三四の十字を嘆する者あり、或は五六の二句を稱する者あり、各の所見を異にす、余を以て之を觀れば、但一句二句を拾うて論ずる者は淺く、通體の上に於て其の精妙を見るべきなり、黃培芳の如く五六最重と評するは何の所以なるを知らず、顧評の隱藉は至當なり、不二字あり、例の病とす、

漢江臨眺

漢江の臨眺

楚塞三湘接、荆門九派通、

楚塞三湘接し、荆門九派通す、

江流天地外、山色有無中、

江流天地の外、山色有無の中、

郡邑浮前浦、波瀾動遠空、

郡邑前浦に浮び、波瀾遠空を動かす、

襄陽好風日、留醉與山翁、

襄陽の好風日、醉を留めて山翁に與ふ、

【注釋】楚塞、江漢の時に、率義至江漢、始知楚塞長とあり、九派、本流より別れて流るる派と爲す、九派は大致を指す、天地外、漢江の廣大なるを言ふ、山翁、晉の山簡は出でて征南將軍と爲り、荆湘交廣の四州を都督す、節を假りて襄陽に鎮し、優游事農、

唯江に是耽る、諸習氏は荆土の豪族、佳園池あり、簡出づる毎に、此に遊び嬉む、池上に置酒して風を醉ふ、之を名けて高陽池と曰ふ、時に童兒あり歌うて曰く、山公何許に出づる、往いて高陽池に至る、日夕倒載して歸る、簡即知る所無し、時時能く馬に騎る、白接鸞を倒着す、鞭を擧げて高陽に向ふ、何如そや并州の兒と、

【題義】漢江は常に漢水と稱す、湖北省襄陽道の中央を貫流して以て江に入る、襄陽に於て其の臨眺の狀を歌ふものなり、

【大意】楚國の要塞は三湘と接續し、荆州の關門は九派が分通す、漢水の流は極まり無く長く、天地の外に在るかと思はる、四面の山色は茫として有無の中に在るを知る、東西の各郡邑は前浦に浮ぶ如く見ゆ、而して波瀾は全く遠空を動かすかと覺ゆ、襄陽の風景は日日好し、誰が山翁の酔うて此に留まるを許すや、

【餘論】此の詩も對法を以て起す、而して前後二聯共に敘景好句として前聯を多く取る、紀曉嵐曰ふ、六句少味、複衍三句故也と、余謂ふ郡邑の句は山色の句に接し、波瀾の句は江流の句に接すと見れば可なり、複衍として排すべからず、顧可久曰く襄陽の人物、意獨風流曠達の者を尙ふ、古雅正大、

登辨覺寺

辨覺寺に登る

竹徑從初地、蓮峯出化城、

竹徑初地よりし、蓮峯化城出づ、

近體詩 漢江臨眺 登辨覺寺

臆中三楚盡林上九江平。

臆中三楚盡き、林上九江平かなり。

輦草承趺坐長松響梵聲。

輦草趺坐を承け、長松梵聲響く。

空居法雲外觀世得無生。

空居法雲の外、世を觀じて無生を得たり。

【注釋】初地、佛典に十地を説く、初地、二地、三地、十地に至りて最上の法を覺るなり、今借りて登山口を言ふ、化城、寺を喻ふ、【法華經】に化城喻品あり、一時化作せる城郭の義、衆生成佛の所を實所とし、此の實所に至らんとするに道途險惡なり、行人疲倦して退却せんことを恐れ、途中に一の城郭を變作して暫らく此に止息せしめ、此處に體氣を養ひ、遂に實所に到らしむ、三楚、江陵を南楚と爲し、吳を東楚と爲し、彭城を西楚と爲す、九江は南楚の中に屬す、江陵なればなり、空居、天の名、兜率等色界の諸天を云ふ、法雲、第十地とも云ふ、智慧彌徧れく、甘露の雨を灑ぐ位なり、無生、佛門最上の悟なり。

【大意】竹徑の初地よりして段段に登り、蓮峯登り極めたる處に化城が湧出してある、寺堂の臆の中より三楚が明かに見盡し、林上に在りて九江の平かなるを瞰る、輦草を敷いて趺坐を成し、長松に梵聲が響くを聞く、是に於て自分は疑ふ、空居天や法雲地の處に在りて、世諦や真諦を觀じて無生法忍を證得せしかと、

【餘論】此の詩も起句對法を以て成る、初地、化城、趺坐、梵聲、空居、法雲、無生、悉皆佛語ならざるは無し、而して運用の妙、神に入り、化に入る、一讀我以て五體投地せんと欲す、紀曉嵐曰く五六與象深微、特爲三精妙、而かも多くの評家は三四の形容廣大を賞して五六に想到せず、蓋し三四は遠

景、五六は近景、彼此優劣を分つべからず、平を明と爲し較勝ると、或は然らん、王琢崖論じて曰く此の詩初地、即ち菩薩十地中の第一地、所謂歡喜地なり、本是聖境中造る所の階級の名、今借りて寺外路徑の用に供し、化城は法華經中の化城の事、本是方便小乘止息の喻、今借りて寺中殿宇の用に供す、工は則ち工なり、然れども右丞は是學佛の者、綺語戒を犯すを奈何、琢崖の所謂綺語戒とは此の如きを稱して言ふなるか、一笑せざるべからず、右丞の詩多くは其の學力を示す所に、得もあり、失もあり、孟浩然の但自然に出づる詩に及ばざる所あるは或は信ならんと思ふ點もあり、蓋し此の詩の如きは全く學力の賜にて、空疎なる詩人は到底歌ふ能はざるもの、乃ち其の寺たるの氣分を味へば足る、階級云云を論ずるときは抑も末なり、

涼州郊外游望

涼州郊外の游望

野老才三戸邊邨少四鄰。

野老才かに三戸、邊邨四鄰少し。

婆娑依里社簫鼓賽田神。

婆娑として里社に依り、簫鼓田神に賽す。

灑酒澆芻狗焚香拜木人。

酒を灑ぎて芻狗に澆ぎ、香を焚いて木人を拜す。

女巫紛屢舞羅襪自生塵。

女巫紛として屢舞し、羅襪自から塵を生ず。

近體詩 涼州郊外游望

【注解】 娑婆、舞者の状態を言ふ、賽、神に祈願して受けたる福に報ゆる祭なり、芻狗、芻を取れて作りたる狗、祭に用ひ、祭終れば之を棄つ、『淮南子』に芻狗土龍之始成とあり、高誘が注に東芻芻狗、以謝過求福とあり、木人、田神と同じ、鹿、曹子建が『洛神賦』に、凌波微步、羅襪生塵とあり、『サスマソノメ』しなり、

【題義】 關右道の涼州郊外に遊望して、邊土の俗、神を祭する状を詠せしものなり、

【大意】 野老が住居すら才かに三戸、邊郡何處を見ても家無し、而かも婆娑として郷社に舞ふ者を見る、簫鼓を吹いて田神を賽する者も亦見る、神酒を瀝ぎて芻狗に澆ぐ者もあり、香を焚いて木人を拜する者もあり、女巫紛として屢ば舞ふ、其の舞者の羅襪は自から塵を生ず、

【餘論】 此の詩も起句對法なり、右丞の至るものにあらざるも、邊土蕭條の荒景、自から彷彿せしむ、

觀獵

獵を觀る

風勁角弓鳴將軍獵渭城

風勁うして角弓鳴り、將軍渭城に獵す

草枯鷹眼疾雪盡馬蹄輕

草枯れて鷹眼疾く、雪盡きて馬蹄輕し、

忽過新豐市還歸細柳營

忽ち新豐の市を過ぎ、還歸る細柳の營、

回看射鵰處千里暮雲平

射鵰の處を回看すれば、千里暮雲平かなり、

【注解】 角弓、『詩』に駉駉角弓とあり、渭城、長安を秦の始皇は咸陽と稱し、漢の高祖は新城と名く、武帝は渭城と名け、王莽は京城と爲す、渭城といふは、北に渭水を控ふればなり、新豐は臨潼縣に在り、渭城を去る七十里、細柳營、高年縣東北三十里、射鵰、『北史』に、解律光、嘗て文選に従つて獵す、雲表に一大鳥を見、之を射て正しく其の頸に中る、形、車輪の如く、旋轉して下る、乃ち懸なり、人嘆じて曰く此れ射鵰手なり、

【大意】 北風響勁くして角弓鳴る、恰も是將軍が渭城に獵するときなり、草枯死したるに因りて、鷹の眼が疾く、雪が盡きたるを以て馬蹄は輕し、忽ちにして新豐の市を過ぎ、還細柳營に歸る、其の歸途射鵰の處を回看すれば、千里の間暮雲が平かなり、

【餘論】 此の詩は起句對法を用ひず、明の黃家鼎曰く、枯而疾、盡而輕、甚妙、便是驚鷹駉馬、矯健當前、結處澹而有味可玩、清の沈歸愚曰く、章法句法字法、俱臻絕頂、盛唐詩中亦不多見、近時黃培芳曰く、此首不過三能品と、歸愚に對する漁洋派の強言のみ、沈說の正しきを知る、蓋し邵古菴謂ふ、細柳營、渭城、皆陝西長安縣、新豐、臨潼縣、相去七十里、曰忽過、曰還歸、正見其往返之易、松谷曰く、輿會所至、一時彙集、又何嘗拘拘於道里之遠近、而後琢句者哉と、達見と謂ふべし、

王右丞集卷八終

王右丞集卷九

近體詩 三十五首

春日上方即事

春日上方の即事

好讀高僧傳。時看辟穀方。

好んで高僧傳を讀み、時に辟穀の方を見る、

鳩形將刻杖。龜殼用支牀。

鳩形將に杖に刻まんとす、龜殼用て牀を支ふ、

柳色春山映梨花夕鳥藏。

柳色春山映じ、梨花夕鳥藏る、

北牕桃李下。閒坐但焚香。

北牕桃李の下、閒坐但香を焚く、

【注】高僧傳、梁の僧祐、高僧傳十四卷を撰す、唐に及んで道宣の高僧傳あり、慧皎の高僧傳あり、今は僧祐の高僧傳を指すなり、辟穀方、穀物を食ふことを廢する方、僧傳に多く此の事無く、神仙傳に多く有り、時に辟僧にはあり、鳩杖、後漢書禮儀志に、仲秋の月、縣道皆戸を按じ、民の年七十の者、皆杖を賜ふ、杖端鳩を以て飾と爲す、鳩は喙はさる鳥、老人をして喙はさらしめんと欲す、龜牀、史記に、南方の老人、龜を用て牀足を支へて行く、二十餘年、老人死して牀を移す、龜尚ほ生きて死せず、龜能く氣を行り導引すと、

【題義】山上の寺を上方と曰ふ、上方世界、下方世界は釋典に多く用ふるもの、春日山寺に於て歌ひ

近體詩 春日上方即事

し詩とす、

【大意】平生に好んで高僧傳を讀む、時には仙人の辟穀方なども看る、鳩形の飾ある杖を造らんとし、龜殻を用て牀を支へんと欲す、我は登山に際して疲勞を感じたればなり、今や柳色は春山に映じ、梨花の陰には夕鳥が藏れ棲まんとす、北窗桃李の下に、閒坐して但香を焚く、

【餘論】此の詩も對句を以て起す、三四の二句は較佳、五六以下右丞として最下に屬す、「律體」に花明夕鳥藏に作る、紀曉嵐曰く明字不對三色字と、盧谷曰く三四新異、曉嵐曰く右丞習用之典、不得以三新異一目之、余も曉嵐に同意する者なり、願可久評して清俊恬澹と曰ふ、右丞知るあらば苦笑すべし、

汎前陂

前陂に汎ぶ

秋空自明迴、況復遠人間。

秋空自から明迴、況んや復人間に遠きをや、

暢以沙際鶴、兼之雲外山。

暢ふるに沙際の鶴を以てし、之を兼ぬるに雲外の山、

澄波澹將夕、清月皓方閒。

澄波澹として將に夕ならず、清月皓として方に閒なり、

此夜任孤棹、夷猶殊未還。

此の夜孤棹に任す、夷猶殊に未だ還らず、

【題義】前面の陂池に舟を汎べ、其の興致を敘する詩なり、

【大意】秋空は一碧、自然に明迴なり、況んや復此の處塵寰と遠離するをや、我が心身を暢ふるに沙際に鶴の在るあり、之に加ふるに雲外の山も我が氣を暢べしむ、澄波は澹然として將に夕ならんとし、清月は天に出てて皓として方に閒なり、此の夜孤棹に任せて遊び、夷猶即ち猶豫して殊に未だ還らざるなり、

【餘論】此の詩は起句對法を以てせず、明の楊升菴曰く、暢以沙際鶴、兼之雲外山、孟浩然の重以三觀魚樂、因之鼓三椎歌、助語を用ふと雖も、詞頭巾氣無し、

游李山人所居因題屋壁

李山人が所居に遊び、因つて屋壁に題す

世上皆如夢、狂來或自歌。

世上皆夢の如し、狂し來りて或は自ら歌ふ、

問年松樹老、有地竹林多。

年を問へば松樹老い、地有りて竹林多し、

藥倩韓康、賣門容向子過。

藥は韓康を倩うて賣り、門は向子が過ざるを容る、

翻嫌枕席上、無那白雲何。

翻つて嫌ふ枕席の上、白雲を那何ともする無し、

【注解】韓康、前に辨せり、向子、『奕雜記』に、向子平、道術あり、瓢の功曹と爲る、休歸自から山に入り、薪を擔うて賣り、以

近體詩 汎前陂 游李山人所居因題屋壁

て食飲に供す、「後漢書」は之と異なる、向長、字は子平、河内朝歌の人、隱居して仕へず、性、中を尚び和好、老易に通ず、貧にして貧食無し、好事の者饋すれば之を受け、取りて足れば其の餘を反す、人之を玉葬に薦む、固辭して乃ち止む、後説近し、

【大意】山人は世上の事皆夢の如しと観る、狂し來るときは或は自ら浩歌す、年を問ふ人あれば松樹老ゆと答ふるのみ、所居の地は竹林が多し、藥は韓康の如き清康の人を情うて賣り、門は俗客を容れずして唯向子の如き人を容れるのみ、翻つて嫌ふ枕席の上、白雲が多くして那何ともする無し、

【餘論】此の詩も起句對せず、山人の清、山居の幽を敘して、通體幽雅なり、右丞の詩としては平平に屬す、

登河北城樓作

河北の城樓に登りて作る

井邑傳巖上客亭雲霧間

井邑傳巖の上客亭雲霧の間

高城眺落日極浦映蒼山

高城落日を眺め極浦蒼山に映す

岸火孤舟宿漁家夕鳥還

岸火孤舟宿し漁家夕鳥還る

寂寥天地暮心與廣川閒

寂寥天地の暮心廣川と閒なり

【注釋】井邑、周の制、九百畝を以て一井と爲し、四井を以て邑と爲す、井は區畫なり、邑は他聚なり、傳巖、古の聖者傳説が顯

處なり、陝州平陸縣の北七里に在り、寂寥、體の貌、又曠遠の貌なり、廣川、「史記」に此皆廣川、大水、山林、溪谷、不食之地也とあり、

【題義】陝州平陸縣は本河北縣と稱す、天寶元年、太守李齊物、三門を開きて以て漕運に利す、古刃を得、篆文あり平陸と曰ふ、因つて名を改む、

【大意】一區畫を成したる小都邑が傳巖の上に見える、客亭は遙かに雲霧の間に有り、高城に登りて落日を眺望すれば、目極まる處の浦光が蒼山に映するを見る、黃昏に逼り岸火點じて孤舟が宿し、漁家の邊には夕鳥が飛び還る、寂寥として天地漸く暮れ、而かも我心は廣川の如くに閒なり、

【餘論】此の詩は對起法を以て成る、一絲一線紊れずして、眺望の景を敘す、冲雅の評、當るを覺ゆ、

登裴迪秀才小臺作

裴迪秀才が小臺に登りて作る

端居不出戸滿目望雲山

端居戸を出でず滿目雲山を望む

落日鳥邊下秋原人外閒

落日鳥邊に下り秋原人外閒なり

遙知遠林際不見此簷間

遙かに知る遠林の際此の簷間を見ず

好客多乘月應門莫上關

好客多く月に乘ず應門關を上すこと莫れ

近體詩 登河北城樓作 登裴迪秀才小臺作

【題義】裴迪は關中の人、初め右丞、崔興宗と終南に居り、同じく倡和す、天寶の後、蜀州の刺史と爲る、杜甫、李頎と友とし善し、嘗て尙書郎と爲る、右丞より年少し、秀才と稱せらるる所以、

【大意】秀才は端居して戸庭を出でしこと無し、滿目唯雲山を望む、落日は鳥の歸る邊に下り、秋の平原は人世外に閑なるを覺ゆ、遙かに遠林の際に在りて、此處の簷間は見ること能はず、此の簷間よりは、彼の遠林は明白に知るを得、好客は觀月の爲め多く來らん、應門即ち門の閑閉を司る者よ、門關を閉ざすこと莫れよ、

【餘論】此の詩は起句對法ならず、自然率直、右丞の至るものにあらず、但し三四の句誦すべし、

被出濟州

濟州に出さる

微官易得罪、謫去濟川陰、

微官罪を得易く、謫去す濟川の陰、

執政方持法、明君無此心、

執政方に法を持す、明君此の心無し、

閭閻河潤上、井邑海雲深、

閭閻河潤上り、井邑海雲深し、

縱有歸來日、多愁年鬢侵、

縱ひ歸來の日あるも、多愁年鬢の侵すことを、

【注解】微官、右丞此の時大樂丞の官、濟川陰、隋の濟北郡を、唐の武德四年、濟州と改む、天寶元年、改めて濟陽郡と爲す、天

寶十三年、濟州を廢す、執政、張九齡なり、明君、玄宗なり、河潤、「莊子」に河潤九里とあり、

【題義】宗祏の「新唐書」に依れば、右丞は開元の初め、進士に擢てられ、大樂丞に調せらる、累に坐して濟州司倉參軍と爲るとあり、此の坐累は安祿山の反の前であれば、如何なる累なるや明白ならず、劉昫の「舊唐書」は一言も辨無し、本傳此の如し、今より事情を知る能はず、此の詩、不平の氣を以て濟州に赴かんとして作るなり、

【大意】微官なりとも官吏たるの故を以て罪を得易し、謫去の身と爲りて濟川の陰に之かざるべからず、執政は方に法を持して嚴なり、明君は我を貶するの心無し、閭閻は河の潤氣が上り、井邑は海雲の色深し、縱ひ歸來の日あるとも、一年年老いて霜鬢の侵すあるを愁ふ、

【餘論】此の詩も起句不對なり、謫去の期間は判明せざるが、張九齡が右拾遺に擢て、監察御史と爲るは此の間を去る幾何も無し、年鬢侵さざる中に歸來したるは事實なり、然らば此の詩は朝廷を動かせしものと謂ふべし、

千塔主人

千塔主人

逆旅逢佳節、征帆未可前、

逆旅佳節に逢ふ、征帆未だ前むべからず、

近體詩 被出濟州 千塔主人

臆臨汴河水門渡楚人船

臆は汴河の水に臨み、門は楚人の船を渡す、

雞犬散墟落桑榆蔭遠田

雞犬墟落に散じ、桑榆遠田を蔭す、

所居人不見枕席生雲煙

所居人見えず、枕席雲煙を生ず、

【注解】汴河、亦、汴渠と曰ふ、即ち汴水、其の上流を古の梁濟と爲す、又南濟と曰ふ、首として黃河を受く、梁國に在るを真澤渠と曰ひ、東流するを首澤水と曰ふ、又大梁城北を東流するを陰溝と曰ふ、隋の楊帝開浚して江都の漕運を通じ、梁れて汴水を引く、亦通濟渠と曰ふ、汴渠故道二あり、一を古汴河の故道と爲す、河南の襄陽州、開封、歸徳の北境より、江蘇の蕪湖州を經、泗に合して淮に入る、即ち「水經注」汴渠二水の道なり、元の代黃河の奪ふ所と爲る、一を隋以後の汴河の故道と爲す、前故道より、開邱縣治の南に至り、東南に流れ、安徽の宿縣、靈璧、泗縣を歴て淮に入る、隋唐宋の間、東南の粟を漕運して京師に入る、昔此に由る、今日は漕廢し、唯泗縣に尙汴水斷渠あるのみ、桑榆、前に拂せり、

【大意】千塔と稱する逆旅に於て佳節に逢ふ、一日を緩うせん爲め征帆は前進を留む、旅舎の臆は汴河の水に臨み、旅舎の門前は楚人の船を渡す、端午に逢うて屈原を弔する人人ならん、雞犬は墟落に散在して鳴き、桑榆は遠田に蔭を成して生ゆ、自分の近處には人の影を見ず、唯枕席の旁に雲煙の生ずるあるのみ、

【餘論】此の詩も起句對せず、題目單に千塔主人とあるは、恐らくは示の一字脱したるものと思ふ、右丞集中に在つては喫茶飯の部に屬するもの、八字二字あり、亦小疵とす、

使至塞上

使して塞上に至る

單車欲問邊屬國過居延

單車邊を問はんと欲し、屬國居延を過ぐ、

征蓬出漢塞歸雁入胡天

征蓬漢塞を出で、歸雁胡天に入る、

大漠孤煙直長河落日圓

大漠孤煙直く、長河落日圓なり、

蕭關逢候騎都護在燕然

蕭關候騎に逢ふ、都護は燕然に在り、

【注解】屬國、「漢書武帝紀」に、匈奴昆邪王、休屠王を殺し、其の衆合四萬餘人を并せ降して來降す、五屬國を置きて以て之を處すとあり、其の國號を存して、而して漢朝に屬す、故に屬國と曰ふなり、居延、「漢書」に、霍去病、北地に出づる二千餘里、居延を過ぎ、新首屠三千餘家とあり、居延は漢の縣、張掖郡に屬す、都尉治と爲す、今日甘肅酒泉郡の地、外蒙古なり、武帝の時、伏波將軍路博徳、城を築き、居延塞と名く、漢塞、「史記匈奴傳」に、單于既入漢塞とあり、胡天、漢の簡文帝「阻歸賦」に、老樹歸風、胡天少色とあり、大漠、廣大なる沙漠なり、孤煙直、北周庾信府の時に野戍孤煙起とあり、古の烽火狼煙を用ひ、其の煙、直うして兼まる、風之を吹くと雖も斜ならず、或は謂ふ邊外は懸風多し、其の風迅急、煙沙が曇として直上す、觀しく其の景を見る者、始めて直子の住を知る、蕭關、古城は原州平高縣東南三十里に在り、漢書に、文帝十四年に、匈奴、蕭關に入り、北地都尉を殺す、是なり、候騎、今の所謂斥候兵なり、漢の何遜の時に候騎出蕭關とあり、燕然、「後漢書」に、車騎將軍竇憲、龜兹塞を出でて遼を度り、將軍賈鴻、柳楊塞を出で、南單于は滿夷谷を出で、北匈奴と稽落山に戦ひ、大に之を破り、追擊して和渠北絶海に至る、竇憲遂に燕然山に登り、石を刻し功を勅して還るとあり、蕭然、後漢書に、車騎將軍竇憲、龜兹塞を出でて遼を度り、

【大意】使命を奉じて塞上に赴く、所謂單車獨行して極邊を慰問せんと欲す、而して屬國たる所の居

延城を過ぎ、我が征蓬は漢塞を出づるに、彼の歸雁は胡天に入る、沙漠の邊に到れば孤煙の直きを見、長河の畔に至れば落日の圓かなるを看る、既にして蕭關に達し候騎に逢ふ、候騎は示す都護は今燕然山に在ると、

【餘論】此の詩は起句確對法ならず、全首構成法、雄渾にして自然、大家の規模を見る、明の黃家鼎曰く、曠遠之景、孤烟如何直、須要三理會と、清の黃培芳曰く、直圓二字極鍛鍊亦極自然、後人全講鍊字之法、非也、全不講鍊字之法、亦非也、二家の評、以て首肯すべし、

晚春閨思

晚春の閨思

新妝可憐色落日卷羅帷。

新妝可憐の色、落日羅帷を卷く、

鐘氣清珍簾牆陰上玉墀。

鐘氣珍簾清し、牆陰玉墀に上る、

春蟲飛網戶暮雀隱花枝。

春蟲網戸に飛び、暮雀花枝に隠る、

向晚多愁思閒聽桃李時。

晚に向つて愁思多し、閒聽桃李の時、

【大意】女子の新妝は可憐の色あり、落日に羅帷を卷きて坐す、鐘氣は珍簾の清しきを感じしめ、牆陰は玉墀に上るの状あり、春蟲は網戸に飛んで戯れ、暮雀は花枝に隠れて棲まんとす、晚に向つて愁思益す多し、閒聽の前には桃李の花盛んなる時、

【餘論】此の詩起句對法ならず、全首女子の閒情閒景を率易に敘述せしに過ぎず、

戲題示蕭氏外甥

戲れに題して蕭氏が外甥に示す

憐爾解臨池渠爺未學詩。

憐む爾が臨池を解すること、渠爺未だ詩を學ばず、

老夫何足似敝宅偷因之。

老夫何ぞ似すに足らん、敝宅偷くは之に因る、

蘆笋穿荷葉菱花買雁兒。

蘆笋荷葉を穿ち、菱花雁兒を買す、

鄧公不易勝莫著外家欺。

鄧公勝り易からず、外家の欺を著くる莫れ、

【注釋】憐、爾は憐の字の語助なる場合もあり、爾と讀んで名詞の場合もあり、今は名詞とす、臨池、晉の裴伯英は池に臨んで書を學び、池水盡黒し、即ち字を習ふなり、渠爺の渠は渠長とか渠儀の類、彼の爺なり、蕭氏を指す、老夫、右丞自身を指す、敝宅、「晉書」に、魏野少にして孤、外家蕭氏の妻ふ所と爲る、舊氏、宅を起つ、宅を相する者云ふ、當に貴甥を出すべし、祖母、魏氏が甥、小にして難なるを以て、意に謂ふ之に應ずと、野が曰く、當に外祖が爲めに此の宅相を成すべし、鄧公、晉の鄧鑒、永嘉の喪亂に值ひ、郷里に在りて甚だ窮乏す、郷人公が名徳を以て、傳へて共に之に歸る、公當に兄の子遇及び外甥周翼の二小兒を撫へて往いて食す、郷人の曰く各自に困困す、君が賢なるを以て、共に君を濟はんと欲するのみ、恐らくは棄れて存する所有ること能はず、公是に於て獨り往いて食す、飢を飯を食んで兩頰の邊に著け、還つて吐きて二兒に與ふ、事「世說新語」に在り、

近體詩 晚春閨思 戲題示蕭氏外甥

【大意】可憐に思ふ爾が幼年にして書を習ふを、爾が爺は未だ詩を學ぶことを知らず、我も亦何を爾に詩を似すに足らんや、爾は昔の魏舒の如く小慧なれば、宅相者の爲め稱せらるる者ならん、蘆笥は荷葉を穿ちて高く出で、菱花は雁兒を買して露さず、鄭公も蕭氏に比すれば勝り易からざるを知るも、郷人が嘗て二兒を嫌ひし如くの欺きを著くること莫れ、

【餘論】此の詩は題目の如く戲賦、一時興感の作、右丞の集より除去するも可なり、五六の二句較や誦すべし、

秋夜獨坐

秋夜獨坐

獨坐悲雙鬢空堂欲二更

獨坐雙鬢を悲しむ、空堂二更ならんと欲す、

雨中山果落燈下草蟲鳴

雨中山果落ち、燈下草蟲鳴く、

白髮終難變黃金不可成

白髮終に變じ難く、黃金成る可からず、

欲知除老病唯有學無生

老病を除くを知らんと欲せば、唯無生を學ぶ有り、

【注解】雙鬢、江淹の詩、雙鬢難色とあり、山果、晉の支遁の詩、山果盤時多とあり、草蟲、「詩」に唯唯草蟲とあり、黃金、江淹の詩、丹砂信難、黃金不可成とあり、無生、前に辨せり、

【大意】秋夜に獨坐して雙鬢を悲しむ、空堂は正に二更ならんと欲する時、細細たる雨中に山果の落ちる聲を聞く、又嚶嚶として燈下に草蟲が階砌に鳴くを聴く、白髮は終に黒髮と變すること無し、黃金は丹砂を以て化成すべからず、老病を除くを知らんと欲せば、唯無生の眞理を學ぶにあるのみ、
【餘論】此の詩は對法を以て起る、衰老に赴く感慨を欲述するが本旨にて、雨中の二句秋夜の狀を言ひ、餘は皆獨坐の愁懷なり、「三昧」も「別裁」も「正音」も之を採る、識ありと謂ふべし、顧可久曰く清婉、黃培芳曰く真意溢于楮墨、其氣充足と、爲客黃金盡、還家白髮新と同じく、右丞得意の句なるべし、

待儲光義不至

儲光義を待てども至らず

重門朝已啓起坐聽車聲

重門朝已に啓き、起坐して車聲を聴き、

要欲聞清珮方將出戶迎

要す清珮を聞かんことを欲し、方に戸を出でて迎へんとす、

晚鐘鳴上苑疎雨過春城

晚鐘上苑に鳴り、疎雨春城を過ぐ、

了自不相顧臨堂空復情

了自ら相顧みず、堂に臨んで空しく復情、

【題義】儲光義は兗州の人、開元中の進士、監察御史と爲る、祿山の亂後、賊に陥るに坐して貶せ

近體詩 秋夜獨坐 待儲光義不至

らる、右丞と唱和多かりし、今約して來らざるの事を歌ふ、

【大意】重門は朝來早く啓き、起坐して車聲を聴き、要す清環を聞かんと欲し、若し其の車聲を聞かば、方に戸を出でて迎へんと用意して居りしも、曉鐘は已に上苑に鳴り度り、疎疎たる雨は春城を一過す、而かも君は了に自ら來願せず、堂に臨んで空しく復君を思ひ種種の情を起す、

【餘論】此の詩も起句對法ならず、語語平凡にして、無生忍を證得したる人の語にあらず、右丞の詩は剛鍊心附、出して以て自然なりと人を感せしむるものと、眼前即興、鍛鍊して出さざるものとの二類は自から明白に區分す、遷家として漁洋や歸愚は此の點に於て慧眼の人たるに服するものなり、

聽宮鶯

宮鶯を聴く

春樹繞宮牆、春鶯啼曙光。

春樹宮牆を繞り、春鶯曙光に啼す、

忽驚啼暫斷、移處弄還長。

忽ち驚き啼きて暫く斷え、移處弄して還長し、

隱葉棲承露、攀花出未央。

葉に隠れて承露に棲み、花を攀ちて未央を出づ、

游人未應返、爲此始思鄉。

游人未だ應に返るべからず、此が爲めに始めて郷を思ふ、

【注解】春樹、春の名、漢の武帝建つ、臺は臺の磁石門内に在り、未央、漢の高帝七年に、蕭何が龍首山に建つる所、

【大意】春樹は陰陰宮牆を繞り、春鶯は啾啾曙光に啼す、忽ち驚くが如く、啼聲が暫く斷ゆ、他に移り飛んで還啼くこと長し、葉に隠れて承露臺に棲み、花を攀ちて未央宮を出でて鳴く、游人は未だ應に返るべからず、此の聲を聞いて始めて郷を思ふ、

【餘論】此の詩對起を以て成る、「文苑英華」に宮鶯に作る、宮にしても春にしても同字層なる、結局も爲此思故郷に作る本が多し、今「文苑英華」に依つて始思郷の平仄譜聲を取るなり、六朝の柔麗、氣骨全く無し、

早朝

早朝

柳暗百花明、春深五鳳城。

柳暗くして百花明か、春は深し五鳳城、

城烏睥睨曉、宮井轆轤聲。

城烏睥睨の曉、宮井轆轤の聲、

方朔金門侍、班姬玉輦迎。

方朔金門に侍し、班姬玉輦迎ふ、

仍聞遺方士、東海訪蓬瀛。

仍聞く方士を遣つて、東海に蓬瀛を訪はしむ、

【注解】詩眼、城上の垣を睥睨と曰ふ、所謂女牆なり、轆轤、井上の汲水器を曰ふ、方朔、漢の東方朔は金馬門に待詔す、班姬、漢の成帝は遊ふに班婕妤と聲を同じうす、方士、『史記封禪書』に、天子、方士をして海に入り、蓬萊に安期生の屬を求めしむとあり、蓬萊、不老不死の人が住する仙島なり、

【大意】柳色は蒼青なれば暗く、百花は紅白なれば明かなり、春色は殊に五鳳城に深し、城鳥は早く鳴く脾睨の曉に、宮井は佳人水を汲むならん靴履の聲が響く、候を好むの天子なれば東方朔が金門に侍し、色を好むの天子なれば班婕妤が玉輦にて迎へらる、其の上の方士等をして、東海に往いて蓬瀛を訪はしむ、

【餘論】此の詩は起句對せず、早朝の名に託して宮廷の事を敘し、暗に諷する所あるが如し、右丞の詩、當面に事を詠じて、側面に諷喻を託するもの少なし、其の人の生活は終身波瀾少なければなり、唯身分を守りて、貪らず、清淨に身を處せしが、右丞として貴き所とす、

愚公谷 三首

愚公谷 三首

〔一〕

愚谷與誰去。唯將黎子同。
愚谷誰と與に去らん、唯黎子と同じうす、
非須一處住。不那兩心空。
一處に住するを須つに非ず、那ともせず兩心空しきことを、
寧問春將夏。誰論西復東。
寧ぞ問はん春將に夏ならんとするを、誰か論せん西復東
不知吾與子。若箇是愚公。
知らず吾と子と、若箇か是愚公なる、

するを、

〔二〕

吾家愚谷裏。此谷本來平。
吾家愚谷の裏、此の谷本來平かなり、
雖則行無跡。還能響應聲。
則ち行いて跡無しと雖も、還能く響聲に應ず、
不隨雲色暗。只待日光明。
雲色に隨つて暗からず、只待つ日光の明なるを、
緣底名愚谷。都由愚所成。
底に緣つて愚谷と名くる、都て愚の成す所に由る、

〔三〕

借問愚公谷。與君聊一尋。
借問す愚公谷、君と聊か一たび尋ねん、
不尋翻到谷。此谷不離心。
尋ねずんば翻つて谷に到る、此の谷心を離れず、
行處曾無險。看時豈有深。
行處曾て險無く、看時豈深きことあらん、
寄言塵世客。何處欲歸臨。
言を寄す塵世の客、何れの處にか歸臨せんと欲する、

【餘論】此の愚公谷三首の詩は、全く彼の寒山や拾得の別調にて有韻の偈と見るべし、詩として見るべからず、深く論ずるの要無し、

雜詩

雜詩

雙燕初命子。五桃初作花。

雙燕初命子。五桃初作花。

王昌是東舍。宋玉次西家。

王昌是東舍。宋玉西家。

小小能織綺。時時出浣紗。

小小能織綺。時時出浣紗。

親勞使君問。南陌駐香車。

親使君問。南陌駐香車。

【注解】五桃、鮑照の詩、中庭五株桃、一株先作花とあり、王昌、趙松谷曰く唐人詩中多く王昌が事を用ふ、上官儀の詩に、南園自然勝三華上、東家復是值三王昌と、李義山の詩、王昌只在東家住、未必金堂得免、兼と、『襄陽耆舊傳』に、王昌、字は公伯、東平相敬、嘗侍と爲る、早く卒す、婦は任城王曹子女が女、王昌が弟の式は漢邊將軍長史と爲る、趙は尚書令紅裙の女、王昌が母、聰明にして教典あり、二婦、門に入れば、皆雙車より下らしむ、陰修することを得ず、後、紅裙が子の嘉、魏主に向し、金縷衣にて王式が態を見んと欲す、嘉、之を止めて曰く、其の醜態なり、固より倍するを得ず、爾持ち往きて人の家法を犯すべからず、其の長ること此の如し、桃圖の流にあらざるに似たり、蓋し別は一人、然れども他書に考無し、宋玉、宋玉の賦に曰ふ、天下の佳人、楚國に若くは莫し、楚國の麗なる者は、臣が里に若くは莫し、臣が里の美なる者は、臣が東家の子に若くは莫し、之に一分を増すときは大だ長く、之に一分を減するときは大だ短し、粉を著くるときは大だ白く、朱を施するときは大だ赤し、眉は翠羽の如く、肌は白雪の如く、腰は素を束ぬるが如く、齒は貝を含むが如し、嫣然一笑すれば、閨城を盡はし、下蔡を迷はす、然れども此の女、論に登る三年、臣を寵ふ三年、今に至りて未だ許さざるなり、

【大意】雌雄の雙燕が初めて子を成命し、五雛が成長して五桃が花を作す如くに美なり、而して王昌なる美少年は東舍に鄰する、宋玉なる文傑士は西家に次る、桃の如き少女は小小にして能く綺を織り、又時時出でて紗を浣ふ、妾を見んと欲して使君が親しく勞問せられ、南陌に香車を駐めらるるを謝す、

【餘論】此の詩は古體なるが如く、律體なるが如く、顧可久は之を古詩と定めて他の長詩と同じく、雜詩五首の中に收む、趙松谷は律と定めて、近體詩の中に收む、然れども平仄の諧和せざる所より見れば、古詩中に收むべきものなり、況んや其の歌ふ所、漢の十九首の調と、六朝諸家の調とを學んで成りしもの、恐らくは右丞としても古體として詠出せしものと思ふ、詩格は綽態柔情、嫣然一笑の概あり、

過秦皇墓

秦皇の墓を過ぐ

古墓成蒼嶺。幽宮象紫臺。

古墓蒼嶺と成り、幽宮紫臺に象たり、

星辰七曜隔。河漢九泉開。

星辰七曜隔たり、河漢九泉開く、

有海人寧渡。無春雁不廻。

海あり人事を渡らんや、春無うして雁廻らず、

夏聞松韻切。疑是大夫哀。

夏に聞く松韻の切なるを、疑ふらくは是大夫哀むかと、

【注】 廟宮、陵墓を謂ふ、崇臺、天帝の住處、又天子の居處、七曜、日月及び火星、木星、金星、土星なり、九泉、地上には九州と曰ひ、地下は九泉と曰ふ、

【題義】 始皇墓、漢の成帝邑陵を経營す、劉向疏を上りて曰く秦の始皇、驪山の阿に葬る、下は三泉を鑿し、上は山墳を崇うす、高さ五十餘丈、周流五里有餘、石槨を游館と爲し、珍寶の藏、機械の變、棺槨の麗、宮館の盛、勝原すべからず、

【大意】 古墓は蒼嶺の形成の如く大なり、其の墓域は總て生前の榮臺に象る、棺槨に彫するものは星辰七曜、天に在るべきものが地に在る、隔たる所以、河漢の天象を刻するも是も九泉に閉くなり、海東に不死の藥を求めたるも人事ぞ渡らんや、幽宮は春無うして雁廻らず、夏に聞く松韻の響切なるを、疑ふらくは是大夫が哀むかと、

【餘論】 此の詩は對起法を以てす、作法一氣にして成り、毫も停滯の氣味なし、顧可久評する如く、雄渾にして風人の意あり、其の騷者糜爛を諷して露さす、右丞年十五、又は二十の作との説あり、要するに五律の上乗に屬す、『瀛奎律髓』の陵廟類に收めざるは何ぞや、『律髓』に收むる宋の魯三江が此の題の七律、亦可なり、曰く、祖龍何事ぞ苦しんで東巡する、仙駕歸來塚草新なり、項籍已に飛ばす三月の火、子嬰猶は醉ふ六宮の春、元來滄海殊に藥無く、却つて是芝碣暗に人あり、古より乾坤異主に屬す、驪山山下好し巾を覆す、

故太子太師徐公輓歌 四首 故太子太師徐公の輓歌 四首

功德冠羣英、彌綸有大名。 功德羣英に冠たり、彌綸大名あり、

軒皇用風后、傳說是星精。 軒皇風后を用ひ、傳說是星精、

就第優遺老、來朝詔不名。 第に就きて遺老を優し、朝に來り詔して名らず、

留侯常辟穀、何苦不長生。 留侯常て穀を辟く、何ぞ苦だ長生せざる、

【注】 彌綸、彌は彌縫、綸は綸綸、彌綸天地之道とあり、風后、昔、黃帝即ち軒皇が大風、天下の塵垢を吹き去ると夢む、帝悟めて嘆じて曰く、風は號令と爲す、執政者なり、垢、土を去るは后在るなり、天下豈姓は風、名は后なるものあるか、是に於て占に依りて之を求む、風后を海隅に得たり、登して以て相と爲す、傳説、『莊子』に、傳説、之を得て以て武丁に相たり、天下を兼有し、東維に乘り、箕尾に騎り、而して列星に比す、就第、『漢書』に、鴻嘉元年、襄禹、老病を以て魏骨を乞ふ、上、優を加ふることに再三、乃ち聽許し、安車駟馬、黃金百斤を賜ふ、罷めて、第に就き列侯を以て期望に朝す、來朝、『新唐書』徐嵩が本傳に、帝(玄宗)嵩に委して相を擇ばしむ、嵩、體休を推薦す、休、位を同じうするに及んで、峻正相假さず、曲直を帝の前に授するに至る、嵩懼ちて魏骨を乞ふ、帝、之を慰めて曰く、朕未だ卿を厭はず、何を庸て去るや、嵩伏して曰く、臣、罪を宰相に待つ、爵位既に絶まる、帝に陛下未だ厭はず、以て身を乞ふを得、厭ふ如き有らば、臣、首領且つ保たず、又安んぞ自から迷ぐるを得ん、因つて流涕す、帝驚めに容を改めて曰く、卿が言切なり、朕未だ決する能はず、第に歸れ、夕に宮に罷あるべし、俄かに高力士を遣り、嵩に詔して曰く、朕將に爾を留めんとす、而かも君臣の體、始あり奉りあり、乃ち尙書右丞相を授け、休と皆罷む、不名、『漢書』に、高帝、元功を褒賞す、相國蕭何、邑戶既に倍す、又殊禮を蒙る、事を奏するに不名、殿に入るも不進と、留侯、『史記』に、留侯曰く、願は

近體詩 故太子太師徐公輓歌四首

くは人間の事を棄て、赤松子に從つて遊ばんと欲するのみ、乃ち群賢を擧げ、導引輕身すと、

【題義】太子太師徐國公蕭嵩は、天寶八年閏六月戊辰薨すと「舊唐書」に在り、輓歌は、柩を轆く人之を歌ふ、

【大意】徐公の功徳は羣英に冠絶す、天下を彌綸して大名有り、昔、軒皇は風后を登用し、又武丁は傅説の如き神人を用ふ、今帝と公との知遇は實に此の如くなり、第に就きて優詔を賜ふのみならず、朝に來りて謁見するに名を言はざるの優遇あり、留侯は常て辟穀して官を去る、何ぞ苦だ長生せざるや、

謀猷爲相國、翊贊奉乘輿。

謀猷相國と爲り、翊贊乘輿を奉ず、

劍履升前殿、貂蟬託後車。

劍履前殿に升り、貂蟬後車に託す、

齊侯疏土宇、漢室賴圖書。

齊侯土宇を疏ち、漢室圖書に賴る、

僻處留田宅、仍纔十頃餘。

僻處田宅を留む、仍纔に十頃の餘、

【注解】謀猷、「詞書」君陳に、爾有嘉謀嘉猷、則入告于爾后于内とあり、乘輿、「賈誼新書」に、天子車曰乘輿とあり、劍履、「史記」に、蕭何、劍履上殿を賜ふとあり、貂蟬、「後漢書」に、侍中常侍、黃金璫に蟬を附して文と爲し、貂尾を飾と爲すを加ふとあり、

り、高位の侍臣が冠の飾に貂尾と蟬刺を用ふるなり、齊侯、松谷曰く、春秋に齊國は青州に屬して、徐州に屬せず、而して唐の徐州彭城郡又是れ宋地、齊地にあらす、右丞、齊侯の字を用ふるは未詳と、疏土宇、「漢書」の黔布傳に、疏、辟而貴之とあり、疏は分つなり、圖書、「漢書」に、沛公、咸陽に至る、諸將皆爭うて金帛財物の府に走り、之を分つ、蕭何獨り先づ入りて秦の丞相御史の律令圖書を收め、之を藏す、沛公具さして天下の距塞、戶口の多少強弱の處、民の疾苦する所のものを知るは、何が秦の圖書を得たるを以てなり、田宅、「漢書」に、蕭何、田宅を買ふに、必ず窮弊の處に居る、家を爲すに垣屋を治めず、曰く後世をして賢ならしめば、吾が餘を飾とし、不費ならば、勳家の業ふ所と爲らざらんと、

【大意】嘉謀嘉猷の力ありて相國と爲り、大政を翊贊して乘輿を奉ず、劍履を帶し乍ら前殿に升るのみならず、貂蟬を以て後車に託せしむるの優遇あり、齊侯として土宇を疏たる位と爲る、漢室は圖書を第一に收めし蕭何の徳に由る、僻處に田宅を留むるに、千頃百頃有るにあらず、僅僅十頃餘あるのみ、

舊里趨庭日、新年置酒辰。

舊里庭に趨るの日、新年酒を置くの辰、

聞詩鸞渚客、獻賦鳳樓人。

詩を聞く鸞渚の客、賦を獻す鳳樓の人、

北首辭明主、東堂哭大臣。

北首明主を辭し、東堂大臣を哭す、

猶思御朱輅、不惜汗車茵。

猶ほ思ふ朱輅に御して、惜まず車茵を汗すを、

近體詩 故太子太師徐公輓歌四首

【注解】遊庭は老親を歸寧するなり、豐稔者、博成の詩に、豐稔游園池とあり、黃が子の華は時に工部侍郎たり、衛、主母を以て三品たり、黃、感然就榮せらるること十餘年、家財豐贍、衣冠之を榮とすと「書唐書」に在り、風樓、松谷は列仙傳を引きて之を證すれども、蕭史仙人とは今圖傳なし、北首、「禮記」に、死者北首、生者南首とあり、北首は陰なり、南首は陽なり、東堂、「北史」に、魏晉以來、親臨多向、至子成區、必于東堂哭之とあり、汗車茵、漢の四吉、丞相と爲る、馭吏、酒を嗜む、書て西吉に従つて出で、醉うて丞相が車上に臥す、西曹主吏、白して之を斥けんと欲す、吉が曰く、酒飽の過を以て人を斥けば、此の人復何の辱る所ぞ、西曹卿之を怒べ、此れ丞相が車茵を汗すに過ぎず、

【大意】維が舊里に老親を歸寧する日、又新年に酒を置きて會せし辰、維が詩を講ずるを聞けるは即ち徐公一門の人なり、又賦を獻せし人は徐公が如き風樓の人なり、然るに今日は早や北首して明主と永く辭し玉ふ、明主は公を悲しんで東堂に於て公を哭し玉ふ、猶ほ思ひ出すことは、公が朱轡に陪乘して、酒飽の結果車茵を汗せしを惜しむ玉はざりしことを、

久踐中台座終登上將壇

久しく踐む中台の座、終に登る上將の壇、

誰言斷車騎空憶盛衣冠

誰か言ふ車騎を斷つと、空しく憶ふ衣冠盛んなるを、

風日咸陽慘笳簫渭水寒

風日咸陽慘憺たり、笳簫渭水寒し、

無人當復關應罷太師官

人無くんば當に復ら關くべし、應に太師の官を罷むべし、

【注解】中台、天文に上中下の三台あり、地文に之を移す、上台を司命と爲し、壽を主る、中台を司中と爲し、宗室を主る、下台を司難と爲し、兵を主る、上將壇、嵩の本傳を案するに、開元十六年に、嵩、吐蕃を撃ちて功あり、嵩に中書門下三品を加ふ、十七年に中書令を加ふ、十四年に燕國侯景雲、中書令を罷む、後此の位を缺く、四年にして嵩之に居る、河西節度使を常帶して邊かに之を領す、加蓋、曹子建が失寶に與ふる書に、船前殿、故於前、節度使曹於後とあり、太師、太師と太傅、是を三公と爲す、道を論じ邦を經し、險關を要理す、其の人無きときは關く、「唐六典」に太師太傅太保は、道徳模範にあらざるときは其の位に居らず、其の人無きときは之を關くとあり、

【大意】久しく中台の座を踐み、終に進んで以て上將の壇に登る、公を知らざる者は其の軍事を斷つと言はん、其の文官としての衣冠盛んなるを憶へばなり、既にして此の人今日上天し去る、咸陽は風日慘憺たり、渭水は笳簫寒音多し、公に關ぐべき人無きときは、正に此の位を關くべし、太師の官を罷廢すとも可なり、

【餘論】輓歌四首、沈著にして哀痛、難禁の歌として、千古の規範を垂ると謂ふべし、「律體」傷悼類、杜甫の次に此の四首を收むべきものなり、之を收めずして、賈島や樂天を採る、余、盧谷の意を知るに苦しむ、

故西河郡杜太守輓歌 三首 故の西河郡杜太守の輓歌 三首

天上去西征雲中護北平 天上去つて西征し、雲中北平を護す、

近體詩 故西河郡杜太守輓歌三首

生擒白馬將、連破黑鵬城。

生擒す白馬の將、連破す黒鵬城。

忽見芻靈苦、徒聞竹使榮。

忽ち芻靈の苦を見、徒らに竹使の榮を聞く、

空留左氏傳、誰繼ト商名。

空しく左氏の傳を留む、誰かト商の名を繼がん、

【注解】雲中、郡名。蔚州榆林縣の東北四十里、北平、城名。幽州遼陽縣東南七十里、白馬將、『史記李廣傳』に、李廣、白馬將を射殺すとあり、黑鵬城、城としては不明なるも、李廣が傳に、廣、上郡を守りて、射鵰の匈奴を射殺すとあれば、城名と見ざる可なり、芻靈苦、芻靈善に作る本もあり、芻靈は、『禮記』に出づ、芻を束れて人馬を爲る、之を靈と謂ふは、神靈視すればなり、竹使、漢代、郡守に與ふるに銅虎符と竹使符との二種あり、竹簡五枚を以てす、長五寸、篆書を鑄刻す、第一より第五に至る、兵を發するとき、半は京師に留め、半は攜帶す、左氏傳、『晉書』に、杜預、功を立つるの後、從容無事、乃ち思を經綸に耽り、『春秋左氏傳集解』を爲る、又、衆家の諸節を參考し、之を條例と謂ふ、又、盟會圖を作る、ト商、『史記』に、ト商、半は子夏、孔子より少きこと四十四歳、孔子既に歿す、子夏、西河に居り教授す、魯の文侯の師と爲る、顧本に、漢の杜欽、半は子夏を以て注解す、杜欽はト商にあらず、顧の誤り知るべし、

【題義】河東道汾州西河郡の太守たる杜氏の輓歌なり、今日の陝西舊同州府の地、黃河の西に在り、黃河は即ち西貢雍州の西河、地、此に因つて名く、春秋の時、子夏、西河に居る、戰國の時、吳起、西河の守と爲る、顧本に河西に作る、河西は泛にして、西河は切なり、

【大意】天上即ち遠地に去つて西征の身と爲り、雲中郡や北平城を護る、或は白馬の大將を生擒し、或は黒鵬城を連破す、何ぞ圖らんや忽ち殉葬の芻靈の苦を見んとは、而して生前は竹使の光榮を荷ひしことを徒らに聞くのみ、空しく左氏傳を留むる杜預と爲る、今日のト商は太守其の人なりしも、死して後、君に繼ぐものは誰ぞや、

返葬金符守、同歸石窠棲。

返葬金符の守、同歸石窠の棲、

卷衣悲畫翟、持袂待鳴雞。

衣を卷いて畫翟を悲しみ、袂を持して鳴雞を待つ、

容衛都人慘、山川駟馬嘶。

容衛都人慘み、山川駟馬嘶く、

猶聞隴上客、相對哭征西。

猶は聞く隴上の客、相對して征西を哭す、

【注解】金符、銅虎符なり、石窠、左傳成公二年の條に、齊侯、保者を見て曰く、之を勉めよ、齊の師敗れたり、女子を辟けしむ、女子曰く、君免れたりや、曰く免れたり、曰く免れたり、曰く免れたり、曰く免れたり、曰く免れたり、若何にすべきや、と、乃ち奔る、齊侯以て禮ありと爲す、既にして之を問へば、許司徒の妻なり、之に石窠を與ふ、杜預曰く石窠は邑名、濟北盧縣の東にあり、棲は妻の誤寫なり、卷衣、棺前に故人が生前愛用したる衣を卷いて之を陳す、畫翟、翟の羽にて飾れる服、即ち祭服なり、侯伯の夫人、之を用ふ、持袂、袂は、ウチハシ、大扇なり、羽にて扇の形に作り、棺の二方に置く、或は木を以て之を爲る、待鳴雞、且を待つて以て棺即ち喪車を擧ぐるなり、容衛、其の義未詳なるも、儀衛の義ならんとの説を取る、征西、後漢の耿秉は、肅宗の時、征西將軍と爲り、涼州に於て卒す、匈奴、秉の卒を聞いて、舉國號哭すと、恩威並に施せしが故なり、

近體詩 故河西郡杜太守輓歌三首

【大意】金符を持して卒せし太守を返葬せんとし、同歸せる石室の如き真妻あり、而して其の棺を守るの儀正しく、衣を巻き靈を拜する者畫覆を見て悲しみ、或は髪を持して出棺の時刻樂鳴を待つ、其の儀衛を見て都人皆慘澹の色あり、葬を送るの厩馬は嘶いて山川に盈つ、猶ほ聞く階上即ち外敵として視る客も、其の卒を聞いて皆此の征西將軍を哭するを、

塗芻去國門。祕器出東園。

塗芻國門を去り、祕器東園を出づ、

太守留金印。夫人罷錦軒。

太守金印を留め、夫人錦軒を罷む、

旌旄轉衰木。簫鼓上寒原。

旌旄衰木に轉じ、簫鼓寒原に上る、

墳樹應西靡。長思魏闕恩。

墳樹應に西に靡くべし、長思す魏闕の恩、

【注釋】塗芻、「釋名」に、塗車は泥塗を以て車を爲るなり、芻蓋は車を束ねて人馬を爲るとあり、祕器、後漢の孔融奏す、上、素服形するもの再び、東園の祕器を歸ふに至る、韋懷太子曰く東園は魯の名、少府に屬し、主として凶器を作る、故に歸と書ふ、錦軒、「漢書西域傳」に、馮夫人、錦車持節とあり、服虔曰く錦を以て車に衣するなり、西靡、漢の東平思王、國に歸り京師を思ふ、後漢平、東平に葬むる、塚上の松柏皆西靡すと、魏闕、「淮南子」に、神遊魏闕之下とあり、闕は高大の貌、闕は王者門外の闕なり、

【大意】塗芻は今之を葬る爲めに國門を去らんとす、而して天子は之を禮遇する爲めに祕器は東園より出づ、太守が世に遺し留むるものは金印のみ、夫人は未亡人と爲るを以て總ての粉飾を去る、葬を送るの旌旄は衰木を轉回して行き、葬を悲しむ簫鼓は寒原の頭に上る、墳樹は應に西に向つて靡くべし、太守が志は死すとも魏闕即ち天子の恩は忘れざるなり、

【餘論】輓歌三首、共に起句、對法を以て成る、詩已に輓歌なり、別に奇句警句の要無し、唯莊句重句を以てすれば足る、三首を熟讀するに、莊重にして沈痛、徐公輓歌と同じく、後世追輓歌の準據と爲して可なるものなり、第三首和讀として句句一様と爲る、此の和讀法の詩は多く無くして希に有るものなり、詩も三首即ち奇數を以て作る、別に意義あるとも思へざるが、二首、四首、六首の偶數が普通なれば、後進の爲め記し置くものなり、

故南陽夫人樊氏輓歌 二首 故南陽夫人樊氏の輓歌 二首

錦衣餘翟翫。繡轂罷魚軒。

錦衣翟翫を餘し、繡轂魚軒を罷む、

淑女詩長在。夫人法尙存。

淑女詩長く在り、夫人法尙存す、

凝笳隨曉旆。行哭向秋原。

凝笳曉旆に隨ひ、行哭秋原に向ふ、

歸去將何見。誰能返戟門。

歸去將に何を見んとする、誰か能く戟門に返らん、

【注釋】曹叡、曹芳と同じ、「詩」に「曹芳以歸」とあり、曹は羽なり、曹は車の蓋ひなり、夫人は曹氏を以て車を飾ればなり、繡轂、美飾なる車の意味、魚軒、「左傳」に、杜預曰く、魚皮を以て飾と爲す、夫人の車なり、淑女詩、周の文王の妃、姫氏が作る詩、即ち繡轂の詩なり、夫人法、「世說新語」に、王敦南、少うして婦無し、自から孫書が女を求む、司空其の儀にして會ま禮儀無きを以て、其の意に任せて覆ち之を許す、既に嫌す、果して令妻淑徳あり、東海を生み、遂に王氏が母儀と爲る、王司徒、鍾氏が女を嫁とす、亦徳才女徳あり、孫書を飾婦と爲し、遂より相親重す、鍾貴を以て孫を嫁がす、孫亦鍾を以て鍾に下らず、東海の家内は、孫夫人の法に則り、家内は、鍾夫人の儀に範る、繡轂、李善曰く徐ろに塵を引く之を繡と謂ふ、蓋曰く其の節履履明すればなり、行哭、「禮記」に、内人皆行哭失聲とあり、戟門、鄭司農周禮注に、戟門以戟爲門とあり、唐制、官三品の人、始めて戟を立つ、戟は雙に同じ、屏なり、

【題義】南陽侯の夫人樊氏を輓弔する詩なり、列侯の妻、夫人を以て稱する所以、

【大意】錦衣と覆轂とは遺物として在り、繡轂魚軒は其の乗る人亡ければ罷む、而して淑女の詩として貞婦の詩は長く在り、其の上に夫人の法として貴むべき行は尙存す、詩や法は、此の世に長く留まるも、屍は凝旛の爲めに送られて曉旛に随つて葬處に向ふ、之を悲しみ哭する人は皆秋原に葬を送る、送葬者は各の歸去して何を見るや、逝者は再び戟門に返らざるべし、

石窳恩榮重、金吾車騎盛。
將朝每贈言入室還相敬。

石窳恩榮重く、金吾車騎盛んなり、
將に朝せんとし毎に言を贈る、室に入つて還相敬す、

疊鼓秋城動、懸旌寒日映。
不言長不歸、環佩猶將聽。

疊鼓秋城動き、懸旌寒日映す、
言はず長く歸らずと、環佩猶は將に聽かんとす、

【注釋】金吾、「後漢書」に、先武が劉秀として天下を御せざる時、長安に至り、執金吾の車騎盛んなるを見て、因つて嘆じて曰く、仕官せば當に執金吾と作るべしと、執金吾は漢代、宮門を警備する官、皇宮の警備總監と言ふべき官なり、將朝、「左傳」に、晉の三郤、伯宗を讒して之を殺す、初め伯宗、朝する毎に、其の妻、之を戒めて曰く、遂は主人を憤み、民は其の上を惡む、子は直言を好む、必ず難に及べんと、相敬、後漢の關公は南郡襄陽の人、峴山の南に居る、未だ曾て城府に入らず夫妻相敬すること實の如し、懸旌、晉の陸機の文に、懸旌江介榮、魚旛清とあり、環佩、「後漢書后紀」に、原有保阿之訓、動有環佩之響とあり、

【大意】妻は石窳として恩榮甚だ重し、夫は執金吾として車騎甚だ盛んなり、夫が朝せんとする曉は妻必ず戒言を贈る、夫が歸家して室に坐する夜は之を敬すること實の如くす、然るに今や其の人葬する時に際す、疊鼓は秋城に悲響動き、棺側に懸る旌は寒日の陰影に映す、長く歸らざるを知ると雖も、而かも不歸とは言はず、環佩の響を猶ほ聽かんとす、

【餘論】此の詩二首共に起句對法を以て成る、金符、石窳、金印、錦軒、寒原、秋原、錦衣、旌旄、懸旌、同意義のものを彼にも用ひ、此にも用ひたるが、此は是題目の上、已むを得ざる事に出づ、深く論するの要無し、後首特に五律として仄韻を使用す、仄韻の詩、五律としては、此の一首とす、言の字二字あるは病なりとす、

達奚侍郎夫人寇氏輓歌 二首

東帶將朝日、鳴環映牖辰。

能令諫明主、相勸識賢人。

遺挂空留壁、迴文日覆塵。

金蠶將畫柳、何處更知春。

【注解】鳴環、環の對李梅の詩に、曳前乎、掩覆、畫蠶、鳴環とあり、遺挂、晉の潘岳悼亡詩に、遺挂猶在壁とあり、呂延濟曰く、遺挂は平生玩用の物、尙壁に在るを謂ふ、迴文、前秦苻堅の時、寶鼎は秦州刺史と爲る、其の妻蘇惠、之と別れ、

思慕に勝へず、自から八百餘言の詩を作り、之を錦に織り、字字縱横反復して、轉回して讀むにあらすんば解せず、成りて後、之を寶に贈る、蘇、年十六にて寶に嫁す、寶甚だ之を敬す、而るに蘇性妬嫉に過ぐ、寶稍之を厭ひ、任地に赴む時、妾の趙陽臺なる者を備へて至る、是に於て蘇乃ち迴文の詩を贈る、寶大に感じ、陽臺を園中に造り返して、再び蘇を迎ふ、蘇時に年二十一、其の詩別の健伯教の『名媛詩歸』第八卷に在り、金蠶、蘇は平生蠶を養ふを以て其の務とす、死して後、器中に金蠶銀蠶等を納め以て之を葬むる、『南史』に、王元象なる者あり、下邳の太守と爲る、好んで塚地を就く、一日、塚上に一女子の立つを見る、近づいて視るときは亡し、乃ち人をして之を説かしむ、一棺尙全くあり、金蠶銅人百を以て數ふと、畫柳、非車を畫柳と曰ふ、棺材多く柳を以て作る故なり、

【大意】良人が東帯して將に參内せんとするの日、良人を送らん爲め彼此と動作し、乃ち鳴環が牖に

映するの辰なり、良人をして明主に諫言することを忘れざらしめ、且賢人を推薦することをも勸告する、今や遺挂は空しく壁に留まり、平生作る所の詩も塵に覆はる、今金蠶も畫柳も、共に九泉の下に埋む、九泉の下は春無し、何れの處にか其れ春を生ずるものぞや、

女史悲形管、夫人罷錦軒。

卜瑩占二室、行哭度千門。

秋日光能澹、寒川波自翻。

一朝成萬古、松柏暗平原。

【注解】形管、赤色の管の筆、女史即ち皇后に事ふる人、事を記するに用ふるなり、詩に、靜女其嬈、贈我彤管とあり、周代より之れ有るなり、二室、嵩山に大室と少室との二山あり、

【大意】夫人に事へたる所の女史は形管を見て悲しむ、夫人は今や亡し、乃ち錦軒の用無し、墳瑩を卜する處は嵩山を以てし、行哭する者は千門を度りて多し、秋日の光暉も爲めに澹く、寒川の水も波亦悲翻する、一朝にして萬古を隔つるの人と成る、墓上に種うる松柏は但平原を暗くするのみ、

【餘論】此の詩二首共に起句對法なり、前首の前四句は、生前の賢婦人たる事を敘し、後の四句は、

近體詩 達奚侍郎夫人寇氏輓歌 二首

夫人が葬に關しての事を敘す、後首は全く夫人が事を敘す、浮辭空響なきを以て惻惻人を動かす力あり、題目に良人の名を出す、是を以て詩中に其の事へし所以をも敘す、後進は、唐賢作る所の法、此の如きを知らざるべからず、但し此の詩の前首日二字、將二字あり、例の小疵を以て見るべきなり、

恭懿太子輓歌 五首

恭懿太子の輓歌 五首

何悟藏環早纔知拜壁年。

何ぞ悟らん環を藏すの早きを、纔に知る壁を拜するの年、

翀天王子去對日聖君憐。

天に翀して王子去り、日に對して聖君憐れむ、

樹轉宮猶出笳悲馬不前。

樹轉じて宮猶ほ出で、笳悲んで馬前まず、

雖蒙絕馳道京兆別開阡。

馳道を絶つことを蒙ると雖も、京兆別に阡を開く、

【注解】藏環、晉の羊祜、年五歳の時、乳母をして弄する所の金環を取らしむ、乳母曰く汝先に此の物無し、詰即ち鄭人李氏が東垣桑樹の中に詣り、探りて之を得たり、主人驚いて曰く此れ吾が亡兒が失ふ所の物なり、云何ぞ持ち去る、乳母具に之を言ふ、李氏悲恤し、時人、之を異とす、謂ふ李氏が子、則ち祜が前身なりと、拜壁、左傳に、楚の共王、子五人あり、嫡子無し、神に祈りて、五人の者を擇ばしむ、密かに壁を大室の庭に埋め、壁に當りて拜する者は此壁に主たらんと、康王は之を祈り、靈王は肘を加へ、子と子首は皆之に逐く、平王は胸にして抱かれて入り、再拜して皆往を願す、翀天、翀は沖に同じ、直ちに上るなり、周の靈王の太子晉が仙と爲りて上天せし事、第五卷に於て已に辨ぜり、對日、晉の明帝は幼にして聰智、元帝の變する所と爲る、年數歲、康前に皇

す、長安の使來るに屬ふ、出つて帝に問ふ、汝謂ふに日と長安と孰れか近きや、對へて曰く長安近し、人の日邊より來るを聞かず、居然として知るべきなり、明日、羣僚と宴し、又之に問ふ、對へて曰く日近し、元帝色を失うて曰く、何ぞ乃問者の言に異なるや、對へて曰く頭を擧げて日を見るも、長安を見ず、是に由つて益す之を奇とすと『晉書明帝紀』にあり、馳道、『漢書成帝紀』に、上嘗て急に太子を召す、龍樓門を出で、取て馳道を疾せず、西、直城門に至りて絶つを得、乃ち度り、還作室門に入る、上、之を避しとし、其の故を問ふ、狀を以て對ふ、上大に悦び、及ち命に著はし、太子をして馳道を絶つことを得しむ、馳道は天子所行の道なり、絶と曰ふは馳道を横切ることなり、別開阡、京兆の尹が別に墓道を開くなり、

【題義】『舊唐書』に、恭懿太子、名は昭、肅宗の第十二子、至德二載、興王に封せらる、上元元年六月薨す、年八歳なり、其の八月、皇太子を冊贈し、廟を恭懿と號す、

【大意】我は悟らざりき此の如くに早世し玉ふとは、纔に恰利の質であらせられしことを知るのみ、天に翀して王子は空しく去る、生質の恰は天子特に愛憐を加ふ、棺が宮樹を轉じて陵墳の地に向ふも、宮闕は猶高く出づ、笳聲は悲音を發するのみならず、馬足も亦前進せず、馳道を横斷するの待遇を蒙りながら、其の横斷する道は別に地下の道と爲るなり、

蘭殿新恩切 椒宮夕臨幽。
白雲隨鳳管 明月在龍樓。

蘭殿新恩切なり、椒宮夕臨幽なり、
白雲隨管に隨ひ、明月龍樓に在り、

近體詩 恭懿太子輓歌五首

人向青山哭天臨渭水愁
雞鳴常問膳今恨玉京留

人は青山に向つて哭し、天は渭水に臨んで愁ふ、
雞鳴常に膳を問ふ、今恨む玉京に留まることを、

【注解】 雞鳴、『漢武故事』に、帝以七月七日旦、生於綺繡殿とあり、椒宮、皇妃の所居、椒を以て室に飾り、惡氣を除くなり、夕陽、雞は多く平聲十二聲に使用する、今は去聲二十七聲に屬して哭の意義とす、左傳杜預の注に臨哭也とあり、問膳、周の文王の世子たりし時、玉季に朝し、王季の安否何如、膳食何如を問うて、而して後自ら膳せしなり、

【大意】 誕せられし時は蘭殿に在りて天子の新思も切なり、今や椒宮に於て之を哭する聲の幽なるを聞くのみ、白雲に乗じて以て鳳管を吹く者に随つて天上に向ふ、空しく明月の光のみ禁中の龍樓を照す、葬を送るの人は皆青山に向つて哭し、蒼天の色は渭水に臨んで愁ふる如し、雞鳴を卜して天に朝し、父王の安否を訪ひ玉ひしことも、今は空しく其の靈は玉京の中に留まる、

騎吹凌霜發旌旗夾路陳
愷容金節護册命玉符新
傅母悲香襪君家擁畫輪
射熊今夢帝秤象問何人

騎吹霜を凌いで發し、旌旗路を夾んで陳す、
愷容金節護し、册命玉符新なり、
傅母香襪を悲しみ、君家畫輪を擁す、
射熊今帝を夢む、秤象何人にか問はん、

【注解】 騎吹、騎吹は即ち鼓吹、愷容、一本に愷容に作る、余は禮を以て善しと思ふ、愷は愷歌、愷樂、愷風の如く、之を鼓歌に使用する恐らくは不可ならんと、葬を送るの禮符甚だ儀と見るべきなり、玉符、唐の六典、隨身魚符の制、左は二、右は一、太子は玉を以てし、親王は金を以てし、庶官は銅を以てし、佩符を以て飾と爲す、傅母、太子に乳を哺む人、雜は小兒の衣、畫輪、車駕に彩畫を以て輪數に畫くなり、至尊が之に寓樂すとあれば、父王親しく葬を送るなり、射熊、戰國の世、趙簡子疾む、五日夢に帝の所に之く、一熊あり、來り授かん、帝、命じて之を射らしむ、熊死す、又一熊あり來る、又射、又死す、帝喜ぶ甚し、我に二熊を賜ふと、『史記』に在り、秤象、『魏志』に、太祖の少子鄧王、五六歲、智、成人の若く、吳の孫權、巨象を致す、太祖、其の輕重を知らんと欲し、之を臺下に訪ふ、能く理する者無し、鄧王曰く、象を大船の上に置き、其の水痕の至る所を割み、物を稱りて之を載するときは、則ち較知るべし、太祖大に悅ぶ、

【大意】 葬樂を吹奏して霜曉に發車す、弔旌哀旗は翻翻として路を夾みて陳す、肅肅たる禮容は金節を守護して行く、太子としての禮遇の位牌は頗る新なり、傅母は生前に着用せられし衣服を見て悲しみ、父王は畫輪に乗るの感慨も深し、既にして葬り去らるるも又夢に帝所に來るあらん、而かも生きて象の輕重を帝に説く人は今や亡し、

蒼舒留帝寵子晉有仙才
五歲過人智三天使鶴催
心悲陽祿館目斷望思臺

蒼舒帝寵を留め、子晉仙才あり、
五歲人に過ぐるの智、三天鶴をして催さしむ、
心は悲し陽祿館、日は斷す望思臺、

若道長安近、何爲夏不來。若し長安近しと道はば、何爲れぞ夏に來らざる、

【注解】蒼舒、魏の鄧王の字なり、鄧王、名は仲、字は蒼舒、少にして聰察峻嚴、生れて五六歲、智慧及ぶ所、成人の智の若し、建安十三年、年十三疾病す、太祖親しく爲めに命を請ふ、亡するに及んで哀甚し、文帝、太祖を寬恤す、太祖曰く此れ我が不孝にして、汝曹の中なり、子晉、第一首の王子と同じ、三天、仙道に説く、清微天、禹餘天、大赤天是なり、天寶君治は玉清境、即ち清微天、其の氣始清なり、靈寶君治は上清境、即ち禹餘天、其の氣、元黃なり、神寶君治は太清境、即ち大赤天、其の氣元白なり、陽曜館、一本に回祿に作る、同じ、班婕妤が「傷悼賦」に、痛隔疎與析館兮、仍飄飄而離災とあり、婕妤は陽曜と析館との二館に於て子を生まみ、皆之を失ふなり、且斷、顧本に恩斷に作る、目を善とす、斷は斷送なり、望思臺、漢の武帝の子、戾太子卒す、武帝、思子宮を作り、望思臺と稱し、太子の魂の歸來を望むなり、

【大意】蒼舒は父たる帝の寵愛を留め、王子晉は早く仙と成る、年幼孩にして智は人に過ぎるも、如何にせん天上は早く此の聰慧の人を召す、太子を生みし後は陽曜館を見る毎に之を悲しみ、太子の父たる帝は望思臺に上る毎に泪目斷送する、長安近しと曾て言はれしが、眞に是近きときは、歸來すべき筈なるに、何の故に夏に歸り來らざるや、

西望昆池闊、東瞻下杜平。西望すれば昆池闊く、東瞻すれば下杜平かなり、
山朝豫章館、樹轉鳳凰城。山は朝なり豫章館、樹は轉す鳳凰城、

五校連旗色、千門疊鼓聲。五校連旗の色、千門疊鼓の聲、
金環如有驗、還向畫堂生。金環驗あるが如く、還畫堂に向つて生ず、

【注解】西望、魏の沈約の詩に、南瞻龍首觀、西望昆明池とあり、昆明、漢の武帝は、元狩四年、長安に昆明池を爲る、水戰を樂習せしむる爲なり、下杜、城の名、長安城の南方に當る、豫章館、武帝が昆明池中に設けし館、鳳凰城、前に已に辨べり、五校、漢代の軍制に、屯騎校尉、越騎校尉、步兵校尉、長水校尉、射擊校尉あり、皆北軍中候に屬す、所謂五校なり、畫堂、宮殿中、彩畫の室を謂ふ、

【大意】西の方に昆明池の闊きを望み、東の方に下杜城の平かなるを瞻る、山色は朝曉なるを知る、豫章館に當りて、樹林は轉回して鳳凰城なるを知る、五校尉が各の所屬の旌旗を連ねて翻る、城中の千萬戸には疊鼓の聲が起る、金環に靈驗あれば、再び還畫堂に向つて生來せらるべし、

【餘論】轉歌五首、五首皆起句對法を以て成る、八歳の人を弔する、事を使ふ已に至難、況んや太子たるに於てをや、然るに其の太子としての先例を使用し來り、縱橫轉旋、大筆力、小家數の到底及ぶ能はざる所なり、松谷曰く、五詩中羊祐の事凡そ二用、晉の明帝の事凡そ二用、王子晉の事凡そ三用、魏の鄧哀王の事、凡そ二用、右丞全く此を以て詩の病と爲さず、若し今人をして筆を下す爾爾せしめば、其の書卷に儉なるを警らざる者あらんか、余謂ふ書卷に富む者と雖も、此以上の書卷は恐らくは求むるを得べからず、況んや同一の事を二用三用するも、句法に於て調を異にす、四用も五用も余

は妨げ無しと思ふなり、第二首に於て夕臨と天臨と同字あるも、去聲と平聲との別あれば、此も亦妨げず、亦病と爲らず、第五首は暮後の威を鼓するもの、是も亦注意して讀むべきものなり、

王右丞集 卷九 終

王右丞集 卷十

近體詩 二十六首

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制

聖製蓬萊より興慶閣に向ひ、道中春を留む、雨中の春望の作を奉和す、應制。

渭水自縈秦塞曲、

黃山舊繞漢宮斜、

鑾輿迴出仙門柳、

閣道回看上苑花、

雲裏帝城雙鳳闕、

雨中春樹萬人家、

爲乘陽氣行時令、

【注解】渭水、前に辨ぜり、黃山、

宮名なり、漢の孝惠二年に起つ、『三

輔黃圖』に、黃山宮は興平縣の西三

十里に在り、鑾輿、天子の車乘、鑾

鈴を著ける、鑾は鑾の和鳴に象るな

り、陽氣、『後漢書郎顛傳』に、顛は

順帝の間に對へて曰ふ、春に方りて

東作し、徳の元を布き、陽氣開發し

て、萬物を榮辱す、王者は天に因り

て觀聽し、時氣を奉順す、宜しく務

近體詩 奉和聖製從蓬萊向興慶閣雨中春望之作應制

不是宸游重物華。是宸游物華を重んずるにあらず、

めて溫柔を崇び、其の行令に過ふべし。

【題義】玄宗皇帝が蓬萊宮より興慶閣に向ふとき、其の途中晚春雨中の風景を詠せる詩を示し、以て羣臣に和詩を作らしむ、右丞も乃ち旨を奉じて、此の詩を作るものなり、

【大意】渭水の流れば自から秦塞を築りて曲り、黃山の脈は舊くより漢宮を透りて斜なり、鑾輿は肅肅として迴かに仙門の柳際より出で、閑道は曲曲より上苑の花を回看する、雲裏の帝城は雙鳳闕が聳えて見え、雨中の春樹は萬人の家を装ふを認む、至尊は陽氣に乗じて以て時令を行ひ玉ふ、徒らに宸遊して物華を重んじ玉ふにはあらず、

【餘論】此の詩は八句畫く對法を以て作る、右丞が七律中神品に屬するものにして、古今均しく歎稱するものなり、一二の句、先づ形勢より起し、三四の句、蓬萊より興慶に向ふ道中留春の景を敘し、五六の句、蓬萊興慶を總承して、雨中の春望を敘し、七八の句、天子の遊は時令を行ふに在りて、物華を弄する爲めにあらずと結ぶ、章法嚴密、應制の體、宜しく此の如くなるべきなり、古來評家の言、一一之を擧ぐるときは、一紙二紙の盡す所にあらず、故に二三を出して止む、明の顧華玉曰く、題景を狀出して春容曲雅、用字深厚、工力を見ず、結之を正に歸す、襟度を見るに足る、黃爾調曰く、畫中に詩あり、詩中に畫あり、唯摩詰能く之を兼ぬ、故に應に擅絶なるべし、案するに玄宗が詩、春

中興慶高麗宴の五排あり、雨中春望の詩を見ず、送せしものと思ふ、惜しむべきなり、

大同殿生玉芝龍池上有慶雲百官共觀聖恩優賜宴

樂敢書即事

大同殿に玉芝を生じ、龍池の上に慶雲あり、百官共に觀る、聖恩優ち宴樂を賜ふ、敢て即事を書す

欲笑周文歌宴鎬、笑はんと欲す周文の宴鎬を歌ふを、
遙輕漢武樂橫汾、遙かに輕んず漢武の横汾を樂むを、
豈如玉殿生三秀、豈如かんや玉殿に三秀を生ずるに、
詎有銅池出五雲、詎ぞ銅池に五雲を出す有らんや、
陌上堯樽傾北斗、陌上の堯樽北斗を傾け、
樓前舜樂動南薰、樓前の舜樂南薰を動かす、
共懽天意同人意、共に懽ぶ天意の人意に同じきを、
萬歲千秋奉聖君、萬歲千秋聖君に奉せん、

近體詩 大同殿生玉芝龍池上有慶雲敢書即事

【注釋】宴鎬、宴會鎬京なり、鎬京は周の武王始めて之を營み京都と爲す、所謂西都と稱す、今の陝西省長安縣の西、周武と曰ふべきな周文と曰ふは、下句の漢武に對するが故なり、初唐の宋之問の詩にも、鎬飲周文樂、汾歌漢武才とあり、樓前、樓舟汾河なり、汾河は湖山西の晉陽山より出でて西南に流れ、州、靈州、絳州を経て黃河に入る、漢の武帝、河東に幸し、后土を祀り、帝京

を願して飲、汾河の中流にして羣臣と飲、武帝自ら秋風辭の七古を作る、三秀、楚辭に出づ、芝草を三秀と稱す、銅池、漢の宣帝の時、金芝九莖、銅池殿銅池中に産せしなり、五雲、五彩の雲、之を慶雲とも曰ふ、醴酒、醴酒即ち醴みし酒なり、初唐の杜審言の詩に、紫草隨步舞、舞樂隨行塵とあり、北平、楚辭に、授北平兮酌桂漿とあり、斗は玉爵、即ち玉の杯なり、南薰、舜帝の詩に、南風之薰兮、可以解吾民之愠兮とあり、

【題義】玄宗の天寶七載三月と八載六月とに大同殿に玉芝生じ、又興慶宮前の龍池に慶雲が上り、帝と羣臣と共に觀、且燕飲と音樂とを賜はる、右丞乃ち即事を詠せしなり、

【大意】詩に於て周の武王が鎬京に宴會せることを誇説するが、我は之を笑はんと欲す、又漢の武帝が汾河に於て燕樂せしことを世に傳ふるが、之をも輕視するなり、其れ等の事は今日玉殿に三秀を生ずる瑞氣に如かんや、之に加ふるに今龍池に五雲を出すが、昔は此の祥氣有ること無し、陌上に於て堯樽を開き玉杯を傾け、樓前に於ては舜樂が頻りに南薰を動かす、羣臣と共に懼む天子の意と諸人の意と同じきことを、是を以て聖君に對して萬歲千秋を三唱せんのみ、

【餘論】此の詩は、七八の句對せざるのみ、餘の六句は皆對す、屬可久曰く、宏麗亦雅、侈靡の氣象、一時君臣相悅の意を寫し出すなり、

敕賜百官櫻桃 敕して百官に櫻桃を賜ふ

芙蓉闕下會千官、芙蓉闕下千官を會す、

紫禁朱樓出上蘭、紫禁の朱樓上蘭を出づ、

總是寢園春薦後、總是寢園春薦後、

非關御苑鳥銜殘、關するにあらず御苑鳥銜み殘すに、

歸鞍競帶青絲籠、歸鞍競うて帶ぶ青絲籠、

中使頻頒赤玉盤、中使頻りに頒つ赤玉盤、

飽食不須愁內熱、飽まで食うて須ひず内熱を愁ふるを、

大官還有蔗漿寒、大官還つて蔗漿の寒さあり、

には寢園を以てす、寢園に園殿がある、秦以來、之を襲ふ、春、唐の李紳の『歲時記』に、四月一日、園内、櫻桃を寢園に薦む、乾つて百官に饋賜すとあり、晚春初夏の節、詩として必ずしも時節を嚴重に説く要なし、仲夏の月、天子、含桃を薦むと『月令』にある文を引いて、此の春の字を云する者は泥む、青絲籠、青色の籠を以て籠を結ぶなり、赤玉盤、後漢の明帝、月夜に羣臣と照園に宴す、太官、櫻桃を薦む、赤瑛を以て盤と爲す、月下に之を觀れば、盤と櫻桃と色を同じうす、羣臣皆笑つて云ふ是れ瓊盤なり、内熱、『本草』に櫻桃食多きも損無し、但虚熱を發するのみ、蔗漿、蔗の汁を取りて漿と爲し飲むなり、蔗は栝と同じ、甘蔗なり、

【題義】玄宗が敕命として百官に櫻桃を賜ふ、右丞時に文部郎中の官に在り、

近體詩 敕賜百官櫻桃

【注】芙蓉闕、開元二十年、芙蓉園を築く、紫禁、南宮が貴妃謀に收、紫禁宮に象とる、故に宮中を紫禁と曰ふ、朱樓、即ち櫻桃なり、『禮記』に之を含桃と謂ひ、『爾雅』に之を荆桃と謂ふ、實熟する時、深紅色なるもの、之を朱櫻と謂ひ、紫色にして皮裏に細黄點あるものを、之を紫櫻と謂ふ、上蘭、『三輔黃圖』に上林苑有上蘭園とあり、寢園、寢廟と園殿とあり、古は墓祭せず、祭る

【大意】天子、命あり、芙蓉閣下に千官を會燕せしむ、紫禁中に産する朱櫻は上蘭觀より出づ、纒かに是昨日翫園の祭に薦めしのみ、御苑に於て鳥の啼み残するものにあらず、退朝して歸る馬上の者は皆青絲籠を帶ぶ、中使は頻りに千官の間に赤玉盤を頒つ、飽食するも決して愁へず聊か内熱を發するを、大官には特に蕪漿の寒きを賜ふあり、

【餘論】此の詩も、七律中の神品に屬するもの、三四の句は虛字を以て接し、五六の句は實字を以て調し、七八之を結ぶ、起句に千官とあり、結句に大官とあり、黃培芳曰く、上の六句は遍く千官に及び、末二句は獨大官を優遇すと、或は然らん、黃又云ふ、後人此の種の題を作る、繁縟にあらざれば即ち纖俗、盛唐人の及ぶ可からざる所此に在り、余は杜工部の野人贈櫻桃の七律と其の巧力相均しと言はんと欲す、本集に崔興宗が此の題詠詩を附す、今録せず、

敕借岐王九成宮避暑應教

敕して岐王に九成宮を借して暑を避けしむ、應教

帝子遠辭丹鳳闕

帝子遠く辭す丹鳳闕、

天書遙借翠微宮

天書遙かに借す翠微宮、

【注釋】帝子、岐王なり、丹鳳闕、大明宮の南面五門あり、正南を丹鳳門と曰ふ、翠微宮、太宗の貞觀二十

隔窗雲霧生衣上

窗を隔てて雲霧衣上に生じ、

卷幔山泉入鏡中

幔を卷げば山泉鏡中に入る、

林下水聲喧語笑

林下の水聲語笑喧し、

巖間樹色隱房櫺

巖間の樹色房櫺を隠す、

仙家未必能勝此

仙家未だ必ずしも能く此に勝らず、

何事吹簫向碧空

何事ぞ簫を吹いて碧空に向ふ、

【題義】睿宗の子岐王、好學工書、雅文章の士を受す、開元十四年薨す、九成宮は隋の仁壽宮を改めしもの、岐王が此に在り、敕命に依りて此に避暑し、王教に應じて此の詩を賦せしなり、

【大意】岐王は遠く父天子の在す丹鳳闕を辭去し、天子の敕書に依りて翠微の宮、即ち九成宮を借用する、其の宮四面の景は如何、窗を隔てて生ずる雲霧は衣上に生ずるかと思ふ、幔を卷げば山泉が鏡の中に映じ入る、林下の水聲は語笑に喧しく、巖間の樹色は房櫺を隠して鬱たり、仙家は未だ必ずしも此に勝らすと思ふ、昔の太子は何事ぞ簫を吹いて仙家に向ひしぞや、

【餘論】此の詩、起句、對を以て作る、其の詩たる鮮潤清明、盛唐の氣象見るべし、蓋し四句に山泉とあり、五句に水聲とあり、妨げざるに似たるも、巧とは言ひ難し、余は是を七絶二首とせば更に佳

一年に翠微宮を造る、終南山に在り、然るに此の句の翠微宮は、終南の宮を指すにあらず、翠微に借りて立つ宮の意味なり、吹簫、周の靈王の太子晉は簫を吹いて上天し去る、

ならんと思ふ、

和買舍人早朝大明宮之作

買舍人が早朝大明宮の作に和す

絳幘雞人送曉籌

絳幘の雞人が曉籌を送る、

尙衣方進翠雲裘

尙衣方に進む翠雲の裘、

九天闔闔開宮殿

九天の闔闔宮殿を開き、

萬國衣冠拜冕旒

萬國の衣冠冕旒を拜す、

日色纔臨仙掌動

日色纔かに仙掌に臨んで動き、

香煙欲傍袞龍浮

香煙は袞龍に傍うて浮ばんと欲す、

朝罷須裁五色詔

朝罷んで須らく裁すべし五色の詔を、

珮聲歸向鳳池頭

珮聲は歸りて鳳池の頭に向ふ、

【注】絳幘、絳色の幘帽、漢官儀に、宮中の典臺は絳に幘を着るを得ず、夜漏未だ明けず、三刻鐘鳴、衛士、朱雀門外に候し、絳幘を着けて奉ら鐘鳴を傳ふ、華人「周禮」に出づ、尙衣、冕服を掌理する女官の名、翠雲裘、天子の著衣なり、九天、「呂氏春秋」に、鈞天と蒼天と颺天と元天と闔天と頽天と朱天と炎天と陽天とを曰ふ、仙掌、「三輔黃圖」に、神明臺は武帝造る、仙人を祭る所、上に承露盤あり、朝仙人あり、掌を許五色詔、天子の詔書は、五色の紙を

べ、朝盤玉玉を捧げ、以て雲衣の露を承く、露を以て玉屑に和して之を服し、以て仙道を求む、五色紙を、鳳池頭、中書省は鳳凰池頭に在るなり、

【題義】 舍人買至が早朝大明宮の詩を賦し、倭友に其の和詩を求む、右丞乃ち此の詩を賦し、其の意を和す、

【大意】 絳幘を着けたる雞人が曉刻の籌を報送す、是の時早や宮中には尙衣が天子の着用する翠雲裘を進む、既にして九天の闔闔門開けば宮殿も從つて開く、萬國の使臣は各の衣冠を正して天子に拜謁する、曉日の光暉は始めて尤も高き邊の仙掌盤の上に動き、而して宮殿内の香煙は袞龍の衣に傍うて浮ばんと欲する時なり、舍人は朝謁して退き五色の詔書を裁せざるべからず、乃ち佩玉の聲鏘鏘として歸る處は鳳池頭の中書省の中たるなり、

【餘論】 買至が詩成り、和する者三人、右丞と杜甫と岑參となり、共に巧力相敵して、軒輊すべき無し、明の顧華玉は、右丞と老杜と頡頏し、而して岑參、而して買至と爲し、此の詩を評して、氣象闊大、音律雄渾、句法典重、用字新清、備はらざる所なし、而して全まならざるは衣服の字太だ多きのみ、趙松谷は岑參を第一とし、右丞を第二とし、老杜と買至とを最下とす、清の紀曉嵐曰く四公皆盛唐の巨手、同時唱和、世に艶稱する所、然れども此の種の題目、性情風旨の言ふべき無し、仍は是初唐應制の體、但色較鮮明、氣較生動、名能く本質を失はざるのみ、後人拙して公案と爲し、評議紛紛、殊に必とすべからず、右丞の詩衣字多きのみならず、色亦二字あり、日色を日影に作りし本もあり、而かも尙衣、衣冠を如何、要するに紀評を以て正と爲すべし、紛紜評するの要無し、

和太常韋主簿五郎温湯寓目

太常韋主簿五郎が温湯寓目に和す

漢主離宮接露臺

漢主の離宮露臺に接し、

秦川一半夕陽開

秦川一半夕陽開く、

青山盡是朱旗遶

青山盡く是朱旗遶り、

碧澗翻從玉殿來

碧澗翻つて玉殿より來る、

新豐樹裏行人度

新豐樹裏行人度り、

小苑城邊獵騎回

小苑城邊獵騎回る、

聞道甘泉能獻賦

聞道らく甘泉能く賦を獻すと、

懸知獨有子雲才

懸かに知る獨り子雲が才有ることを、

【注解】離宮、「三輔黃圖」に、漢宮天子出遊之宮也とあり、露臺、「漢書文帝紀」に、帝嘗て露臺を作らんと欲し、匠を召し之を計る、直百金と、上が曰く百金は中人十家の産なり、昔、先帝の宮室を奉じ、常に之を産めんことを恐る、何ぞ臺を以て爲ん、師古曰く、今、新豐縣の南觀山の頂、露臺あり、極めて高顯と爲す、猶ほ文帝臺を作らんと欲する所の處有り、朱旗、「東京賦」に高麗朱旗而建大號とあり、碧澗、「南史」朱旗而建大號とあり、碧澗、「南史」朱旗而建大號とあり、碧澗、「南史」朱旗而建大號とあり、

【題義】太常主簿の官を奉ずる韋五郎が温湯寓目なる詩を示さるるに依つて、乃ち此の和詩を作る、温湯は驪山の下に在り、玄宗此に温湯宮を作り、後華清宮と改む、宮を繞りて百司公卿の邸第を置く

【大意】

漢主が遺跡たる離宮は露臺に接續せり、秦川は歴歷として一半は夕陽に開明なり、四面の青山は盡く朱旗を以て繞らし、玉殿は碧澗の中に立てるを以て、碧澗は翻つて玉殿の中より來るかど疑ふ、新豐街は樹際より行人が度るを見、小苑城邊には夕陽に獵騎の回るを見る、聞道らく甘泉宮に侍して曾て賦を獻せし楊子雲が有りしことを、今日は知る子雲の才を有する者は五郎其人であるなり、

【餘論】此の詩は各種の選本取らざるもの無し、諷意を以て作りしものと爲す説と、但寓目を賦せしのみなりと爲す兩説あり、明の楊升菴は諷意ありと爲して曰く、唐、天寶に至り、宮室盛んなり、秦川八百里、而して夕陽一半に開く、則ち四百里の内、皆離宮なり、此の言、肆にして隱なりと謂ふべし、奢麗此の若し、猶ほ漢文惜露臺を以て之に比す、反して諷すと謂ふ可し、末句、韋郎、子雲に倣うて賦を獻せんとす、則ち其の託諷知るべし、之を言ふ罪無し、之を聞いて戒む可し、楊雄の旨を得たる者、其れ王維か、趙松谷曰く、詩、寓目を以て命題す、則ち前六句、皆即ち目中に見る所にして言ふなり、漢主の句、其の所見の宮室の富を紀し、而して其の地に及び、秦川の句、其の所見の風景の美、而して其の時を兼ねて紀す、青山碧澗の句、乃ち目を近きに寓し、而して其の所見此の若きを言ひ、新豐小苑の句、乃ち目を遠きに寓し、而して其の所見又此の如きを詠じ、末則ち美を韋郎に歸し以て屬和の意を見す、詩の大旨、爾爾に過ぎず、温湯接露臺、本是驪山の實境、其の漢主と曰ふは、

近體詩 和太常韋主簿五郎温湯寓目

漢武會て此に於て堂宇を修飾するを以て、故に遂に漢主離宮を以て言を爲す、何ぞ嘗て反諷の意あらんや、夕陽未だ落ちず、或は雲霞の覆ふ所と爲る、其の餘輝及ぶ所、往往半は有り、半は無し、今高きに登り遠きを望む、時一に之に遇ふ、楊氏何の創見ありて、而して四百里の内皆離宮と謂ふや、秦皇の淫侈を以てしても、史傳に記する所、宮室の廣さ、三百餘里、唐復之に過ぐ、則ち淫侈又秦皇に駕して上る、果して何の書、何の傳にして此の言を爲すや、甘泉獻賦、唐人習用、此を執つて諷諫と言ふ、尤も迂誕に屬す、古人を經ふるものか、余も松谷の説に賛し、升菴や黃家鼎の説は排斥するものなり、明の謝茂秦は度と賦と同觀なれば、詩家の正法にあらずと言ふは右丞の病に當る、鍾伯敬が一半夕陽開を、不三會深厚、不三會渾雅と言ふは、狂人の癡語、一笑を發すべし、培芳の此種都是盛唐正軌との評言は、切當と謂ふ可し、

苑舍人能書梵字兼達梵音皆曲盡其妙戲爲之贈

苑舍人能く梵字を書し、兼て梵音に達す、皆其の妙を曲盡す、戲れに之が爲に贈る

名儒待詔滿公車、名儒詔を待ちて公車に滿つ、

【注解】名儒、後漢の謝詡は、春

才子爲郎典石渠、才子郎と爲つて石渠に典す、

蓮花法藏心懸悟、蓮花法藏心懸悟し、

貝葉經文手自書、貝葉の經文手自ら書す、

楚辭共許勝楊馬、楚辭共に許す楊馬に勝ることを、

梵字何人辨魯魚、梵字何人が魯魚を辨せん、

故舊相望在三事、故舊相望んで三事に在り、

願君莫厭承明廬、願はくは君承明廬を厭ふこと莫れ、

を以て名けしあり、法藏、佛典を藏する庫を法藏と稱す、心懸悟、懸悟、佛語として成語なり、早くから悟り居る意味なり、貝葉、貝多羅樹皮を削りて紙の如く字を書し、長枚し絲にて綴り讀誦に便ならしむ、左より横書して右行する、嘗て聖書のもの無し、楊馬、楊雄と司馬相如なり、魯魚、『抱朴子』に、詠曰、書三寫、魚成龍書、虛爲虎とあり、三事、前の懸燈の下に佛ぜり、承明廬、漢の殿助は會稽の太守と爲る、數年、問問せず、武帝、書を賜うて曰く、君、承明の廬を厭ひ、侍從の事に勞するか、承明廬は石渠閣外に在り、

【題義】姓は苑、名は威なる人、中書舍人の官に居る、梵字を書き、梵音に達するが爲め、右丞戲れに此の詩を贈る、

近體詩 苑舍人能書梵字兼達梵音皆曲盡其妙戲爲之贈

秋に明、世の名儒と爲る、公車、『漢書東方朔傳』に、朝朝車上書、文辭不遜、高自稱譽、上復之、令待詔公車とあり、公車は公車門、州牧が賢良方正、各一人を舉げ、公車に詣で進むるなり、石渠、『三輔黃圖』に、石渠閣は唐何造る、其の下、碧石、渠を爲り以て水を導く、今の御溝の若し、因つて閣名と爲す、秦の圖書を此に收め藏す、蓮花、印度は蓮花を食ぶ、佛も蓮花に坐し、細も蓮花

【大意】名儒と稱せらるる人は待詔して公車に滿つ、才子と喚ばるる人は郎官と爲つて石渠閣に典す、其の郎官たる君は蓮花法藏の梵音を心に懸悟し、又貝葉經文の梵字を手自ら書す、君が梵辭に達することは古の揚馬にも勝る、然るに梵字は他人の多く解せざるもの、君に魯魚の誤あるも辨する人は無し、故舊の君に望む所は要するに三事に在るのみ、願ふ君の承明廬を去りて山中に入らざることを、

【餘論】此の詩の作法亦一體なり、前半は拗體を以て成り、後半は正體を以て成る、唐賢往往之あり、而して戲の意味は特に第六句に在り、本集に苑成の答詩を附す、下の如し、蓮花の梵字本天よりす、華省の仙郎早く禪を悟る、三點伊を成して猶ほ想あり、一觀幻の如く自ら筌を忘る、文を爲り已に變ず當時の體、用に入りて還つて推す閒氣の賢、應に同じかるべし羅漢の名欲なきに、故に馮唐と作りて歳年を老ゆ、

重酬苑郎中 井序 重ねて苑郎中に酬ゆ 井に序

頃輒奉贈忽枉見訓、絳末云、且久不遷、因而嘲及詩落句云、應同羅漢無名欲、故作馮唐老歲年、亦解嘲之類也。

頃輒奉贈す、忽ち酬い見るを枉ぐ、絳末に云ふ、且久しく遷らず、因つて嘲り及ぶと、詩の

落句に云ふ、應に羅漢の名欲なきに同じかるべし、故に馮唐と作りて歳年を老ゆと、亦解嘲の類なり、

何幸含香奉至尊、何の幸ぞ香を含んで至尊に奉ずる、
 多慚未報主人恩、多く慚づ未だ主人の恩に報いざるを、
 草木豈能酬雨露、草木豈能く雨露に酬いん、
 榮枯安敢問乾坤、榮枯安んぞ敢て乾坤に問はん、
 僊郎有意憐同舍、僊郎意あり同舍を憐み、
 丞相無私斷掃門、丞相私無く掃門を斷つ、
 楊子解嘲徒自遣、楊子解嘲徒らに自ら遣る、
 馮唐已老復何論、馮唐已に老ゆ復何ぞ論せん、

是に於て口に含香を含む、其の氣息芬芳たればなり、掃門、史記に、魏勃、少時、齊の相曹參に見ゆるを求めんと欲す、家貧にして、以て自ら通ずる無し、乃ち嘗て綱り早夜、齊の相の舍人の門外を掃ふ、舍人之を怪しみ、竊かに之を伺ふ、勃を得たり、勃曰く、相君に見えんと願ふも出なし、故に子が爲めに掃ひ、以て見んことを求む、是に於て舍人、勃を曹參に見えしむ、因つて以て舍人と爲す、解嘲、漢の真帝の時、董賢、事を用ふ、之に阿附する者、或は家あり起り、二千石に至る、唯は太史を草し、以て自ら守り猶如たり、人、雄を嘲るに、支術ほ白きを以てす、雄、之を解きて解嘲を作る、苑を以て掃門に比するなり、

近體詩 重酬苑郎中井序

【注解】羅漢、阿羅漢の略、小乘の悟を究めたる位の名、梵名阿羅漢、譯して殺賊、不生等の名あり、煩惱を殺して、涅槃に入り、復此の世に生ぜざるの義なり、名欲、名利と欲念、馮唐、史記に、漢の馮唐は、孝を以て著はる、中郎と爲つて文帝に事ふ、更に車騎都尉と爲る、景帝立つ、唐を以て楚相と爲し、免す、武帝、賢良を求む、馮唐を舉ぐ、唐時に年九十餘、復官と爲る能はず、含香、尚書郎は常に奏事對答の役なり、

【大意】頃者一詩を奉贈せしに、忽ち和詩を賜はる、和詩の中に一官久しく遷らず、故に自ら嘲ける、且自分は羅漢と同じく煩惱全く無く、是の故に古の馮唐の如く徒らに歳年を老ゆと言へるが、是亦楊雄が解嘲を作ると類を同じうするものなり、君は何の幸ぞや香を含んで至尊に咫尺する、多くの官人は主人即ち天子の恩に報せざることを慚ちとす、草木は雨露有るが爲めに生毓するも、草木は雨露に酬ゆる無し、草木の榮と爲り枯と爲るも、其の理を乾坤に問ふの要無し、僊郎は意あるが爲めに同舍の我に酬詩を贈らる、丞相は私無きが故に掃門の私事は謝断する、楊雄は解嘲の賦を作りて徒らに自ら慰みを遣る、僕は昔の馮唐の如く已に老ゆ、復何の論かあらん、

【餘論】此の詩は揚體を以て作る、苑が原作揚體なればなり、已に酬詩なり、是の故に多く苑を慰安する語を以てし、最後に自己を敘す、人に酬ゆる詩宜しく此の如くなるべきなり、顧可久曰く中間意緒轉摺太だ多し、一篇の文字數百言を約略して、五十六字中に盡く、此等の詩、最も高品なり、温雅悠長、

酬郭給事

郭給事に酬ゆ

洞門高閣霽餘暉

洞門高閣餘暉霽たり、

【注解】洞門、漢書重泉傳に、重

桃李陰陰柳絮飛

桃李陰陰柳絮飛ぶ、

禁裏疎鐘官舍晚

禁裏の疎鐘官舎の晩、

省中啼鳥吏人稀

省中の啼鳥吏人稀なり、もする無し、

晨搖玉佩趨金殿

晨に玉佩を搖かして金殿に趨り、

夕奉天書拜瑣闈

夕に天書を奉じて瑣闈に拜す、

強欲從君無那老

強ひて君に従はんと欲するも老を那と

將因臥病解朝衣

將に臥病に因つて朝衣を解かんとす、

黃門郎は黃門令に屬す、日暮入りて青瑣門に對して拜す、名けて夕郎と曰ふ、解朝衣、晉の裴協の時、抽着解朝衣とあり、

【大意】洞門の高閣は餘暉に映じて霽たり、桃李の陰陰に當つて柳絮が盛んに飛ぶ、禁裏内より出づる疎鐘は正に官舎の晩を報す、省中に啾啾と鳥が啼く、吏人去つて稀なればなり、君は毎晨に玉佩を搖かして金殿に拜趨し、毎夕天書を奉じて瑣闈を守護す、僕も強ひて君に従つて勤勉せんと欲するも老朽を奈ともすること無し、況んや臥病の身、官服を罷めんと欲するなり、

【餘論】此の詩は前半黃魯の景を敘し、而して五六の二句は給事が精勤の事を敘し、七八、自身の事を敘す、作意は明白なりとするも、晚、晨、夕の字を押し、律としては頗る嚴ならざるの感あり、晚

の字「唐詩正音」に曉に作る、曉としても下の晨に支障あり、漁洋の「唐賢三昧集」之を收むと雖も、余は右丞が詩の上乗と爲さざるなり、

既蒙宥罪。旋復拜官。伏感聖恩。竊書鄙意。兼奉簡新。除使君等諸公。

既に宥罪を蒙り、旋つて復官に拜せらる、伏して聖恩に感じ、竊かに鄙意を書し、兼ねて新除の使君等諸公に奉簡す

忽蒙漢詔還冠冕。始覺殷王解網羅。日比皇明猶自暗。天齊聖壽未云多。花迎喜氣皆知笑。鳥識歡心亦解歌。

【注解】漢詔は天詔と同じ。殷王、殷の湯王なり、解網羅、史記に、湯出でて、野に網を張る四面なるを見、説して曰く天下四方より皆吾が網に入れ、湯曰く唯盡くせり、乃ち命じて其の三面を去らしむ、説して曰く左せんと欲せば左せよ、右せんと欲せば右せよ、命を用ひずんば乃ち吾が網に入れ、諸侯、之を聞きて

聞道百城新佩印。還來雙闕共鳴珂。

聞道らく百城新に印を佩ぶと、還來りて雙闕に共に珂を鳴らす、

曰く珂の響きなり、禽獸に及ぶと、

【題義】本傳を案するに右丞累に給事中に遷る、安祿山反す、賊の得る所と爲る、祿山素其の才を知る、迎へて洛陽に置き、迫つて給事中と爲す、祿山大に凝碧池に宴す、梨園の樂人を召し合樂す、右丞悲み甚し、詩を賦し志を言ふ、賊平定し皆獄に下る、或るひと右丞の詩を以て行在に聞す、肅宗亦之を憐み、下して太子中允に遷す、宥罪と謂ひ、拜官と謂ひ、感聖恩と謂ふ、皆其の事なり、
【大意】忽然と漢詔を蒙りて冠冕に還る、始めて覺る湯王が網を解きし意を、天日の皇明なるも主上の皇明なるに比すれば猶ほ自から暗く、天壽は廣長なるも、主上の廣長なるに比すれば多しと云はず、花は喜氣を迎へて皆笑ふことを知る、鳥も人の歡心を識りて嬉しく歌ふ、要に聞く我一人ならず、百城の羣守も新に佩印すと、各のと共に雙闕に還來して共に玉珂を鳴らさん、
【餘論】此の詩は起句對法を以て成る、右丞としては死活の二道に彷徨する時、恩命を蒙りて死を免るのみならず、太子中允の官と爲る、良に權天喜地、察すべきものあり、佛を知らざる詩人學者、此の點を以て右丞を議す、我が應戶皇子が、崇峻天皇の事ありしを以て、人に議せらるると殆んど一致す、應戶も已むを得ず、右丞も已むを得ざるの勢に値ひたればなり、右丞の非、右丞自ら知る、

是を以て身を處する整潔、終身非道の事を爲さず、小罪償うて餘り有り、右丞の心事、其の當時、明かに知る者あり、後世の批議、右丞に於て何か有らん、蓋し此の詩は喜を記するに止まる、右丞集中最下の部に屬す、

酌酒與裴迪

酒を酌んで裴迪に與ふ

酌酒與君自寬

酒を酌んで君に與ふ君自ら寬うせよ、

人情翻覆似波瀾

人情翻覆波瀾に似たり、

白首相知猶按劍

白首の相知も猶劍を按じ、

朱門先達笑彈冠

朱門の先達彈冠を笑ふ、

草色全經細雨濕

草色全く細雨を経て濕ひ、

花枝欲動春風寒

花枝動かんと欲して春風寒し、

世事浮雲何足問

世事浮雲何ぞ問ふに足らん、

不如高臥且加餐

如かず高臥して且餐を加へんには、

【注解】酌酒、齊の臨照の詩、酌酒以自寬とあり、波瀾、晉の陸機の詩、翻覆若波瀾とあり、先達、齊非子說林篇に、管仲、鮑叔、相謂つて曰く齊國の諸公子、其れ稱く可き者は公子糾にあらざれば、則ち小白なり、子と各の一人に事へん、先達するものは秋めん、彈冠、漢の王吉と貢禹は友たり、世に稱す王陽在位、貢禹彈冠、其の取舍同じきを言ふなり、

【大意】酒を酌んで一杯君に與ふ、君心を寛く持ち玉へ、世の人情は冷と爲り炎と爲り翻覆極まり無く波瀾と同じ、黒髪の時より白髪の時まで交際せる者も、何か意見を異にする時は劍を按じて或は害を加へんとす、而して朱門の先達は後進を誘導するのが道であるに、反つて彈冠する者を笑ふに至る、草の色は全く細雨を経て濕ひ、花の枝は開かんと欲するも春寒寒うして猶は開かず、世事は總て浮雲、固定せしもの無し、是も非も問ふの要なし、如かず高臥して且加餐せんには、

【餘論】此の詩は仄で起し、平で結ぶ、平仄互換の法とす、明の王弼州曰く摩詰の七言律、應制、早朝、諸篇より外、往往常調に拘らず、酌酒與君の詩、四聯皆反法を用ふ、此は是初盛唐に無き所、尤も學ぶべからず、顧華玉曰く此の篇、朋友反覆誼誼を爲す者あるに似たり、或は小人譏沮の類、故に此を爲り以て之を解く、趙松谷曰く草色一聯、即ち是即景託諭、衆卉を以てして而も時雨の滋を邀へ、奇英を以てして而も春寒の病を受く、即ち植物の類、且其の平を得ざるものあり、況んや世事は浮雲變幻す、又安んぞ問ふに足らんや、之を六義に擬すれば、比とすべく、興とすべし、黃培芳は一唐賢三昧集に於て此の詩を評し、七律中上乘のものとなす、

朝川別業

朝川の別業

不到東山向一年。東山に到らざること一年に向んとす、

歸來纔及種春田。歸來纔かに春田を種うるに及ぶ、

雨中草色綠堪染。雨中の草色綠染むるに堪へたり、

水上桃花紅欲然。水上の桃花紅然えんと欲す、

優妻比丘經論學。優妻比丘經論の學、

儂僕丈人鄉里賢。儂僕丈人鄉里の賢、

披衣倒屣且相見。衣を披き屣を倒にして且相見し、

相歡語笑衡門前。相歡びて語笑す衡門の前、

出でて、儂僕の者の綱を承くる、猶ほ之を扱ふがごときを見る、仲尼曰く、子は巧なるかな、置あるか、曰ふ我に道あるなり、五六
月、九二を累れて而して塵ちざれば、則ち失ふもの鎖條、三を累れて而して塵ちざれば、則ち失ふもの十に一、五を累れて而して塵
ちざれば、猶ほ之を扱ふがごときなり、吾の身を處くや、振棒の刺めるが若く、吾の臂を執るや、楠木の枝のごとし、天地の大、萬
物の多と雖も、而かも唯、綱翼を之れ知る、吾、反せず倒せず、萬物を以て綱の翼に品へず、何を爲すとして得ざらんや、孔子曰く
て、弟子に問つて曰く、志を用ふること分れざれば、乃ち神に蔽るとば、其れ儂僕丈人の謂ひかと、倒屣、魏の王粲、長安に徙る、
左中郎將蔡邕、見て之を奇とす、時に愚、才學顯著、朝廷に貴重せらる、常に車騎、巷に集ち、賓客、座に盈つ、樂が門に在りと聞
きて、屣を倒にして之を知ふ、

【注】優妻比丘、善海承尼の弟
子に優妻、頗頗迦婆あり、廣譯して木
瓜盛と言ふ、曾前に癡あり、木瓜の
如きが故なり、比丘は譯して乞士と
言ふ、食を人に乞ひ、以て道を修す
る人なり、顯可久曰く、在家謂優
妻、出家謂比丘、顯は優妻を親
認せしなり、經論學、經律論を三藏
と稱して佛徒の學ぶべきものとす、
此の句は眞經部と論部との學を爲す
意味、儂僕丈人、「莊子達生篇」の中
に曰ふ、仲尼、楚に過き、林中より

【題義】 細川の別業に歸りて、自分の志す所を傲するなり、

【大意】 東山の細川別業に到らざること殆ど一年なり、今日歸來して纔かに春田を耕す時に及ぶ、雨
中の草色は綠色染むるに堪へたるが如く、水上塘の桃花は紅色然えんと欲するが如し、偶々訪問せら
るる者は、優妻比丘の如き僧と、儂僕丈人の如き賢とのみ、彼は經論の學者なり、此は郷里の賢者な
り、其の訪問を受けたときは、衣を披き屣を倒にして迎へて以て相見す、共に相歡び相語笑して衡
門の前に立つ、

【餘論】 此の詩の作法は多く其の例を見ず、余は前半と後半と切斷して、七絶と爲し、乃ち佳なるを
覺ゆ、蓋し前半は佳なり、後半は佳ならず、優妻に對するに儂僕を以てす、音律に精通する右丞とし
ては、亦是儂僕、即ち背曲の類ならずや、

早秋山中作

早秋山中の作

無才不敢累明時。無才敢て明時を累はさず、

思向東溪守故籬。思ふ東溪に向つて故籬を守らんことを、

不厭尙平婚嫁早。厭はず尙平婚嫁の早きを、

近體詩 早秋山中作

【注】尙平、「高士傳」に尙長、
字は子平、河内朝歌の人、隱居して
仕へず、建武中に、男女嫁娶既に畢
る、是に於て遂に北海の高麗と俱に
五嶽名山に遊び、竟に終はる所を如

卻嫌陶令去官遲、
草堂蛩響臨秋急、
山裏蟬聲薄暮悲、
寂寞柴門人不道、
空牀獨與白雲期。

卻つて嫌ふ陶令官を去るの遅きを、
草堂の蛩響秋に臨んで急に、
山裏の蟬聲暮に薄つて悲しむ、
寂寞たる柴門人知らず、
空牀獨り白雲と期す、

らず、陶令、晉の陶潛明、州の祭酒と爲る、東嶽に堪へず、即日印綬を解きて去る、後、彭澤令と爲る、郡、晉野を造る、東帶して之を見ざるを得ず、歎じて曰く、我輩五斗米の爲めに、腰を郷里の小兒に折らんや、即日辭して去る、

【大意】無才我が如き者官に在るは卻つて明時を累するものなり、乃ち思ふ東溪に向つて故籬を守るの好きに如かずと、尙平が婚嫁の人事を早く爲したるは贊成するが、陶令が官を去るの遅きは不贊成なり、草堂を繞りて鳴く蛩の響は新秋に臨んで急、山裏に飛散して鳴く蟬の聲は日暮に薄つて悲し、寂寞たる我が柴門は何人も訪ふ者無し、空牀に坐して唯白雲の飛來するあるを期するのみ、
【餘論】此の詩は、早秋山居の趣を敘し、平平、右丞集中最下に屬す、不敢、不厭、不到、一律の中、此の如きは法として有るべからず、

積雨朝川莊作

積雨朝川莊の作

積雨空林煙火遲、
蒸藜炊黍餉東菑、
漠漠水田飛白鷺、
陰陰夏木囀黃鸝、
山中習靜觀朝槿、
松下清齋折露葵、
野老與人爭席罷、
海鷗何事更相疑。

積雨空林煙火遅し、
藜を蒸し黍を炊いで東菑に餉す、
漠漠たる水田白鷺飛び、
陰陰たる夏木黃鸝囀す、
山中の習靜朝槿を觀じ、
松下の清齋露葵を折る、
野老人と席を争ひ罷む、
海鷗何事ぞ更に相疑ふや、

と稱す、松下に多く生ず、折るも可なり、取るも可なり、學席、「列子黃帝篇」に、楊朱、老子に其の過を請ひ問ふ、老子曰く、而誰離たり、而野野たり、而誰と與にか居る、大白は辱れたるが若く、威權は足らざるが若し、楊朱雖然として容を變じて曰く、故んで命を聞くと、其の往くや、命る者即將し、家公、席を執り、妻、巾櫛を執り、命る者席を避け、楊朱、席を避けしに、其の反るや、命る者之と席を争へり、海鷗、前に辨ぜり、

【大意】雨が久しく降るを以て煙火が空林を出づること遅遅たり、人家は藜を蒸し黍を炊ぎて以て東菑に餉する人に餉送する、而して漠漠たる水田には白鷺の飛ぶあり、陰陰たる夏木には猶ほ黃鸝の

【注解】蒸藜、藜は「アカザ」、是の若葉を蒸して茹ふ、菑は、菑田なり、習靜、豫の朱越の時に、當夏否、炎埃、習靜對「花寮」とあり、佛典の修定の意味、坐禪を習修するなり、朝槿、槿は和名「ムクゲ」、落葉灌木の屬、芳枝、木槿、朝に開き夕に萎む、故に朝槿と曰ふ、清齋、或は六日間を清齋し、或は一月を清齋し、或は一年、或は一生と、肉食や軍を食はざるを清齋と曰ふ、野菜のみを以て食とするなり、露葵、俗に松露

嘯づるあり、山中の習静者は世事皆朝種の如きを觀察し、松下に於て清齋して茹ふものは露葵なり、野老は人と席を争ひ罷んで、皆、無我の境に入る、海鷗も之と親しむべきに、夏に相疑ふ如きは何ぞや、

【餘論】此の詩は、右丞集中上乘に屬する者にして、古來より歎稱せざる者無し、一二の句は田家てんかに關し、三四の句は雨中の景色を敘し、五六の句は自身の状態を敘し、七八の句は全首を總括して敘し、作法として整正の極とす、但し三四の句に就いて古來より議論あり、「古今詩話」に云ふ、王維、詩名あり、然れども好んで人の文章を取る、佳句、行到水窮處、坐看雲起時、此英華集中の詩なり、漢水田飛白鷺、陰陰夏木嘯黃鸝、李嘉祐の詩なり、大都古人の詩を誦する多く、積むこと久しうして記せず、則ち往往己が有と爲すのみ、「石林詩話」に云ふ、雙字を下す極めて難し、須らく五言七言の間、五字三字を除去する外、精神典致、全く兩言に見はれしむべし、方に工妙と爲す、唐人云ふ、水田飛白鷺、夏木嘯黃鸝、李嘉祐の詩、王摩詰竊かに之を取ると、非なり、此の兩句の好處、正しく漢漢陰陰の四字を添ふるに在り、此摩詰、嘉祐の爲め點化し、以て自ら其の妙を見す、李光弼が郭子儀の軍に將として、一たび之に號令して、精采數倍するが如し、然らずんば嘉祐の本句但是景を寫すのみ、人皆到るべし、「竹坡詩話」に云ふ、摩詰四字、下し得て最も穩切と爲す、趙松谷曰く、案するに諸家、唐の七言律を采選する者、必ず一詩壓卷を取る、或は崔の黃鶴樓を推し、或は沈の獨不見を推し、或

は杜の玉樹彫傷、昆明池水、老去悲秋、風急天高等の篇を推す、吳江の周蒙之則ち謂ふ、冠冕莊麗は、岑參の「早朝」の如きは無く、澹雅幽寂は右丞の積雨兩川の如きは無し、澹齋翁、二詩、廊廡山林の神髓を得るを以て、取つて以て壓卷と爲す、眞に古を空しうし、今に準するに足る、之を要するに諸詩皆妙處あり、譬へば秋菊春松の如く、各の一時の秀を擅にす、未だ其の優劣を辨じ易からず、或は此を掲げて、彼を抑ふるあり、多くは覽者、自ら分別を生ずるに由るのみ、之を輿論に質せば、未だ必ずしも會同じからず、今、清潭の考ふる所、松谷と全く同意見なり、老杜が風塵三尺劍、社稷一戎衣は、庾信の終封三尺劍、長卷一戎衣より來るにあらずや、而も庾信より上ること千仞の高きに在り、是古人を驅役して、古人に驅役せられざるものなり、唐の李肇の如きは、詩を論ずる資格無し、余以て取るに足らずと爲す、

過乘如禪師蕭居士嵩邱蘭若

乘如禪師蕭居士が嵩邱の蘭若を過ぎる

無著天親弟與兄、
嵩邱蘭若一峯晴、
食隨鳴磬巢鳥下、

無著天親弟と兄と、
嵩邱の蘭若一峯晴る、
食は鳴磬に隨つて巢鳥下り、

【注解】無著天親、無著は阿僧伽と名く、天親は婆伽婆と名く、釋迦牟尼佛の滅後一千年に印度の健陀羅國に生る、無著は兄にて天親は弟、

行踏空林落葉聲。

行くゆく空林を踏めば落葉聲あり、

迸水定侵香案濕。

迸水は定んで香案を侵して濕さん、

雨花應共石床平。

雨花は應に石床と共に平かなるべし、

深洞長松何所有。

深洞長松何の有する所ぞ、

儼然天竺古先生。

儼然たる天竺の古先生、

共到大乘の法を演説して、世に千部の論師と稱す、天親は始め兄と號を異にし、小乘論五百部を作る、無著の爲めに破却せられて、後、大乘に歸せし人なり、嵩邱、即ち嵩山、河南の阿南縣の西南十五里に在り、此水、寺院に湧出する水なり、松谷は

【法苑珠林】を引きて注す、今の要にあらす、雨花、花が雨るなり、雨の花にはあらす、【法華經】に天雨曼陀羅華とあり、古先生、

【西昇經】なる老釋一教を説きし經に、老子、西に昇り、道を竺乾に開き、古先生と號す、善く無爲に入り、不終不始、永く存して

無礙と、李榮曰く、竺乾は西域の國名なり、古先生と號するは、無上大道を開ふ、天に先だつて生ず、故に古先生と曰ふ、即ち老子の別

號なり、清潭曰く、釋迦が漢土に生れて老子と稱し、老子が竺乾に生れて釋迦と稱する意なれば、今は古先生を釋迦と見るべきなり、

【題義】乗如禪師が住する蘭若に蕭居士が寓居するを訪問して、此の詩を作る、竺土にて阿蘭若處と稱するは、漢譯して精舍とか、無諍處とか稱する意義となる、無諍處は即ち梵寺なり、

【大意】乗如と蕭との二人は無著と天親と兄弟して佛を奉ずると同じ、其の住する嵩山の蘭若は一峯

峭れて見はる、齋食の時響を鳴らして殘飯を鳥に施す、巢に在る鳥が其の時を知つて下る、又、經行

して空林を踏めば落葉の聲がする、甍前に進り出づる水は香案を侵して濕さん、天花は雨り來りて石

床一面に平等なり、深洞長松に何の有する所ぞと問はば、儼然として在す天竺の古先生のみなり、

【餘論】此の時は、清淨の境と、清淨の人とを錯綜して之を敘し、梵寺の詩として最上乘に屬す、佛徒は齋食の後、林中を經行して、身體の安穩を修す、三四の句之を言ひ、迸水香案を濕ほすは柔軟なり、雨花飛來するは平等なり、而して空を説くものが佛道の本旨なるに、深洞長松の下に、何物か存すと見れば、此は是石像の佛陀にてあるなり、諸説多く結句を評して謂三禪師居士即佛と曰ふは、余は之を取らざるなり、右丞の作意も、蓋し、余が考と同じかるべし、天の字二字あるは例の病なり、乾竺と改むべきなり、

春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇

春日裴迪と新昌里を過ぎ、呂逸人を訪うて遇はず

桃源一向絕風塵。

桃源一向風塵を絶す、

柳市南頭訪隱淪。

柳市南頭隱淪を訪ふ、

到門不敢題凡鳥。

門に到りて敢て凡鳥を題せず、

看竹何須問主人。

竹を見て何ぞ須ひん主人を問ふことを、

城外青山如屋裏。

城外の青山屋裏の如く、

近體詩 春日與裴迪過新昌里訪呂逸人不遇

【注】凡鳥、世説に、晉の陸康、呂安と善し、一たび相思へば、千里も駕を命ず、一日、安、康を訪ふ、康、在らず、兄の稱喜、戸を出でて之を延く、門に入らず、門上に風の字を題して去る、風を翻せば凡鳥なり、看竹、晉書王徽之傳に、吳中

東家流水入西鄰。

東家の流水西鄰に入る、

閉戸著書多歲月。

戸を閉ちて書を著はし歲月多し、

種松皆作老龍鱗。

松を種えて皆老龍鱗と作る、

微之領ち此を以て之を賞し、歌を盡して去る。閉戸著書、『後漢書王充傳』に、王充以爲へらく、俗儒、文を守り、多く其の眞を失すと、乃ち門を閉ちて著思し、鹿形の體を絶ち、戸閉鎖、各の刀筆を置き、窗衝八十五竅、二十餘萬言を著はす、

【題義】春日に友人の妻迪と共に新昌里に呂逸人を訪問したるも、逸人不在なるを以て、詩を作りて其の遺憾なるを敘す、

【大意】新昌里は桃源と同様一向に風塵の跡を絶つ、柳市南頭に隱淪する逸人を訪ふ、門に到るも敢て凡鳥の字を題する惡戯は爲さず、竹を看れば満足する、何ぞ曾て主人を問はん、城外の青山は屋裏の如きの觀あり、東家より流るる水は西鄰に入る、逸人は閉戸して書を著はし多く歲月を涉る、自ら種えし小松が老龍鱗と作る、

【餘論】此の詩は、頗る白樂天の風調に類し、右丞の高格を見る能はず、妻迪も和詩あり、今は錄せず、

の一士大夫の家に好竹あり、之を觀んと欲し、復ち與に坐して、竹下に造り、風臥良久し、主人屢掃して坐せんと請ふ、微之、顧みず、將に門を出でんとす、主人乃ち門を閉つ、

送方尊師歸嵩山 方尊師が嵩山に歸るを送る

仙官欲往九龍潭。

仙官往かんと欲す九龍潭、

旄節朱旛倚石龕。

旄節朱旛石龕に倚る、

山壓天中半天上。

山は天中を壓して天上に半し、

洞穿江底出江南。

洞は江底を穿ちて江南に出づ、

瀑布杉松常帶雨。

瀑布杉松常に雨を帶び、

夕陽彩翠忽成嵐。

夕陽彩翠忽ち嵐を成す、

借問迎來雙白鶴。

借問す迎來雙白鶴、

已曾衡嶽送蘇耽。

已曾に衡嶽蘇耽を送る、

に、老君は神虎の符を佩び、流金の鈴を帶び、紫毛の節を執り、金精の巾を巾るとあり、朱海、微の劉孝綽の詩、月殿羅朱旛、風輪和寶鐙とあり、蘇耽、漢の蘇耽が事ば異説もあるが、傳ふる所、蘇耽、嘗て異人に遇うて、神仙の術を授かる、一日、忽ち庭除を灑掃す、母、其の故を問ふ、曰く、仙道以て成る、上帝來り召す、乃ち一椀を留め、母に與へて云ふ、爾むる所即ち有り、又云ふ、明年大に疫せん、庭前の井水糞葉を取りて之を救へ、耽、鶴に乗つて仙去す、已にして果して疫す、母、日に百人を活かす、後、嘗て白鶴に騎り來りて、郡城樓の上に止まる、

【注釋】仙官、天上の仙官、仙人を敬稱して言ふ、九龍潭、『一統志』に、九龍潭は太室東麓の半に在り、

山壓の衆水、威、此に歸す、蓋し一大峽なり、峽は九疊を作し、每疊結んで一潭を爲し、遂に相灌輸す、水色洞黑、其の深さ無際なり、崖壁險峻、波濤怒激す、登臨の者、此に至りて輒ち懐然として畏を生ず、石あり或を記す、人の龍潭に遊ぶ者、語笑以て神龍を誦すこと勿れ、龍怒るときは雷の恐ありと、旄節、『廣雅』

【題義】方尊と稱する道士が嵩山に歸るを送る詩、嵩山には釋士の寺と道士の觀とあるなり、

【大意】方尊仙官は今九龍潭に向うて往き、旄節朱旛を以て飾り、石龕に倚らんと欲す、其の嵩山は高峻にして天中を壓して、天上に半を占む、其の洞は深淵にして江底を穿ちて、江南にまで及び出づ、瀑布の長流は杉や松が常に雨を帯びる如く濕ふ、夕陽の光が彩色又は翠色と變化して嵐を成す、別れに臨んで問ふ、今日歸山して再び雙白鶴に乗りて來らるるは何れの日ぞ、昔曾て衡嶽に靈靴を送りしことを思ふ、

餘論】此の詩は、全體完好の作、殊に頸腹二聯、清くして美、醜にして藉、天中、天半、江底、江南、巧を弄するに意無くして、自然の巧たるを覺ゆ、後人、此等の作法を學ぶべきなり、

送楊少府貶彬州

楊少府が彬州に貶せらるるを送る

明到衡山與洞庭

明に衡山と洞庭とに到る、

若爲秋月聽猿聲

若爲が秋月猿聲を聽かん、

愁看北渚三湘近

愁へ看る北渚三湘の近きを、

惡說南風五兩輕

惡んぞ説かん南風五兩の輕きを、

【注解】衡山、名衡嶽山、一名南嶽、一名雲山、一名天柱山、是れ安徽省霍山縣の西に在り、此の詩の衡山は湖南省衡陽縣の西北三十里に在るものを云ふ、雲山を南嶽と名け

青草瘴時過夏口

青草瘴時に夏口を過ぎ、

白頭浪裏出湓城

白頭浪裏に湓城を出づ、

長沙不久留才子

長沙久しく才子を留めず、

賈誼何須弔屈平

賈誼何ぞ須ひん屈平を弔するを、

北渚と謂ふなり、南風、夏日の風を南風と曰ふ、五兩、櫂の羽を以て五兩を重ね、櫂尾に繫ぎ以て風を候す、楚人、之を五兩と謂ふ、青草瘴、廣州記に、地、瘴氣多し、夏を青草瘴と爲し、秋を黃茅瘴と爲す、王友峯屋訓ふ、彬州夏口は皆嶽内に在り、瘴氣有るこ

たるは漢の武帝、湖南の衡山を以て南嶽と稱したるは陸の文帝とす、少府が貶せらるる彬州は乃ち湖南の桂陽郡なればなり、洞庭湖は湖南の岳州府を以て中心とす、北渚、衆流を帶約して、潭成して一川なるを之を

納る、夏秋の際、水漲りて洞庭と一と爲る、水涸るときは、此の湖先づ乾き、青草生ず、蓋城、元和郡縣志に、隋の文帝、陳を平らげ、江州總管を置き、理を益城に移す、古の益口城なり、今日は江西省の九江府に屬す、長沙と彬州とは同じく湖南に屬すれども、里程は數百里を隔つ、賈誼を出ださんとして、長沙の字を用ひたるなり、故に彬州と言はず、長沙と言ひたるなり、賈誼は洛陽の人、李斯は其の學を典公に傳へ、典公は賈に授く、漢の文帝、召して博士と爲す、起遷して大中大夫に至る、賈、正朔を定め、服色を易へ、法度を制し、禮樂を興さんと請ふ、大臣の忌む所と爲り、出でて長沙王の太傅と爲る、廢王の太傅に遷りて卒す、年三十三、湘水を度るに及んで、弔屈平賦を作り、屈平に託して以て我が不平を歌ふ、

【題義】楊が彬州知府の助役即ち少府と爲りて貶せらるるを送り、其を慰安するなり、

【大意】明日は京を去つて衡山と洞庭湖の邊に到るならん、若爲んぞ秋月を觀、又猿聲を聽くに堪へんや、目は愁を以て看る北渚三湘の近きを、口は惡んぞ説かんや、南風五兩輕しと言ふことを、廣東

の風土病たる青草瘴の時、夏口を過ぎ、白頭浪の高き裏に湓城を出づるならん、而かも長沙の邊地には久しく才子を留むることは、朝廷必ず之を不可とせん、買置は不平の氣を以て弔屈平一賦を作りしも、君は買置に倣うて不平を訴ふべからず、

【餘論】此の時、衡山、洞庭、北渚、夏口、湓城、長沙等、山名、地名、層層として出づ、而かも煩を覺えざるは、所謂運用の妙あればなり、太白の峨眉山月の七絶と比すべし、青草瘴を疎瘴は青草限の訛ならんと、通せざるにはあらず、蓋し湖南と彬州は廣東に接近して、嶺内と稱するも、瘴氣は多きならんと想像しての句なれば、余は漲を取らずして瘴を取るものなり、

出塞作

出塞の作

居延城外獵天驕、
白草連天野火燒、
暮雲空磧時驅馬、
秋日平原好射鵬、
護羌校尉朝乘障、

居延城外天驕獵、
白草天に連り野火燒く、
暮雲空磧時に馬を驅り、
秋日平原好し鵬を射る、
護羌校尉朝に障に乘じ、

【注釋】居延城、居延は地名、漢は驪、張校尉に屬す、都尉治と爲す、今日の甘肅酒泉の邊、外蒙古に屬す、天驕は匈奴を曰ふ、匈奴の剛驕は天の許す所と彼等は稱するなり、空磧は青草空しく、唯沙磧のみなり、護羌校尉、漢武の設けし官名、張は二

破虜將軍夜渡遼、

破虜將軍夜遼を渡る、

玉靶角弓珠勒馬、

玉靶角弓珠勒の馬、

漢家將賜霍嫖姚、

漢家將に霍嫖姚に賜はらんとす、

千石、節を持って以て四夷を誅するなり、乘障、乘は登るなり、障は塞上敵要の處を別に築きて城と爲し、因つて吏士を置き、障蔽と爲して以て寇を拒ぐを謂ふ、破虜將軍、破虜の將軍にて、官名にはあらず、塞上防禦の將軍は、皆破虜將軍なり、渡遼、遼は所謂遼東なり、【漢書】に、遼東の烏桓反す、中郎將范明友を以て渡遼將軍と爲し、之を擊たしむとあり、靶は射の革、即ち人の執る所、霍嫖姚、漢の霍去病は年十八にして侍中と爲り、騎射を善くす、大將軍に従つて嫖姚校尉となり、虜を擊ち、大將軍を棄てて、數百里深く入り、以て首虜を斬捕す、

【題義】右丞が御史と爲つて、塞上を監察する時の作とす、

【大意】居延城外に天驕の徒が獵せんと欲す、白草は天に連り、之を野火を以て燒く、暮雲飛ぶの時、空磧の上を馬にて驅逐し、秋日平原に於て好し鵬を射るに、護羌校尉は朝に障上に登り、破虜の將軍は夜遼水を渡る、玉靶や角弓や珠勒の馬、誰に之を賜はらんとするや、漢家は破虜の大功ある霍去病の如き人に賜ふなり、

【餘論】此の詩に、前半拗して作る、明の王弼州評して曰く、甚だ佳、馬字を兩犯するにあらずんば、當に壓卷とすべきに足る、謝廷環曰く、驅馬は驅雁に作るべし、證するに、鮑照の秋霜曉驅雁の詩と、「洛陽伽藍記」の北風驅雁、千里飛雪との二を以てす、趙松谷曰く、驅馬、射鵬、皆塞外射獵

の事、若し驅雁に作らば、上下の句を全く貫申せず、詩中複字は初盛唐の名手、往往忌まず、我國の三浦梅園は「詩轍」に於て曰く、此の詩空の字、將の字、馬の字、各の二、連空（連天を梅園は連空とせり）の空は天といふが如く實字なり、空嶺の空は「ムナシキ」にて虛字なり、將軍の將は「ヒキキル」にて官名なり、將賜の將は虛字なり、傍犯忌まず、只此の馬の字實字なるを以て、重複とす、よく出来たる詩なれども、瑕となる事を古人も惜めり、黄培芳は「唐賢三昧集」の評に、氣體甚好、然れども卻つて是聲屋瓦上より震はざる者、此雅筆俗筆の分、精氣靈氣の別、之を辨せん、虛字多用する、固より不可なり、亦全く用ひざるも不可なり、斟酌宜しきを得、是善學に在り、

聽百舌鳥

百舌鳥を聴く

上蘭門外草萋萋

上蘭門外草萋萋

未央宮中花裏栖

未央宮中花裏に栖む

亦有相隨過御苑

亦相隨つて御苑を過ぐるあり

不知若箇向金隄

知らず若箇か金隄に向ふことを

入春解作千般語

春に入りて千般の語を作すを解し

【注解】百舌鳥は和名、モズ、伯勞の一種、一名を反舌と曰ふ、全身黒色、喉、甚だ尖る、鳴聲圓滑、人家、之を畜ふ、冬に至りて、則ち死す、上蘭は觀の名、上林苑に在り、漢の元后は深宮に居ることを厭ひ、上蘭に校獵すと「漢書」に在り、金隄、水の隈、壁うして金の如しと

拂曙能先百鳥啼

曙を拂うて能く百鳥に先つて啼く

萬戸千門應覺曉

萬戸千門應に曉を覺るべし

建章何必聽鳴雞

建章何ぞ必ずしも鳴雞を聴かん

の意なり

【大意】上蘭門外は草色萋萋たり、未央宮中花裏に栖む、後宮が御苑を過ぎるときは、之に随つて行くこともあり、知らず若箇か金隄に向つて飛ぶや、春暖に入つてから種種の鳥の語を爲す、曙色を拂うて外の鳥よりも早く啼く、萬戸千門皆此の鳥の爲め曉を覺る、建章宮は何ぞ必ずしも鳴雞を聴くを要せん、

【餘論】未央の央を仄聲として用ふ、詩として論すべき箇處無し、

王右丞集卷十終

309
65

正 時 表 卷 十 終

【附註】本表の数字は、明治十一年の調査によるものである。其の詳は、本表の序文に記す。又、本表の数字は、明治十一年の調査によるものである。其の詳は、本表の序文に記す。又、本表の数字は、明治十一年の調査によるものである。其の詳は、本表の序文に記す。

明治十一年の調査によるものである。其の詳は、本表の序文に記す。又、本表の数字は、明治十一年の調査によるものである。其の詳は、本表の序文に記す。又、本表の数字は、明治十一年の調査によるものである。其の詳は、本表の序文に記す。

終